
『Dragon Sword Saga 1』 旅の仲間（前編）

かがみ透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Dragon Sword Saga1』旅の仲間（前編）

【Nコード】

N2464V

【作者名】

かがみ透

【あらすじ】

中世風の異世界に、共存する人間と異種族。

世界中に沸き出す次元の穴、すなわち、魔物の棲む魔界と人間界をつなぐ通路から、近年増加する魔物たちに、人々は、怯えて暮らしていた。

普段はよろず屋、実は二つの伝説の剣を持つ青年傭兵ケイン。

穏やかで、無欲な彼を、伝説の戦士と信じて付いていく妖精ミュミユ。

彼らは、とあるさびれた町を訪れる。

町をおびやかす魔物を、頼まれもせずに倒しに向かう途中で出会った、魔法剣を持つチャランポランで軟派な傭兵カイルと、巫女の美少女クレアと共に、そこで目にしたのは、想像をはるかに越える巨大な魔物だった！

異次元から、雷獣神を呼び出すという、最強の召喚魔法を操る、美少女戦士マリスと、美青年魔道士ヴァルドリユーズのコンビに、次元の穴を塞ぐ旅の同行者として雇われたケイン、魔法剣の傭兵カイルと、魔道士見習いに転向した巫女のクレアが加わり、旅のご一行が結成される。

剣の腕もあり、東洋の武術をも身に着けた凛々しい少女戦士であり、紫の瞳を持つ、エルフのような神秘的な魅力のマリスに、ペースを乱されながらも、旅は続く。

一行が向かったのは、魔物出現が噂されるアストーレ王国だった。

魔道士参謀と、折り合いの悪い高位の貴族たち。

近隣諸国の王子たちが招かれた華やかな舞踏会で、ケインたちは、奇妙な事件に巻き込まれてしまう。

王女誘拐から始まったその事件は、果たして解決するのか？

※自作サイト『Mystic Rhapsody』、ミステイク・ラプソディー』、投稿サイト『20代から中高年のための小説投稿&レビューコミュニティ』にも、掲載しています。

さびれた町 Ⅰ

???それは、偶然のような必然の出会い。

時同じくして、たあいもなく、惹き合った、同志。
運命を共にする者。

炎と風、月、樹の力が、光を護りて、闇を切り開く。

強すぎる光は闇を呼び、闇にあつてこそ、最も輝きを増す。

闇は、光に引き寄せられる。

己が滅ぶのを知らずしてか???。

闇は、光の届かぬ隙間???光の通らぬ場所、時???忍び寄る病魔
の如く、心に付け入る悪魔のさざなみ???。

地に住まう者、限りなく光に近く、闇に近い。

異界の大いなる存在に、成す術なく従う。

異界の力、地に住まう者に、限りなき力となる。

さあ、妖精の子供よ、行きなさい。

正しき剣を持つ者に、
正しき心を持つ者に、
悪しき魂打ち砕く為、

その身を委ねん者に、

傷を癒し、心を癒し、

知恵と勇気を授けるのです。

そうして、勇者を伝説へと導くのです。

??妖精女王フェアリア

プロローグ

閃光とともに、ドラゴンが駆け抜ける！

マントの男は、眩しさに、思わず目を細める。

見たことのない技であった！

ドラゴンも、覚えにあるものとはどこか違う。なんとも説明もつかない形状である。

強いていうなら、黒く、巨大な影。

魔道士の召喚術ではない。だが、明らかに、魔法であると解釈した。魔法であるなら、防ぐ絶対の自信はあった。

男は、強大な力を誇る、魔道の士であるのだ。

が??!

自分の身に起きたことを理解する。

空を駆けていたはずのドラゴンが、瞬時にして、己の身体を通り抜けて行ったことを！

男は、その場に崩れ落ちた。まるで、マントだけが地上に降り立ったかのように、ふわり、と。

「バカな！？ 貴様ごときに、この私が……！」

しわがれた呻き声が、息も絶え絶えに、体液を伴って絞り出された。マントの中から、皺だらけの手が、目の前の青年の背に向かって？ 背負った大剣に向かって、伸びていく。

その手は半透明であり、もはや、存在し兼ねていた。

「な、なぜだ……！？ 貴様は、ただの……！」

「そう。よろず屋だ」

青年は、背を向けたまま、構えていたロングソードを腰の鞘に納め、去って行った。

ドラゴンは、既にいなかった。

黒いマントだけが、風に吹かれ、残っていた。

？．さびれた町　〈1〉

深い緑の山肌が見守る、モルデラの町？？。

町と呼ぶには規模は小さく、村という方が適切かも知れなかった。村の大通りでは、人々があくせく働くようでもなく、時折、荷馬車ガラガラと音を立てて通り過ぎるくらいのもので、世間話をしているわずかな人々、道端に腰掛けて居眠りをしている老人などが見られる。

旅人からすれば、長閑で、のんびりとした、ゆったり流れる時間の中にいるような思いにかられる。

といって、好感を持つには、少々違う。

その村には、活気があまり見られないことが、どうにも引つかかる点であった。

そこには、ある種のあきらめが感じられるのだった？？！

「おい、よろず屋！ 今度は、こっちを頼むよ！」

大柄な、村の男が呼び止めた人物が、振り返る。

年の頃は、一八。栗色の髪に、深い青色の、端がネコのように上がった大きな瞳。

背丈は、一八〇センチ以上はあり、辺りの村人よりも高く、細身だが、鍛え上げられ、引き締まった筋肉を防具で囲んだ様子から、一目で傭兵とわかる。

もう一つ、彼を傭兵と決定付けるのが、腰に下げた剣と、それとは別に、背中に背負っている、布を巻き付けた剣であった。

それは、傭兵であっても、各国の騎士たちであっても、見たことのない大剣であった！

地面から、彼の腰までであろうかという刃渡り、柄は胸までであると思われるその剣は、誰がどのような目的で鍛えたのか。

異様なまでのその大きさには、恐ろしさを孕んでいるようで、得体が知れず、村人でなくとも、脅威であった。

青年の、年齢よりも若く見える、幼い顔立ちには、あまりにも不釣り合いである。

否、彼を見た者は、彼が傭兵であること自体が、不釣り合いに思えるのであった。

故に、そのような大きく重厚な大剣を持ってしても、誰もが彼を危険人物とは見なしていないのを証明したのが、村の男の横柄な態度であった。

男は、用事を言いつけると、往来で構えていた、囲いのない店に戻る。

若い傭兵は、溢れんばかりの布の入った洗い桶を預かってから、人通りから離れていった。

「今度は、川でせんたくなのー？」

からかうような、呆れるような響きを持って、聞き慣れた甲高い声が、傭兵の耳の近くでした。だが、姿はない。

「ああ。なんだか、すごい匂いだな。漬け物を絞った布らしいな」傭兵は、手慣れた仕草で、冷たい水の中、洗濯をこなしていく。

「もー、昨日は畑仕事だったしい、その前はどろぼうを捕まえたしい……この前の村じゃあ、ブタ小屋のそうじだってしたよねえ？」

しかも、いつもいつも『そのために雇ったんだから当然だ』……とか言われて、かんしゃもあんまりされなかったしい……

こんなことばかりしてて、どこが『伝説の勇者』なのさ？」

姿は見えないが、その喋り方から、声の持ち主である小さな女の子は、おそらく、唇を尖らせていたに違いない。

「人の役には立ちたいけど、別に、感謝されたくて、よろず屋やってるわけじゃないからさ。いくさがない時はヒマなんだし、こういうことだって、自分を鍛えてることにもつながるんだから」

「……って、ケインたら、そういつて、悪いこといがいは、なんでも引き受けてるけどさ、ミュミュはたいくつだなあ。はやく、伝説らしいことしてよー」

傭兵??ケインは、苦笑いした。

「だから、言ってるだろ？俺は、伝説の戦士だか勇者だか??なんてもんじゃないって。ただの傭兵だよ。ま、一応、正義の心っていうか、自分の信念でものはあるけどな」

冗談混じりに言うケインに、声は、ため息混じりに返す。

「だったら、ケインのやりたいことって、なんなのさ？」

ケインは、得意気に答えた。

「そりゃあ、俺にだって夢はあるさ！

世界最大の遊園地『ゴールドランド』で遊んでみたいってな！」

??しばらく、沈黙が流れる。

が、ケインは続けた。

「戦争が始まったら、こちとら若くても、いつ死ぬかわからない身だぜ？ その前に、一度くらいは行ってみたいと思うくらい、いいだろう？

ただ、むつつつちやくちや、お金がかかるらしいから、こうして資金を稼いでおかないとさ。

……でも、俺って人がいいから、ついつい報酬マケちゃうんだよなあ。イイ人って、ほんっと、損だよなー。あははは！」

小さなため息の後？？

「……もしかして、ミュミュ、間違えたかなあ……」

「そうそう、ミュミュの勘違い」

「んもう、ケインのバカ！」

声は、そのままどこかへ行ってしまったのか、ケインには、もう気配も感じられなかった。

彼は、たいして気にも留めず、鼻歌を歌いながら、洗濯を続けた。

一方で、人の運命を変えてしまうかのような、巨大な力の動かす歯車が、あちこちでかみ合い、重苦しい軋みを上げて、ゆっくりと回り出す……！

そのことに、まだ彼は気付いていなかった。

彼に限らず、そのような波動は誰にも感じられはしない、実に、たあいもない出来事のようなであったのだ。

彼は、看板こそあるが、ひっそりと佇む、地味な食べ物屋兼酒場に来ていた。ウキウキと、夕飯を食べに。

無愛想な店員に、『トリの香草蒸し定食』というのを注文してみた。

が、あまり美味しいとは思えなかった。店構えからして予測はついていたが、美味しいものを造ろうという意欲が感じられない味であった。

（なーんか、この町って、どうも退屈なんだよなあ。さっきの洗濯以外、今日は仕事も来なかったし。明日の朝早く、ここを立つか…）

楽しみにしていた夕食ですら、このような有様で、ケインは、がっかりした。

「何でも、アストーレでは、王女の誕生日のパレードがあるらしいぜ。その警護を強化するために、警備兵の人数を増やすんだとか。普段の護衛じゃ追いつかないから、多少は募集してるみてえだぜ？」

「へえ。誕生日なんかで、いちいちパレードなんかするのかよ？ 王族の考えることなんざ、オレにゃあ、まったく理解出来ねえな。オレの誕生日なんか、誰が祝ってくれたかってんだ」

隣のテーブルで、旅の者同士の会話が耳に入った。

（アストーレ王国とは、このモルデラのあるモアール公国の隣だったな。そこなら、もっと大きな国だし、仕事ももうちょっとありそうだな…）

そう考えながら、ケインがトリを最後までつついて食べていると、「よおよお、ねーちゃん、何て名前？」

ふと、若いウェイトレスに、ちょっかいを出している男に、目が留まった。

男は、肩まで伸ばしたストレートの金髪に、額には黒いバンダナを巻き、すらりとした体型をしていた。

（へー、なかなかのイケメンだな）

さらに、ケインは観察する。

腰には、宝飾品を鏤めた鞆に納めた剣を下げている。随分と高価な代物で、ケインと似たような年頃のその男の持ち物としては、こちらでも不釣り合いである。

この男も、傭兵であるらしいことは見当が付いた。

（しかし……、軽薄な態度が戦士の風上にもおけないヤツだな。あんな分不相応な高価な剣も、アヤシイし。盗んだとか、奪ったとかか？ あの女の子にもっと絡むようなら、よし、この俺が、少々注意を……！）

と、思ったその時であった。

ボタン！

ドアが開き、外からの強い風と共に、二つの黒い影が現れた！

一人は、男にしては小柄であった。黒いマントをはおり、黒い兜で顔は見えなかった。

剣を下げていることから、剣士だということは一目瞭然だ。兜から覗いた鋭い眼光が、辺りを油断なく伺っている。

（こいつは、できる……！）

金髪傭兵のことはさておき、その男と、そして、一步後ろから入ってきた男の存在感に、ケインは注目した。

後ろの男は、かなりの長身であった。頭からすっぽりとフード付きマントに身を包んでいて、やはり、全身黒づくめである。ゆつくりと、地を踏みしめる際に、マントが揺れ、浅黒い肌が覗く。

（ふーん、こっちの男は、なりからして神官か、殉教者、または魔道士か……）

だが、ケインの勘では、神官のイメージからは、ほど遠かった。その男からは、白ではない、黒の気配が、決して肌の色のせいではなく、にじみ出ているように思えたからであった。

無言で、彼らを目だけで追っていく。

二人がテーブルにつくと、小柄な剣士のマントの裾から、銀色の甲冑の足が現れた。

雇われ傭兵の身に身に着ける、部分的な防具と違い、いかにも頑丈な、それでいて軽そうな、かなり良い物であると思われる。

あの甲冑は、どこかの軍で、支給されたんだろうか？ こんな村には、軍隊などは、なさそうだし、？？というと、ヤツは、お忍びでここへ来ているか、または脱走兵か……？ それに、あの兜。食

事の時も外さないとは。アゴの部分だけ下げられる作りにもなってるな。やっぱり、顔を見られたくない理由があるんだろうな。あれも、安物じゃなさそうだし……。口元だけ見ると、意外と若そうだな……。などと、ケインの想像は膨らんでいく。

定食は、どう探しても、もう食べる箇所はなかった。

店を出てから、ケインは体を伸ばした。辺りは、暗くなり始めている。

（さーて、それじゃあ、食後の運動と行くか）

昼間背負っていた大剣は、宿屋に置いてきていた。行く先々で人々を驚かせてしまい、警戒されて、店に入れてもらえないのも困るので。

しかも、あの大剣は、普通の人間には重た過ぎ、使用するのとは不可能であるし、人目にも付く分、盗まれる心配もしていなかったのだった。

今は、腰に下げた、一見ただの普通のロング・ブレードに見える剣のみである。

（さあて、下等モンスターのいる裏山とかは……？）

辺りが暗くなると、人里離れたところには、下級のモンスターが湧いてくるのは、どの国でも同じだった。山道や、自然の中などによく見られる。

ただし、彼が気になるのは、最近、どうも数が増えたことと、下級では済まないものまで出現することもある？？ということだった。通常、モンスターを斬るには、剣に、『魔除け』の護符やアクセサリーを着ける、または、神官や魔道士に『魔除け』の魔法をかけてもらうかであった。

しかし、そのどちらも、彼には必要なかった。

彼が持っている剣は二つとも、人の造ったものではなく、魔物にも有効であったのだから。

そして、今持っているロング・ソード??ドラゴン・マスター・ソードを手に入れてから、ミュミュと出会い、旅を続けているのだった。

(ミュミュとの付き合いも、もう二年くらいになるんだなあ。……そう言えば、あいつ、どこ行ったんだ? 今までも、勝手に消えていきなり出てきたりしてたからな。ま、いっか)

そんなことを思いながら暗い方、暗い方へ向かっていくと……。

「もし、そこのお方」

何か声をかけられた気がしたが、そのまま進もうとしたケインに、
「もし、その、背の高い、明るい茶色の髪をした、青い服の、見たところ、まだお若い旅のお方」

(……)

そこまで形容されては、彼も、振り向かないわけにはいかなかった。

そこには、村人であろう、白いひげを腹まで伸ばした、背の丸い老人が、心配そうな顔で立っていたのだった。

「今から、あの山を超える気かね? 悪いことは言わんから、やめなされ」

ケインは、にっこり笑ってみせた。

「大丈夫だよ、爺さん。俺、こう見えても、一人前の剣士なんだぜ。モンスターの一〇匹や二〇匹、どーってことないぜー!」

老人を、安心させようと、明るく言ったつもりだったのだが、ケインの思いに反して、老人は驚いて目を見開き、声を荒げた。

「何を言うんじゃ! そんなことをすれば、たちまち魔獣ドラド様のお怒りに触れてしまう! いかんいかん!」

「は? 魔獣ドラド?」

拍子抜けしたケインをよそに、老人は、山の方へ目を向けて、一度まじないの言葉のようなものを呟くと、またケインに視線を戻した。

「あの山の、てっぺんにある洞窟の中に済んでいる魔獣様で、ホツカイグマくらい大きくて、凶暴な肉食獣じゃよ。」

昔、ある時期になると村へ降りてきて、田畑や建物を荒らしているのです、村長と祭司長様が知恵を絞り、対策を考えたとのじゃ。

それは、その時期に、魔獣に生け贄を捧げる、ということじゃった」

「生け贄……？ そんな時代錯誤な……？」

「時代錯誤とは何じゃ！」

老人は、何も知らないケインに、「仕方がないのう」と言いながらも、どこか張り切ったように、くどくどと説明した。

「生け贄には、いろいろなものを試したそうじゃ。ブタやウマ、ヒツジなどの大型動物から小動物、コメや農作物なども。」

しかし、いずれも効果はなく、村は大損害に見舞われておったのじゃ。

そんなある時、この村のまだ巫女見習いの少女が、自ら進んで生け贄になったところ、その年は、魔獣が村へは降りて来なかったそうなの。

そして、時々ちよっかいを出しに来ていたモンスターたちも、姿を見せんようになったということなのじゃ。ありがたや、ありがたや！」

よほど感謝しているのか、老人は手をすり合わせて、目には涙すら浮かべていた。

「以来、毎年、若い女性の生け贄を捧げ、モンスターたちは村へ来なくなり、わしらも山へは入らなくなった。そのような暗黙の契約のもとに、この村は、こうして、魔獣様と共存しておるのじゃよ」

あんぐり口を開けて聞いていたケインであった。

「ありがちな言い伝えだけど、今時そんな話が……？」

「それが、あるんだってさ」

知らない男の声が、老人の後ろから聞こえた。

男が進み出ると、ケインには見覚えのある、先ほどの店にいた、

金髪の軟派な傭兵であった。

「魔獣サマは、どういうわけだか、若い女しか食いたくねーんだっ
てさ。人間の男ならともかく、魔獣なんかがよー」

傭兵は、面白くもなさそうに、顔を歪め、下品な笑いを浮かべた。
ハンサムが台無しだった。

「これ！ 口を慎まんかい！ まったく、これじゃから、よそモン
は？？！ おお、おそろしい！」

老人は、またまじないの言葉を唱えた。

「じいさん、その魔獣って……本物なのか？」

トボケたケインの質問に、老人は、またとんでもないことを言い
おって！ という顔になった。

「本物に決まっつとるじゃろーが！」

「誰も退治しようとはしないのか？」

それには、老人は、力なく首を横に振り、ため息をついた。

「皆、やられてしもうたんじゃよ……」

同情する間もなく、傭兵が「けっ」と言った。

「腕の立つ男たちはやられ、若く美しい女たちは食われ？？どうり
で、この村には活気がねーと思ったら……。しょーがねえ、こうな
ったら、少々不細工でも我慢してやるか」

「……おい、何の話だ？」

ケインは、呆れた顔で、傭兵を見た後、気を取り直して、老人に
向き直った。

「その魔獣、俺が退治して来ようか？」

ケインの何気ない、親切心から出た言葉に、老人と金髪傭兵が目
を丸くした。

「お、お、お前さんなんぞの勝てるお方ではないぞ！ ほんに、お
そろしいお方なのじゃ！ それどころか、魔獣様のお怒りで、この
村は全滅し兼ねないじゃろう！ やめておくれ！」

悲痛な叫びを上げ、老人はケインの腕をつかみ、揺さぶった。

だが、ケインの中では、ふつふつと熱い思いがこみ上げて来てい

たのだった。

「そんなこと言っちゃって、このまま放っておいていいわけじゃないじゃないか！ いずれこの村ごと獲って食われるぞ？」

ずっと怯えたまま、ただ死ぬのを待つだけでいいのか！？ そんなのはだめだ！ 誰かが魔獣を倒さなくちゃいけないんだ！」

そばにいた金髪の傭兵は、呆気に取られて、ケインの顔を見つめている。

立派な剣を持っていながら、その傭兵も魔物を退治しようという素振りもないことに、やはり、カッコだけの軟派なヤツだったかと、ケインは一瞥した。

「……仕方がない。祭司長様のところに、相談に行ってみなされ。どうしても行くと言うのなら、せめて、『魔除け』くらいはして頂けるじゃろうからな」

白いひげの老人は、あきらめたように、ケインを祭司長の家へと案内したのだった。

「何！？ 魔獣ドラド様を退治するじゃと！？」

白い、飾り気のない法衣に身を包み、頭にも白い帽子を被った祭司長が、まじまじとケインを見詰めた。

案の定、彼は、そんな考えを持つなと怒られた。

そういうことなら、この町を出て行くようにとも言われた。

ケインなりに説得を試みたのだが、同じことばかりを繰り返す彼らには、途中で無理だと悟った。

本気で取り合うことに、いい加減うんざりしてきた彼は、もう祭司長を説得するのはあきらめた。

「よくわかりました。では、これからこの村を出て、他の国に行くことにします」

深々礼をすると、ケインは、部屋の出口に向かって歩き出した。

「……そんなことを言って、本当は山へ行くつもりではあるまいな？」

ケインの足が、ピタツと止まる。

(……鋭いな、このじいさん)

彼の行動は、祭司長に読まれていた。

「おぬしがちゃんと次の町へ行けるように、見送らせよう。」

クレア、この方をタルムの町まで、ご案内なさい」

その祭司長の呼びかけで、隣の部屋から出て来たのは、淡い色の神官服を着た、ケインと同じ年頃の、黒く艶やかな長い髪に、黒曜石のような瞳の、美しい少女であった。

目鼻立ちが整っていることもそうだが、憂えた色を浮かべた瞳が、月のように控えめな美少女を印象付ける。

ケインは、いったん宿屋に戻り、大剣と荷物をまとめると、宿屋をチェックアウトした。

それから、クレアとモルデラの村を出た。

(タルムの町を越えると、アストーレに出られるな)

そこでクレアと別れてから、また戻ればいい……などと、思考を巡らす。

彼女は、巫女の服装の上に、黒いフード付きのマントを羽織っていた。ケインの大剣には、思った通り驚きを隠せないでいたが、おそるおそる切り出した。

「さっき聞こえたのですが……、あなたは、魔獣ドラドを倒しに行こうとしていたのですか？」

「ああ、さっきはな」

もうあきらめたような口調を装う。

しばらく無言で歩いた後、再びクレアが切り出した。

「ドラドを知っているの？」魔獣の名前は、村長が名付けたらしいことがわかった。

「いや。さっき、村のじいさんから、クマくらいの大きさの、凶暴な肉食獣だって、聞いたただけだよ」

クレアは、憂鬱な面持ちになった。

「それも、あくまでうわさであって、今、この村にいる人で、魔獣を見た者はいないんです。でも、毎年、若い娘は生け贄に捧げられてるんです……」

ケインは、ちらっと、クレアを見た。

「……私の番だって、……いずれ回ってきます」

「えっ？ きみ、祭司長の娘なんでしょ？ 例外なしってわけ？」

思わず立ち止まるケインに、クレアは、首を振った。

「いいえ、私には、身寄りがなくて。ただ、祭司長様のお手伝いをしているだけです……」

言ってから、クレアは足を止めると、一層思い詰めた顔になった。

「私……、こんな状態、もう耐えられないんです！」

彼女は座り込んで、両手で顔を覆った。

「村の人たちは、どうして平気でいられるのか、わからない。次は、自分たちの娘や孫が食べられてしまうかも知れないっていうのに、なぜ、何も手を打とうとしないの！？」

ケインは、片膝を着くと、クレアの肩に手をかけ、静かに尋ねた。

「きみは、魔獣ドラドを倒すことに？？賛成なのか？」

クレアは、それには答えなかった。

「ドラドの情報が正しいのかどうか、偵察に行くくらいは構わないだろ？」

明るい調子のケインの声に、クレアは思わず顔を上げた。何かを決心したような顔だ。

「もし、……あなたが行ってくれるというのでしたら、私もついて行きます」

「えっ！ それは、ダメだ。危険だよ！」

焦るケインに、クレアは強く、首を横に振った。

「どちらにせよ、もうすぐ食べられてしまうんです。何もしないうちに、そんなのって耐えられないわ！」

それに、私、剣は使えないけど、白魔法？？傷を癒す呪文は使えます。いれば、何かとお役に立てると思います」

なるほど、おとなしそうに見えたけど、意外と芯はしっかりしてるのかも？ と、ケインは感心した。

その時、

「誰だ！？」

ケインは、クレアを後ろへ庇い、いつでも抜けるようマスター・ソードの柄を掴むと、気配を感じた道沿いの木を睨み据えた。

すると、木の周りに生えている草を踏みならしながら、ひゅーという口笛が聞こえる。

「俺だよ、俺」

例の金髪の傭兵が、にやにやしながら出て来たのだった。

「何のつもりだ？」

ケインは、油断のない目で、まだ剣に手をかけたまま、傭兵を見る。

「おいおい、俺は敵じゃないって。そんな物騒なマネなんかすんなよ」

傭兵は、困ったように笑っている。

「お前さんが、魔獣を倒しに行くんだったら、ヒマ潰しに見学でも……と、ここで張ってたんだよ。そしたら、こんなかわいい女の子付きなもんだから、びっくりしちゃってさ」

（驚いたのはこっちだ、バカ！）

ケインは、傭兵のおどけた調子に、多少の警戒心は解いたが、完全ではなかった。

「冷やかしなら、やめろよ。魔獣ドラドは、どんなヤツかわからないからな。偵察するだけとはいえ、お前も怪我をする前に帰れ」

真面目なケインの表情とは対照的に、傭兵は面白そうな顔をして、また「ひゅー」と口笛を鳴らした。

「よおっ！ にいちゃん、カッコいいぜー！」

彼は、手を叩いて、喜んでいるような、冷やかしているような、であった。

呆れているケインの横で、クレアが、キッと傭兵を睨みつけた。

「ちょっと、あなた、私たちは真剣なんです。からかわないでください！」

傭兵は、バツの悪そうな顔をして、からかう素振りはやめ、小さく呟いた。

「……だからさ、……俺も手伝ってやるよ」

気恥ずかしそうな彼の態度と言葉に、ケインは驚いた。

「は？ 魔獣退治を……か？ お前が？ ……何で？」

「安心しろよ。この剣にかかっちゃあ、魔獣だろうが何だろうが、ちよちよいのちよいだぜー」

傭兵は、なんだか意気込んでいるが、ここで、ケインは素朴な疑問を投げかけた。

「それはすごいが、……お前、強いのか？」

「お前こそ」

三人の間に、沈黙が流れるが、

（まあ、いい。今は偵察なんだ。こいつが弱いとわかれば、本番で連れて行かなきゃいいだけだ）

と、ケインは思い直した。

「とにかく、この件では、この三人が仲間ってことだな。

俺は、ケイン・ランドール。見ての通り、旅の傭兵だ。よろしくな」

「巫女のクレア・フローディアです」

「俺は、カイル・アズウェル。よろしくな！」

と、長髪をかき上げて、彼は、クレアに言った？。？。

さびれた町　　（２）

「頂上の洞窟って、あそこのことかな？」

どのくらい歩いただろうか？ モルデラの山は、なだらかで助かるなどと思いながら登っていくと、開けたところに出て、その先には、洞穴のようなものも見えた。

クレアが、皆の体全体に『魔除け』をかけたので、三人には下等モンスターたちが近付いてくることもなく、ここまで安易に辿り着けた。

三人は、離れたところから、様子を伺っている。

「おい、聞いていたより、かなりデカいんじゃないか？」

カイルが不安そうな声を出した。

野郎、もう怖じ気づいたか！？ と、思うケインからしても、確かに、彼らの想像以上に、それは大きい！

魔獣ドラドは、クマくらいの大きさと聞いたはずが、洞穴は入り口だけでも、宿屋一棟分はあるのだった。

よく山が崩れないか、皆、不思議に思ったが、そこは魔獣のなせる技なのかも知れないと、自分たちを納得させた。

だが、魔獣らしきものの姿は、一向に見当たらない。

「……留守なんじゃないか？」

カイルのボケには、皆、無視した。

辺りには、小動物の気配すらない。

ケインは、足元にあった小石を、洞穴の入り口めがけて放ってみた。

……。

何の反応もない。

石の転がる音さえも。

もしかして、あの穴は？？！？

ケインが二人に忠告しようとした途端？？！

クレアとカイルが驚嘆の声を上げた。

洞穴の入り口が、蜃気楼の様に、ゆらりと揺れたかに見える、大きな灰色の塊が現れた！

「やっぱり、そうだ！ あの洞穴は、魔空間につながっているんだ！ 魔獣ドラドが、ここを魔界とを行き来するための……！」

「なんだって！？ ケイン、何でお前、そんなことを……！？」
カイルのケインを見る目は、もうただの傭兵に対してとは違っていた。

（やっぱ、俺の睨んだ通り、こいつは……魔に慣れてやがる……！）

困惑の中にも、カイルの瞳は、確信に輝き始めたのを、ケインは気付かなかった。

初め、グレーに見えたその塊は、徐々に形を成していき、だんだん黒い縞模様が浮かび上がってくる。

そのうち、黄色く光る眼らしきものが、カッと見開いた！

頭上の耳は、炎のように上に向かって伸び、黄色く邪悪な色を帯びた大きな一つ眼、口は牙を剥いて耳まで裂けた、四つ足の化け猫のようなものが、そこにいた！

「ま、まさか、……あれが、魔獣ドラド……！」
ケインもカイルも、あの村の老人言うことを、話半分だと思っていたが、全く違っていたと思い知ったのだった！

ドラドは、洞穴の入り口とほぼ同じ大きさ……つまり、宿屋一棟分はあったのだった！

魔獣は、何となく、本能で敵が潜んでいるのを感じ取っているのか、落ち着きなくうろうろしていた。

「なあ、あいつ、まさか、俺たちのこと、勘付いたんじゃない……？」

カイルが、弱気な声で、二人を見る。

クレアも、おろおろして、ケインを見つめた。

ケインは、ドラドから眼を離さずに、冷静に言った。

「ああ、おそらく、ヤツは、感じてるんだ。俺の、この『魔物斬りの剣』に反応してる。

モンスターどもは、皆そうだからな」

そうケインが言いながら、背中の大剣を降ろし、巻いてある布を静かに解いていくと、

カイルも眼を見開いていく。

「なんだと!? ？？ってことは、お前の剣のせいでバレてんじやねえかっ!」

ケインは、気にもせず、作業を続ける。

そうしているうちに、魔獣が咆哮し、それに呼び出されるようにして、洞穴の中から中程度のモンスターがわらわらと集まってきたのだった。

「おい、ヤバいぞ! あれは、中級モンスターたちだぜ! あいつらに『魔除け』は効かない。どうするんだよ!」

カイルがうろたえているのを、おかしそうに、ケインは見た。

「お前の剣で、ちょちょいのちょい……じゃなかったのかよ?」

「笑ってる場合かよっ! 来るぞ!」

モンスターの一匹に見つかってしまった。

ケインは、慌てることなく、あらわになった大剣を構えた。

改めて、その剣を見た二人は、モンスターと、異様に大きな剣とを見比べた。

無骨な剣とでも言おうか。装飾などは一切なく、片刃の、鈍く光る、使い込まれた様子のある剣であった。

「そ、それが、『魔物斬り』ってヤツの……」

「ああ、そうだ。『魔物斬りの剣』バスター・ブレードだ!」

ケインは、二人の前に進み出ると、獣人タイプの青黒いモンスターの腹を、ためらいもなく、一気に薙いだ!

その風圧で、後ろのモンスター達も、吹っ飛んだ。

二人は、思わず、眼を疑った! あの大きく、見るからに重そう

な大剣を、いとも軽々と、ケインは操っているのだ！

斬られた獣人は断末魔の叫びを上げると、黒ずんだ緑色の体液を迸らせ、地面に転がった。

クレアが目を背ける。

それに触発された他の獣人達は、威嚇するように騒ぎ立て、遠巻きに近付こうとしていた。

（こ、こいつ……！　どんな訓練したら、あんな剣を……？）

傭兵であるカイルには、彼の剣捌きを一目見ただけで、その実力がわかった。

しかも、驚くべきは、スピードでもであった。あのような剣を、まるでただのロング・

ブレードの如く、使いこなしているのである！

（こいつは、思った以上に儲けモンだったぜ！　この尋常じゃない強さと技のキレは、

マドラスにも匹敵するだろう……！　）

カイルは、一瞬で、そんなことを考えた。

それに構わず、ケインが振り返った。

「クレア！　これを使いえ！」

腰に差していたマスター・ソードを、クレアの足元へ放る。はっとして、彼女はそれを

拾い、両手に構えた。

「カイル！　クレアを頼む！」

カイルの方も、とうに剣を抜き取り、クレアの護衛をしながら、応戦していた。

モンスターを薙ぎ払いながら、ケインは、ちらっとカイルを見た。傭兵の姿は格好ばかりではなかったか。なかなか身のこなしは良いし、腕も立つようだな。と感心する。

（……となれば、こっちも一気にカタをつけるか！　）

安心したように、ケインはモンスターたちの中に切り込んで行った！

中級モンスターたちは、それぞれトリ、サイ、ウルフ、クマなど、獣を原型とした頭の下に、筋肉質の人間の体を持つ、実におぞましい姿であった。

それらと初めて対峙したクレアは、その姿だけでも恐怖であった。「きゃあっ！」

クレアの頭上に、直径三〇センチくらいの黒い靄が現れた。いくら、マスター・ソードで突こうとも、何の手応えもなく、相手にもダメージは見られない。

それも、モンスターであったが、剣術歴のない彼女には無理であった。

ケインは、一〇匹ものモンスターを振り切って、そちらへ向かうとすると、

「クレア、伏せろ！」

カイルの声で、クレアがとっさに伏せる。

「サイバー・ウェーブ！」

彼の剣先からは、銀色の霊気と思えるようなものが、勢いよくうねり出すと、クレアの頭上にあった靄に当たり、見事に消し去ったのだった！

（あれは、魔法剣……！？）

ケインもクレアも、剣の正体に驚く。

「物質や人体に効果はないが、魔物には、あーゆー致命的なダメージを与えるのさ！」

ただし、ある程度、魔法力を温存しとかなないと、威力が発揮出来ないんだけどな」

カイルが、モンスターを蹴飛ばしながら、叫んで解説していた。モンスターの数も、徐々に減って来た頃、何かを感じ取ってか、次々と退散し始めた。

「いよいよ魔獣サマのお出ましかあ？ どうする？」

背中合わせになったケインに、カイルが低い声で尋ねた。すぐ横では、クレアも心配そうな目で、ケインを見る。

「様子見だけのつもりだったが、いきなり本番行くか！」

ケインは、気持ちを引き締め、剣を慎重に構えた。その表情からは、あのような巨大な魔を相手にしてきた経験と、自信に満ちていたのが伺える。

カイルもクレアも安心したが、

「よけろ！」

ケインに押されて、二人とも後ろへ飛び退いた！

洞窟の前にいた、魔獣の一つ眼が、カッと見開いたと同時に、発射された黄色く光る光線が、辺り一帯を焼き払ったのだ。

同じ場所にいれば、間違いなく焼かれていたことだろう！

「冗談じゃないぜ！ これじゃあ、近付くことも出来ないまま、黒コゲだぜ！」

カイルが体を起こして、憎々しげに言う。

彼の言う通りであった。彼ら剣士は、接近戦は得意だが、離れてしまっただけはどうしようもない。

（マスター・ソードの技なら……）

だが、バスター・ブレードでは、クレアは持つことも出来ない。

ケインは、マスター・

ソードは、クレアの護身に持たせたままの方がいいと判断した。

「魔法剣のさっきの技はどうだ？」

さっと、ケインがカイルに尋ねる。

「一応、やってみるが、あんな大物、自分では倒したことはないかなー。効くのかどうか、わかんないぜ？」

「とにかく、試してみてくれ。クレアは、俺と一緒に飛ぶんだ」

「ええ、わかったわ」

カイルが二人にうなずいてから、剣を構える。

「サイバー・ウェイブ！」

魔法剣からは、先ほどと同じ銀色の光が吹き出し、うねりながら魔獣へと目がけて行った。

しかし、魔獣は、それを浴びる前に、飛んで回避する。

「来るぞ！ 散れ！」

カイルの叫びと同時に、魔獣の姿が消えた。

ケインはクレアを抱えると、大きく右に飛び退いた。カイルも反対方向へ避ける。

彼らの読み通り、魔獣は、それまで彼らのいたところに、ふっと現れた。

巨体からは想像し難いが、動きは素早い。

しゃあああああああ！

雄叫びとともに、ケイン達の方へ、前足を振り上げた。

それを、待っていたとばかりに、ケインが斬り込んでいく！

ぎにゃあああああああ！

恐ろしい叫び声に、クレアが思わず、耳を塞ぐ。

ケインが、舌打ちする。

（足を切り落とすまでは、行かなかったか……！！）

だが、魔獣のその前足は、ぱっくりと割れ、どす黒い、濃い緑色の体液が、どろどろと流れ出している！ 魔物特有の血の色だった。

もう片方の前足が、ケインに向かって振り翳された！

それを、彼は剣で受け止めた。

魔獣の眼が、また光る。

足を受け止めた剣を盾に、ケインが入り込むが、閃光は、わずかに彼の横を通り過ぎ、その先には、クレアがいた？？！

「クレア！ 逃げろ！」

ケインとカイルの声は、同時だった。

カイルは距離があり、ケインは、魔獣の足を振り払いざま向かうが、一歩遅かった。

クレアが避けても、もう遅い！

じゅっ！

物が高熱で溶ける、嫌な音がした。

ケインは、思わず顔を背けた。

（ああ、なんてことだ……！ クレアが……！ 俺がもう少し近くに位置を取っていたら……！ それよりも、彼女の側を離れなかったら……！）

ケインが、後悔に苛まれていると、

「ああっ！！」

カイルの声に、はっと我に返る。

彼らが見上げると、真っ暗な空に、何かキラキラと輝くものが見える。

（……あれは、銀色の……鎧！？）

それは、先の定食屋での、ケインには見覚えのある者であった。

銀色の甲冑の戦士が、今まさに、クレアを抱き、黒いマントをはためかせて、舞い降りて来たのだった！

クレアは、一瞬の出来事で、自分の身に何があったのか、困惑していた。ただ、なんとか魔獣の攻撃から救われたらしいことはわかった。

それでも、まだ恐怖は充分に残っていたので、目を固く閉じ、身体をこわばらせたまま抱かれていた。

「マドラス、遅かったじゃねーか！」

カイルが、銀の戦士に駆け寄り、ほっとしたように言った。

ケインも、振り返る。

「クレア！ 大丈夫だったか！？」

「ケイン！」

クレアが、やっと安堵の表情になり、甲冑の戦士の腕の中から、大丈夫だと頷いた。

見たところ、彼女に怪我はなさそうだった。

容赦なく、魔獣の足と光線の攻撃が彼を襲うが、すべて見切り、攻撃を躲していく。

甲冑の戦士は、クレアを降ろし、黒い兜の中から、キッと魔獣を見据えた。クレアが

何度も頭を下げ、礼を言うが、油断なく魔獣とケインとの戦いを見ていて、気付かないようであった。

「ヴァルのヤツも一緒なのか？」

カイルが戦士に聞く。

「ああ。それより、魔物はあいつだけか？」

兜のせいで、声がくぐもっていて、いくらか聞き取りにくい。

「あの洞穴が異次元への出入り口になっていて、あそこから出て来たのは、あの一匹だけだったぜ。あいつは、中級モンスターも呼べるんだ」

カイルが、早口で説明する。

「お前達のかなう相手ではない。下がっている」

謎の戦士は、ゆっくり歩み出ると、ケインにも下がるよう、手で遮るように合図をし、彼と魔獣との間に入った。

魔獣は、ひょうつと後ろに飛び退り、「しゃあっ！！」と、牙を剥いて威嚇する。

ケインの戦士としての勘が、この甲冑の戦士の、ただ者ではない雰囲気を感じ、引こうと判断したが、何かあった時の援護のつもりで、その場に剣を降ろし、見守った。

そこへ、カイルが近付いてくる。

「カイル、お前、あの剣士と、一緒にいた魔道士とも知り合いだったのか？」

静かに、ケインは尋ねた。

「ああ。あいつ、マドラスって小柄だけど、すげー強いんだぜ。あいつに任せておけば、

一安心だ。はー、助かったー！」

カイルは、すっかり調子の良さを取り戻していた。

「だが、安心するのはまだ早いぜ。俺たちにも、お客さんがいるよ
うだ」

ケインは降ろしていた剣の柄を、左手に構えた。カイルも気付いていたようで、油断なく、辺りを伺う。

獣人型の中級モンスターだちが、わらわらとその辺から湧き溢れてきていた。

獣と同じく、光る眼が、暗闇の中の、あちこちで増えていく。

「今度は、さっきみたいにクレアからは離れな……」

そうケインが言いかけた時だった。

ヴウン……！

背に気配を感じ、目だけで振り向くと、やはり店で見かけた魔道士が立っていたのだった。

「ヴァル、助かったぜ！ こいつらやつつけてくれよ！」

調子良く、カイルが言う。それへは、ケインが怪訝そうな顔をする。

「おい、カイル、こんなモンスターくらい、俺たちだけでも何とか出来るだろ？」

「別にいいじゃん？ こんなこと、強いやつらに任せておいたって」

「お前なあ……、この根性なし！」

「だって、根性と命、どっちが大事なんだよ？」

「だから、命賭けるほどじゃないだろーが」

彼らが言い争っていると、ヴァルと呼ばれた魔道士が、ゆっくりと顔を上げる。

フードを深く被っているの、顔はよく見えない。

「私は、彼女を守れと言われただけだ」

魔道士は、表情のない声でそう言い、クレアを引き寄せると、彼らの周りには、薄い緑色に光る靄のような膜が出来た。

ケインもカイルも、クレアにも、おそらく、それが魔物たちから身を守る結界であることは想像出来た。

「ちえっ！ ケチ！」

悪態を吐くカイルの肩を、ぽんぽん叩いてから、ケインはモンス
ター達に向かって、ダッシュした！

まずは、目の前の一匹を！　？？と見せかけて、その隣のものを
切り伏せる。

それが、叫んで倒れるのを見届ける間もなく、先に目を付けたも
のを横から薙ぐ。

右から襲いかかってきたサイを、大剣で縦にすると同時に、背後
に迫ってきたものに回し蹴りを喰らわせた。

大剣の風圧が水面の波紋のように広がり、獣人たちは倒れて行く。
ケインは、戦いながらも、カイルの方も気にしていた。

彼は、不機嫌そうな顔をしながらも、迫り来る獣人どもを薙ぎ倒
していた。

ふっと笑みを浮かべてから、ケインは、魔獣の方も垣間見ていた。

魔獣はまだ、マドラスと呼ばれた銀の戦士の周りで、威嚇し続け
ていた。

マドラスは、じっと動かない。

しゃああああああおおおおああ！！

魔獣の口から、咆哮とともに発射された太い光線が、マドラス目
がけて降り注いだ！

マドラスは、難なく避ける。

じゅっ！　という、地面の焼ける音と、ひゅっという空気の擦れ
違う音が聞こえたかと思うと、魔獣が飛び上がり、彼に躍りかかっ
ていた！

その瞬間、彼の身体は空高く舞い上がり、素早く空中で剣を抜い
た！

と、思うと？？

それは、一気に魔獣目がけて、振り下ろされたのだった！

ごとっ……！

魔獣の咆哮が止んだ。

断末魔の叫びを上げることなかった。

きれいな断面を残して、魔獣の首は、地面に落ちていた？？！

「ひえーっ！」

カイルが声を上げる。

「そ、そんな……！！？ あいつの骨までも、一太刀で斬り落とした
つていうのか！？」

ケインは、言葉に出していることにも気付かずに、見入っていた。
マドラスは、凄まじい形相のまま転がっている魔獣ドラドの大きな
顔の上に、ひらりと着地した。

「出てくる！ 奴が？？！」

彼は、洞穴を見つめ、低く呟いた。

（なんだ？ まだ何かが……！！？）

ケインは、獣人達を倒しながら、マドラスと洞穴を見逃すまいと
でもいうように、見つめていた。

「ヴァル！」

マドラスは振り向きもせず、魔道士を呼んだ。後方にいた魔道士
は、ゆるりと右の手を上げた。

「えっ？？！？」

「ケイン！ カイル！」

次の瞬間、ケイン、カイルは、クレアと魔道士と、同じ膜の中に
いた。

その外では、今まで戦っていたモンスターたちが迫って来たが、
結界の中までは入れなかった。

「はーっ、助かったぜー！ ……しかし、目の前がモンスターだら
けっていうのは、あんまり気持ちのいいモンじゃねえな……」

カイルが苦笑いをした。

「さつき、マドラスが呟いてた、奴って???」

ケインは、長身であった彼よりも更に背の高いその魔道士を、振り返った。

「この山に巣食う、本当の魔獣が、これから現れるのだ」

魔道士の抑揚のない言い方に、彼らは背筋がぞっとした。

「……そ、それでは、もっと恐ろしいものが?!?!」

クレアが身体を震わせた。

「あいつは???マドラスは、一人で平気なのか!?!」

結界の中には、外に攻撃をかけることは出来ない。ケインの問いに、魔道士は、やはり感情のない口調で返した。

「加勢したければ構わんが、お前も巻き添えになるだけだ」

言葉に詰まったケインに、カイルがささやいた。

「おい、どうせ俺たちが行って勝てるような相手じゃねえんだからさ、ここは、こいつらに任せておこうぜ。やつらは、こういう敵と戦い慣れてんだからさ」

クレアも、心配そうに両手を組んで、ケインを見ていた。

確かに、敵は、今までケインが戦って来た以上のものらしい、と彼は思った。

強大な敵を前に一人を残して、自分だけ見物するような真似は、彼の信念には反していたのだが、足手まといになってもいけない、と思い返し、カイルの言う通り、見守ることにした。

「ごごごごごごごご?!?!」

大地を揺るがすような響きが、例の洞窟から聞こえてくる。

入り口が揺らめく。

蜃気楼のような揺らめき程度ではなく、明らかに、そこは歪んだ?!?!!!

ぐるるるるるる……!!!!

「な、なんだ、あれは?!?!!!」

それは、先ほどの魔獣と形や大きさは変わらないが、明らかに邪

悪さを増していた！

全身真っ黒で、一つ一つが盾一つ分はありそうな黒い鱗のようなもので出来ていて、身動きする度に鈍く、照かっている。

その隙間からは、黒く邪悪な瘴気が常に吹き出している。

尾や手足であろう身体からはみ出した五つの柱のような肢体は、ぬらぬらとしていて、

それぞれが生き物のように、常に蠢いている。

そして、頭は、前方に長く伸び、殆どが口で出来ているように、上下に開く。

中には、当然、長く太い牙らしきものも見えた。

耳は見当たらず、頭上の二つの突起は眼のようで、濁った黄色をしていた。

それは、見ている者に、嫌悪感をもたらす！

ドラドは、まだ動物的だったのに比べて、これは、明らかに悪魔的であった！

突然、怪物は、口から黒い液体を吐きかけた！

マドラスは、さっと飛び退け、マントに包まり、それを回避する。

魔獣は、黒い液体を口から吐き流し、あっという間に辺りを黒い海に変えてしまった！

荒れ狂う黒い波に、獣人モンスターたちも巻き添えを食って、次々と吞まれ、溶け込んでいった！

（マドラスは???!?!?）

ケインが、眼を凝らす。

すると、

「ヴァル！」

マドラスは、いつの間にか、右方の小高い丘の上にいた。

彼の周りは、そこだけ空気が白くなってしまったのかと思うほど、白い煙のような、

湯気のようなものが沸き出していたのだった。

魔道士は、奇妙な、あらゆる国の言葉とは違う音を、呟くようにして発していると思う

と、両手を伸ばし、指で三角を形作った。

その中には、金色の光が灯り、みるみるうちに膨張していくと、彼は、それをマドラスに当てた！

途端に、マドラスの身体が金色の光に包まれた？？！

そして、彼の身体は、巨大な魔獣とほぼ同じ位の高さにまで膨らんだのだった！

光の強さが少し収まると？？

全身をすべて黄金色の甲冑に包んだ巨人が、そこにいたのだった！

兜からはみ出した、金髪のカールがかった髪をたなびかせ、彫刻のように彫りが深く整った、白く、美しい男の顔には、うっすらと、邪悪とも思える笑みが浮かんでいる。

手には、腰から抜き取った巨大な剣を携えていた。太く長い奇妙な尾も、鎧で覆われている。

全身を、金色の光が取り巻いている神々しいその姿には、似つかわしくない、邪悪さが漂っていたのだった！

（あれは、……一体……！？）

結界の中の傭兵たちは、声すら上げられないでいた。

「はははは！！ やっと、俺様の出番だぜー！！」

巨人の声が辺りにこだまする。

「ゴールドメタル・ビーストの化身！」

クレアが叫ぶような声を上げた。

「ゴールドメタル・ビーストだって！？」

ケインとカイルも同時に叫んだ。

そこへ、再び、金色のマドラスだったものの声が響く。

「今日はゲストが多いみてーだからな、自己紹介してやろう。

何を隠そう、この俺様は、伝説のゴールドメタル・ビーストの化身『獣神サンダガー』様だー！！ 恐れ入ったかー！！ ふはははははー！！」

彼は、踏ん反り返って高笑いした。

「ま、まさか……！」

クレアが、大きな瞳をさらに見開いて、魔道士を振り返る。

「さっきの呪文は、これを召喚していたんじゃ……」

魔道士は、ゆっくりと頷く。

「な、なんてことを……！」

ゴールドメタル・ビーストは、金色の鎧のような、または鱗のような、金属質の肌を持つ、伝説上の生き物であった。

獅子の闘争心と竜の力を合わせ持つと言われている。

「俺の記憶が正しければ、？？神話によると、その化身である獣神サンダガーは、戦闘を好み、圧倒的な強さを誇る？？んじゃないかったか」

そう言ったケインに、カイルもクレアも頷き、続いた。

「魔道士の召喚魔法の中でも、サンダガーは性質が荒々しい上に、扱い辛く、どちらかと

いうと邪神に近いので、制御するのが、非常に難しいとされているわ。

例え、召喚出来ても、彼を使いこなせたものは、今までいないと聞いていたけど……」

「そ、それが、今、ここに……！？」

黒い魔獣は、『サンダガー』を黒い海に襲わせた！

彼は、暴風と、唸りを上げながら黒く渦巻く荒々しい海に吞まれてしまった。

しばらくすると、海の中から、うっすらと、金色の光が浮かび上がってくる。完全に彼の身体が宇宙に浮くと、魔獣は、待っていた

とばかりに、今度は黒い波砲を口から発射した！

彼は、まともや避けようとしなない！

「デカいぞ！ よけろー！」

カイルが叫ぶ。

「いや、彼には、耐えられる自信があるんだ。だから、あえて避けようとしなないんだ」

戦況を見守りながら、ケインが言った。

その言葉通り、黒い波砲は、彼に触れる寸前に、弾け散ったのだった。

カイルもクレアも、ケインを見てから、視線を戦いに戻す。

「そっか……。そう言えば、『サンダガー』のヤツ、海に吞まれたはずなのに、甲冑も髪も、どこも濡れていないな」

「ということは、……魔獣の攻撃を、すべてオーラだけで防いでいる……？」

「そういうことだな」

呆気にと取られている人間達をよそに、獣神は、にやにやして独り言を言った。

「さあて、今日の獲物は、こいつか？ あんまり美味くなさそうだが、まあいいか。食うわけじゃないもんな、へっへっへっ！」

『サンダガー』は、装飾の付いた大剣をペロツと舐めると、いきなり魔獣の頭上目がけて振り下ろしたのだった。

それを、魔獣は何ということもなく避けた。

が？？！

カッ！ と、彼の件が光ったように見えた、次の瞬間？？！

辺りには、地面の奥から鳴り響くような轟音と、爆風が、一気に充満した。

結界の中にいたケインたちでさえ、その風圧が凄まじかったことは、充分に伝わってきた。おそらく、結界の外にいれば、人の鼓膜など、感嘆に破れていたことだろう！

煙が立ち込めていて、遮られていた視界が、徐々に見やすくなっ

てくると、ケイン、カイル、クレアは、その風景に愕然とした。

つい先ほども渦巻いていた黒い海はどこにもなく、岩も、木も、草も、跡形もなくなり、一段えぐられたかのように低くなった禿げた地面が、一面に広がっているだけなのであった。

洞穴も、一遍に消し去られてしまったのか、どこにも見当たらない。

そこに立っているものは、『サンダガー』ただ一人のみであった。

「ふっふっふっ……」

彼の口元には、まだ邪悪な笑みが残っている。

「な、何が起こったんだ?? 一体……」

放心気味に、カイルが呟いた言葉は、ケイン、クレアの思いも代弁している。

「うぎゃあああああ??!!」

突然、『サンダガー』が絶叫して、その場に顔くすおれた!

「な、何が起こったんだ! 一体……!!?」

カイルが叫ぶ。皆も全く同じ心境だった。

(まさか、まだ決着はついていないのか!?)

ケインも、身を乗り出して、結界の向こう側に眼を凝らす。

「何しやがる!! や、やめろっ!!」

『サンダガー』が頭を抱え、苦しそうに喚く。

皆は、敵の姿を懸命に探すが、見当たらない。

「ち、ちくしょー!! おのれー、マリスのヤツ!! 覚えてやがれーっ!!」

捨て台詞と共に、彼の身体は、足元からしゅるしゅると出て来た白い煙に巻かれ、縮んでいくのと入れ替わりに、そこには銀色の甲冑を身に着けたマドラスの姿があった。

甲冑は、どこにも傷はなく、マントや兜もそのままであった。

途端に、ケインたちを守っていた結界が、解けた。

皆、何がなんだかわからず、呆然と、その場に立ち尽くしている中、カイルがマドラスに向かって駆け出した。我に返ったケインと

クレアも、後に続いた。

「マドラス！ 何だったんだ、今のは！？ 俺は聞いてないぞ！」

「カイル？？」

マドラスが口を開きかけたその瞬間？？！

ピキッ

マドラスの、黒い兜に罅が入った。

兜が割れると、ふわさつとオレンジ色に輝く、明るい茶色の巻き毛が流れ出し、白い顔が現れた！

「なっ……！！」

カイルが困惑の表情になった。

ケインとクレアも、思わず立ち止まり、啞然とした。

透き通るような白い肌、キリッと引き締まった眉と、世にも珍しい、紫水晶のような瞳が、まず目に付いた。

小高く鼻筋の通った鼻、凛々しく、整った顔立ちの中で、唯一可愛らしさを携えたピンク色の唇。

少女的な少年、否、少年的な少女を思わせる、中性的な容姿であるが故に、普通の人間離れしていて、どちらかというと、妖精だとか、人間以外の種族を連想させた。

（……こんなに綺麗な人間が、この世に存在していたとは……！）

それは、ケインだけでなく、そこにいた皆も、そう思ったに違いなかった。

彼の存在感は、人としてではなく、人の上を行く者として、人々に感じさせてきたことだろう。

彼らが、マドラスの姿に釘付けとなっている間に、その後ろからは、例の黒づくめの

魔道士が、速度を変えることなく、歩いてくる。

「あああ、仮面、割れちゃった。ちえーっ」

凛々しい顔立ちには似つかわしくない、高く通る声が、唇から発せられ、魔道士以外、一同驚いた。

一見取っ付きにくかった容貌のマドラスは、途端に親しみ易い表

情になり、手を腰に当て、にっこりと微笑んだ。

「初めまして。あたし、マリス」

呆氣に取られた皆は、呆然としていて、自体がまだ飲み込めずにいた。

「おっ、おっ、お前っ、マドラス……!？」

うろたえながら、カイルが、彼女を指差す。

「そ。男装してたの。男性名使ってね」

あっさりと、彼女は言いのけた。

「じゃ、じゃあ、獣神を召喚して、さっき戦ってたのも……女のあんただったってのかよ!？」

「まあね」

マリスは、誇らし気に笑った。

「……信じらんねえ……!」

思わず出たカイルの台詞は、皆も同じであった。

「で、そっちが、あたしと旅を続けているヴァルドリューズ。超一流、超イケメン魔道士さんよ」

困惑した表情で、マリスとヴァルドリューズとを交互に見ている一同の心境などは構わず、

「とりあえず、お茶でもいいかが？」

マリスは、軽い口調で言った。

さびれた町 3

一同は、村の、マリスが取っておいたという部屋に集まった。

「あー、美味しー！ やっぱり、マラスキーノ・ティーは、イけるわねー！」

狭い宿の部屋の中では、マリスが紅茶を入れて、皆に振る舞っていた。

魔道士は、それには手を付けず、香を焚いていた。気にならない程度の甘い香りであった。

魔道士たちが、瞑想したり、自分の魔力を消耗させずに、結界を張ることに、よく使う代物だ。

だが、今、彼が結界を張っているとは、マリス以外は気付かない。

上級の魔道士になると、水晶玉の占いで覗かれたり、話の内容を聞き付けられることもある。

あるので、それを防ぐためであった。

1人楽しそうなマリスを、じろつとカイルが睨んだ。

「おい、どーゆーことなんだよ。あんた、何モンなんだ？ 人間なのか？」

「当たり前でしょ？ 正真正銘、見たまんま、普通の女戦士よ」

（いや、全然、普通じゃないだろーが）

喉から出かかった言葉を、ケインは紅茶と一緒に飲み込んだ。

「俺の目をごまかそうだったって、そうはいかねーぞ！」

「あーら、あっさり、ごまかされたじゃないの」

凄んで見せたカイルを、彼女は、いとも簡単にあしらった。

「あの銀の甲冑は、どこか大国の軍のものなのか……？」

マリスは、既に甲冑は外して、普通の町娘のような服装であった。

部屋の隅に置いてある甲冑に、一旦目を向けてから、視線を、質問したケインに移した。

「あなたの言う通りよ。あれは、……ベアトリクス王国のものよ」
「ベアトリクス王国!？」

あの世界の先端に行く大国??北の海を越えた、あんな遠くから?
」

ベアトリクス王国を知らない者は、そこにはいなかった。

先進国で知られていることもあるが、同時にワンマンな絶対王政の国としても有名だ。洗練された文化、見目麗しい人種も多いと聞く。

彼女の容姿には、皆、頷けた。

「あたしは、そこで、ある部隊の隊長をやってたのよ」

「ええっ!？」

ヴァルドリューズ以外、一斉に驚き、まじまじと彼女を見詰めた。どう見ても、そこにいる皆と、そう変わらない年頃である。この二〇歳前の娘が、軍を率いてたとは、衝撃であった。

しかし、獣神に変身する前も、戦士の腕はかなりのものだったと思いつ返す。もしかしたら、本当に軍隊を率いていたのかも知れない、と皆はすぐに納得した。

「いやあね。いくら実力重視の国だったとしても、こんな小娘に簡単に隊長なんか任せてくれるわけじゃないじゃない？」

コネがあつたのよ、コネが。それが、ちょっと訳アリで、飛び出して来ちゃったんだけどね」

マリスは手を振りながら、ころころ笑っている。

「カイルもベアトリクス王国の出なのか？」

「俺は違うぜ。こいつらとは1週間ほど前に、ここの1つ手前の町で知り合ったんだ。」

それにしても、人が悪いぜ、マリス。女だってこと、何で隠してたんだよ」

カイルが、膨れっ面で、マリスを見る。

「そんなの当たり前でしょ? あんたみたいなナンパ男がどこに潜んでいるかわからないし、賊にいつ出くわすとも限らない物騒なこ

の世の中、か弱い乙女が我が身を守るために男装する……そんなの常識よ」

しゃあしゃあと、彼女は言うのと、紅茶を美味しそうに啜った。

「ヴァルドリューズさんは、ベアトリクス王国の宮廷魔道士さんなんですか？」

クレアが発言したのは、マリスの印象が強烈だったせいで、影が薄くなっていた魔道士に向けてであった。

（確かに、こいつもただ者じゃなかった！

召喚呪文なんか使える魔道士なんて、そうざらにいるもんじゃない）

ヴァルドリューズは、既にフードを降ろしていた。

西洋地方の人間に見られる彫りの深い顔立ちに、浅黒い東方系の肌、切れ長の、澄んだ冷ややかな碧い瞳、肩まで伸びた黒い艶のある髪？？。

見たところ、いろいろな人種の血が混じっているようだが、全体的に東方系の人間ということに落ち着いた。

クレアが注目したのは、彼の額に嵌め込まれた、鮮やかな深紅のカシスルビー？？これが、ケインたちも噂に聞いたことのある、宮廷魔道士の証であった。

「彼は、東洋の帝国ラータンの宮廷魔道士だったの。やっぱり、訳アリだね。

要するに、国を飛び出して来た者と、国を追われた者同士が会って、一緒に旅をすることになったのよ」

普通の旅人ではないことは充分伝わっていることであったが、マリスは、おそろしくかい摘んで説明した。

カイルが首を捻っていたが、はっと顔を上げる。

「？？ってことは、お前ら駆け落ちだな！？」

ばたっ。

マリスが倒れた。

「そうではない」

ここへ来て、初めて、ヴァルドリューズが口を開いた。

「もう、こんな時ばっか反応するんだから、あんたは??！」

マリスが面白くなさそうに、ぶつぶつ言いながら、起き上がった。「召喚獣を呼ぶというのは聞いたことありますけど、神を召喚する(呼ぶ)なんて??どうして出来たんですか？」

多少なりとも呪文が使えるクレアは、魔道に興味があった。冷たく、近付きがたい雰囲気を持つヴァルドリューズに、怖じ気づくこともなく、質問を続けていたのだった。

「召喚獣の時と違い、サンダガーを呼んだ時のあなたの呪文は、全く聞いたことのない発音でした。しかも、その呼び出したものを、他の人間に乗り移らせるなんて……有り得ないことです」

ヴァルドリューズが、じっとクレアを見てから、口を開いた。

「神を召喚するには、その神の言葉を用いなくてはならない。他人の身に召喚させるのも、人間では不可能なことだ。

マリスにサンダガーを召喚する前に、私は、魔神『グルーヌ・ルー』を一部自分に召喚し、彼の力を借りて、呪文を唱えたのだ」

「魔神『グルーヌ・ルー』ですって!？」 あ の、東洋の??!？」
クレアが、うろたえた。

「……おい、わかるか？」

「……いや、全然」

訳がわかっていないカイルとケインは、お互い顔を見合わせているばかりだった。

ヴァルドリューズとクレアの会話は続く。

「サンダガーに限らず、他の獣神だろうと、召喚することは、上級の魔道士であれば出来ない

こともない。だが、それは、あくまでも、己と同化させるのみ。その物自体を召喚する召喚獣に比べて、神の化身はコントロールが難しい上に、

本人との相性がある。

条件に満たなければ、逆にこちらが意識を乗っ取られ、消滅して

しまうとともに、

意志を持った化身だけが暴走してしまうおそれもある。

このような事態は避けるべく、魔道士協会の書物にも載せられてはいない」

淡々と、表情もなく、抑揚のない声で話す彼と反対に、クレアの顔は青ざめ、明らかに

動揺が伺えた。

「それって、もしかして、……禁呪なのでは……？」

「そうよ」

堂々と答えるマリスを、皆一斉に見詰めた。

「でも、あたしは『サンダガー』を暴走させたことはないし、ヴァルの『グルーヌ・

ルー』は、知識を授けるだけに留めているわ。例え、禁呪でも、うまく扱えば、

使ったっていいのよ」

そういうものだろうか？ と、ケインとカイルが首を傾げていると、

「だめです！ 禁呪を使うなんて！ 使えることがわかったのなら、せめて『魔道士の塔』に届けを出してください！」

クレアが強く、マリスに抗議した。

『魔道士の塔』とは、正規の魔道士たちを管理する、上級魔道士の組織であった。

世界的に、支部を持つ。

その組織に認められた魔法アイテムを扱う団体は、『魔道士協会』と呼ばれ、こちらの方が、一般には馴染みがあったと言える。

『魔道士の塔』では、未だ未知数を秘め、危険のある黒魔法を使用するに当たったの掟を定め、正規でない魔道士、つまり、登録もせず、法を守らないヤミ魔道士を取り締まってもいた。

神官や巫女の使用する癒しの魔法や、魂を浄化する等の白魔法に關しては、一切干渉していない。

召喚魔法とは、黒魔法の部類であった。

「あのね、『サンダガー』は邪神みたいなもんよ。そんなもの『たびたび呼び出しますが、いいですか？』なんて言って、許可がもらえないわけないでしょ？」

「いいのよ、届けなんか出さない方が」

「マリスに突っぱねられて、クレアは黙ってしまった。」

「圧倒的な力を持つには、綺麗事ばかりではだめなのよ。」

「攻撃には白魔法よりも黒魔法の方が有効なのとおんなじでね」
「妙な説得力で、一同納得せざるを得なかった。」

「ちよっと待てよ、さっきの話で、召喚神はコントロールが難しい上に相性があるってことは、マリスとサンダガーの相性が良かったってことなのか？」

ケインが、ヴァルドリューズに向き直った。

「いかにも。もともと召喚神は、媒体の守り神であるものを呼び出すのが無難だ。」

それならば、ある程度の条件はそろっているからだ。

だが、そうでないものを呼び出すには、余程性質が似ているか、本人の核の部分に、実は、同じような面を持っているかなどが重要になってくる」

「……守護神にしても性質にしても……」

「……結局、どっちにしろ、似た者同士ってことか？」

ケインとカイルが顔を見合わせると、そうっと、マリスから後退あとずさった。

「ちよっと、ヴァル！　そういう言い方すると、あたしが、もろサンダガーと同類に聞こえるじゃないの！」

マリスが説明を補足する。

「召喚神を受け入れるにはね、本人の魔法能力にも関係してくるのよ、あたしには、常人以上の魔力が備わっているのよ。だから、同化できるの！」

カイルが、ふっと笑った。

「ウソつけ。幼い頃から魔法能力の高かった者は、魔道士の教育を受けさせられて、魔道士の道を歩まされているはずだろ？ 巫女や魔道士の家系でなければ、そんなヤツはごく稀だって言うじゃないか。」

ま、仮に、お前が王族で、小さい頃から魔道の教育を受けてたってんなら、話は別だけどな」

マリスは、指を立てて「ちっちちち」と、振って見せた。

「ふっふっふっ。イメージトレーニングや、その他にも、魔力を高める方法はいくらでもあるのよ」

「何っ！？ 本当か！？ じゃあ、俺も訓練すれば、魔力が備わってのか！？」

カイルが興奮して目を輝かせた。ケインは、「単純なヤツ」と、呆れて横目で見える。

「時に、あなた」

マリスが、指先をケインに向けた。

ふいに、紫の瞳に捕えられたケインは、ドキッとした。

「見たところ、傭兵のようだけど、なかなか剣の腕が立つみたいね。お手持ちの剣も興味

深いわ。クレア（レディー）を置き去りにしたのは、ちょっといただけなかったけど。」

ま、キミほどの実力なら、助っ人として、あたしが雇ってあげてもよくってよ」

「ええっ！？」

声を上げたのは、当事者のケインではなく、カイルであった。

「おい、俺には金なんか払ってくれなかったじゃんか！」

「……あなたは、勝手に付いて来たんでしょ？ その魔法剣に免じて、ゴハン代くらいは出してあげてもいいけど？」

カイルが、がっくりと肩を落とした。

「どう？ 一緒に来る？」

もう一度、マリスはケインに尋ねた。

ケインは、慎重な面持ちで答えた。

「その前に、君たちの目的を教えてください。悪いことの片棒を担ぐのは、お断りだからな」

マリスは、目を見開いた。

意外に思ったのだった。

まず、その容姿から、おそらく、彼女の誘いをすんなり受け入れなかった者などは、いなかったのだろう。外見で判断しないようだということ。

そして、思ったよりも低く、落ち着いた声が、自分よりも、実は、彼の方が年上なのかも知れない、と思ったことであった。

腕を買ったことには違いなかったが、傭兵らしくない穏やかな性質と、童顔ではあるが、群青色の大きな瞳には、誠実さと芯の強さが表れていたのが、信用出来る人間と映ったからこそ、スカウトしたのだった。

（面白い……）

どうやら、自分の見立てに間違いはなかったと、満足気に微笑してから、マリスは言った。

「もつともだわ。それじゃあ、単刀直入に言うけど、あたしたちの旅の目的は？？ヒマ潰しに悪いヤツをやっつけながら、世界を征服することよ！」

マリスが拳を高く掲げた。ヴァルドリューズは、そっぽを向いていた。

もちろん、ケインは本気にしていなかったが、相棒同士であるこの二人のコンビネーションの悪さには、首を傾げた。

「あのなあ、それじゃあ、悪者と目標同じだぞ？」

「冗談よ、やーね」

「……なんか、あんまり冗談にも聞こえなかったけど」

勝ち気な表情で、マリスは言った。

「まあ、大方の目的は、魔物退治よ。さっきの洞穴みたいに、魔界と人間界をつなぐ異次元の穴が、最近増えてきてるから、それを塞

ぐとともに、原因を調べてるってわけよ。

そのついでに、悪い奴らを懲らしめてまわる??って、まあ、こんなところかしらね。

「なんなら、短期契約にしとく?」

紫の瞳を、くるくると輝かせながら、マリスはケインの顔を覗き込んだ。

もちろん、この二人の目的は、それだけじゃない気もしていた。知り合ったばかりだが、悪いヤツらとも思えない。

現に、さっき魔物を倒したし、俺も、近頃湧いてくる魔物たちには疑問を持っていた。

原因究明したいのは同じだ。魔物退治だって……などと、ケインは、合意する理由を考えているうちに、わかったことがあった。

何よりも、マリスの人物像に、興味を引かれた。その強さにも。そして、なぜだか、光を感じたのだった。

彼女の旅を見届けたくなった。

ケインの答えは、決まった。

「ありがとう」

にっこりと微笑んだ後に、マリスは付け加えた。

「ああ、最初に言っておくけどね、あたしが頼みたいのは護衛じゃなくて、助っ人よ。

それと、いくらあたしが雇い主だからって、敬語なんか使ったりしたら、はっ倒すからね。

あくまでも、対等でいてね」

「わかった」

「賃金は、四週間でリブ金貨五枚。別途宿代、食事代もね。足りないければ、差し障りのな

い範囲で、どこかで稼いでくれてオーケーよ」

贅沢は出来ないが、生活していくには、困らない条件であった。

ケインが、モルデラに来てから、洗濯の次に請け負った仕事である。

まさか、それが、思いのほか長く続く、不可思議な、己の人生をも左右するほどの冒険の旅になるとは、その時のケイン、カイル、クレアには、見当もつかなかっただろう。

そして、マリスと、ヴァルドリユーズも? ?。

星の巡り合わせの如く、噛み合った運命の歯車は、方向を定め、ゆっくりと回り始めたのだった? ?!

野盗と剣と武遊浮術 (1)

モルデラを後にしたマリス一行は、隣町タルムに来ていた。今いる山を下れば、アストーレ王国の領土は、もうすぐそこである。

マドラス（マリス）は、昨日とは違う兜を被り、一行とクレアを伴って、祭司長と村長を訪れ、魔獣を退治した報告をし、その見返りに、大金を巻き上げた。

クレアはマドラスと同行したいことを告げ、マドラスも、「放っておけば、いずれ魔獣の餌食になっていたであろう。魔獣騒動の最後の犠牲者と思って、諦めてくれ」と、有無を言わず、クレアを連れて来たのだった。

マリスとしては、本当は、クレアを連れて行くつもりはなかったのだが、ヴァルドリュースの勧めで、白魔法の使い手もいた方が良いと説得（一言ではあったが）されたのだった。

「それにしても、うまくいったよなあ」

カイルがニヤニヤと思いついて浸っていた。

「若い乙女の命を、毎年魔獣なんかに捧げて平気でいた村よ。犠牲になったものを思えば、あれくらいお安いもんだわ。ま、向こうも、魔獣なんかに、すんなり生け贄捧げちゃうくらいだから、お金もすんなり出してくれたけどね」

マリスも、当然のように笑った。

「ああ、あの村は、精気どころか金までも吸い取られて、今後どうなるんだろうなあ。良かったな、クレア！俺たちと一緒に来て正解だったよな！」

有頂天のカイルとは対照的に、クレアは、複雑な表情だった。

「巫女仲間を置いて来たこと、まだ気にしてるのか？」

ケインが、気遣った目で、クレアを見る。

懸命に説得しても、巫女たちは、どうしていいかわからず、ただ祭司長と彼女とを見比べているばかり。

それは、魔獣を退治する、または追い出すべきだと、クレアが強く主張した時と、同じ反応なのであった。

同じ志を持つ者を救いたい一心で、クレアは精一杯訴えてきたのだが、誰も応じようとはしなかった。

「なぜ、皆、わかってくれないの？ この先どうなるか、少し考えればわかることなのに」

もどかしさとはがゆさは、そのうち落胆へと変わっていった。

説得しても無駄なことは、二人の傭兵には、既に目に見えていた。マドラスも、終始冷ややかな表情で、見守っていた。

「ええ、でも……、彼女たちは、あのまま残っていた方が、安心なのだとわかったから」

空しいやり取りを思い出し、力なく、クレアは、ケインに笑ってみせた。

そこへ、マリスが言い放つ。

「だいたいねー、あんな風に、皆、無気力だから、魔につけ込まれるのよ。同情の余地もないわね」

「お、おい、そんな言い方……！」

「だけど、あなたは、ずっと、なんとかしたかったのよね、クレア？」

あの人たちは、何も手を打たない、行動しない、ただ祈るだけで、時が経てばどうにかなるとでも思っているような。神頼みという、ただの現実逃避の中にいるのが安心なんだわ。

でも、それじゃあ、何も解決出来ない。何も生み出さない。衰退していくだけよ。

あなたは、そんな破滅の道に見切りをつけて、未知の世界に、勇気ある一步を踏み出したんだから、きっと、今後も正しい選択をし

て行けるって、あたしは思うわ」

「マリス……」

ウィンクしたマリスに、クレアは恥ずかしそうに、だが嬉しそうに微笑み返した。

「それにしてもさあ、クレア、本当に、ヴァルに黒魔法習うのかよ？ 巫女辞めちゃって、魔道士見習いになるなんて、随分思い切ったよなあ」

カイルは、どこか残念そうな声であった。

「いいの、私、変わりたいから。自分の信じてきたものに、幻滅したの。」

今までは、そういうものだと思われてきたけど、違ったって、はっきりわかったんだもの。今までと違うことをやってみるわ。そして、マリスの役に立ちたいの」

クレアは、服装こそは巫女のままであったが、清々しい笑顔で、はっきりとした口調で言ったのだった。

「応援するよ。そうだ、俺、クレアに護身術を教えるよ。後で、剣も買えばいいさ」

ケインが言うと、カイルが割り込んだ。

「俺だって、そのくらい教えられるぜ？」

といって、クレアの手を握るが、クレアは、さりげなくその手を振りほどき、

「ケインに教わるから、大丈夫」

と、清々しい笑顔で、はっきりとした口調で言ったのだった。

マリスが、吹き出す。

「残念だったわね、カイルくん。だけど、女だったら、皆、そうすると思うわよ。あたしも、後で、ケインとちよっとお手合わせしたいと思ってるし」

マリスがケインにウィンクする。ケインは、目を丸くした。

「お、俺と？ きみの方が強いのに？」

「そうとも限らないかもよ？」

紫の瞳が、いたずらっぽく輝く。

ケインは、またもや内心動揺していた。

彼には、未だに、珍しい紫色の瞳には慣れないでいた。どうも、あの神秘的な瞳を目の当たりにすると、逃れられない気がするのだった。

「なんだよ、ケインばっか」

カイルが口を尖らせる。

「なんなら、変わろうか？」

「いやいや、マリスとの手合わせなら、遠慮しとくよ」

「だろ？」

ケインは恨めしそうに、ヘラヘラしているカイルを見る。

そのカイルが掴んだ情報が、もう一つ――

ここ数年で急に勢力を拡大しているらしいアストーレ王国では、よその国からふらりと現れた男に国王がひどく入れ込み、男は、とうとう参謀にまで登り詰めた。

その頃から、王国の外れの北の森には、モンスターが棲み付くつくようになったという。

「下等のモンスターなら、自然の森にはもともと潜んでいるもの。中級以上のモンスターは、誰かが呼び出したりしない限り、人間界には、そう湧いて出るもんじゃないわ。

カイル、その情報くれた宮仕えの女の子、参謀の姿は見たことあるのかしら？」

というマリスの質問に、カイルは「もちろん！」とばかりに、にやっと笑った。

「そいつは、何の変哲もない格好をしていたため、宮廷内でもあまり目立ってはいなかったというんだが、参謀になった時、王から、ある宝石をプレゼントされたらしい」

そこで一旦言葉を区切り、皆の顔を見回した。

「それは、真っ赤な宝石^{いし}だったらしいぜ。それ以来、ヤツは、それをつをここにくつつけてるって話だ」

と、カイルは、自分の額に指を当てた。

「ヴァル、ちょうど、あんたみたいにな」

「……ま、まさか、魔道士なのでは……？」

クレアが、カイルと、無表情なヴァルドリユーズとを見比べた。

「『カシスルビー』を額に……。あれは、主人と従者の契約の証で、魔力によって付いているもの。」

その男、魔道士ね」

マリスが、冷静に言った。

「魔道が盛んな国では、魔道士の参謀は珍しくはないわ。あたしのいたベアトリクスでも、ヴァルの出身国ラータン・マオも、多くの宮廷魔道士を抱えているわ。」

でも、アストーレでは、そんなに魔道は盛んではないと聞いてたけど？」

「そうそう。だから、周りには、得体の知れない者扱いで、最初のうちは、あんまり受け入れられなかったみたいだぜ」

マリスは、何か考えこむように、黙っていた。

「森に増えたモンスターっていうのも、そいつの影響かな？」

誰にともなく、ケインが呟いた。

「そいつが呼んだかどうかは、まだわかんないけど、どんな形であれ、いずれは、そいつにも関わってくるでしょうね。魔道も魔界と多いに関わりがあるものだから……」

皆、彼女の次の言葉を待った。

心が決まったマリスが、ふっと顔を上げた。

「行きましょ、アストーレ王国城下町、アトレ・シティーへ」

「よし、アストーレ王国の怪し気な参謀を調べ上げ、魔物呼び出した張本人であれば倒すわけだな？」

そう意気込んだケインに、マリスは、きよんとした顔を向けた。「それは、単なるついでよ。調べてみて、モンスターと参謀が関係

ないとわかったら、あたしは、あの国に関わるつもりはないわ」

「え……？ アストーレに魔物を退治しに行くんじゃないのか？」

意表をつかれたケインに、マリスは、拳を振り上げて、元氣よく答えた。

「あたしがアストーレに行く一番の目的は、腕のいい鍛冶屋に会うことよ！」

「はあ！？ 何だそれ？」

ケインが気がつく、クレアは、わけがわからずおろおろして、カイルは、腰掛けていた岩で、干し肉をおやつ代わりに楽しそうに頬張り、ヴァルドリューズは聞いているのかいないのか、はなから関心がないようで、そっぽを向いていた。

「……なあ、マリス、旅の目的は悪者・魔物退治なんじゃないのか？」

「もちろん、そうよ。だけど、その前に、やらなくちゃいけないこともあるの」

「それが、……鍛冶屋に行くことなのか？」

「そう！」

それを受けて、口を利く者は、いなかった。

「せっかく、まとまったお金が入ったことだし、まず、あたしの甲冑を作り替えたいのよ」

「あの銀色の甲冑を？」

「そう。あんな物で戦ったら、目立ってしょうがないじゃない？ かと言って、この一年間、ずっと防具屋で探してたんだけど、これ以上の代物には出会えなかったし。だから、いつそのこと、作り替えた方が早いと思って。」

カイルの情報でも、アストーレの山には、腕のいい鍛冶屋がいるって話だったでしょ？ クレアの剣も、そこで作ってもらえばいいわ」

マリスが、普段着の時の簡単な防具が欲しいというので、ケイン

が付き添い、ヴァルドリューズとクレアは図書館で地図と魔法書を調べに行き、カイルは一人気ままに出歩くというので、夕刻、酒場で待ち合わせるようになった。

マリスは、町娘の服装から、茶色の革のチュニックと、ロングブーツに着替え、髪を高い位置で結ぶと、肩につくつかつかないかくらい長さになり、少年のような出で立ちになった。

「ただの町娘が、防具欲しいなんておかしいでしょう？　こういう場合は、男装に限るのよ。どう？」

「うん、なかなか似合うよ。ホントに男みたいだよ」

言ってしまったから、ケインは、はっとなった。実は、すごく失礼なことを言ってしまったのでは？　と。

「あたしは、オトコ顔だからね」

マリスは、別段、気を悪くしたようでもなく、さらっと笑っていた。

正直、ケインには、さっきまでの町娘の格好よりも、少年服の方が彼女には似合って見えた。

それは、マリスの中性的な雰囲気と、よく合っていたのだった。

その服装の方が、彼も、怖じ気付くことなく、まるで本当の男同士のように、気軽に彼女と話せた。

「見てみるよ、ケイン。これなんか、ゴーラ亀の甲羅で出来てるぜ」
防具屋では、マリスが男言葉で、ケインに黒い胸甲冑プレスト・プレートを見せる。

「こっちの肩当て（シオルダー・ガード）も、軽くて丈夫そうだし……、いっぱいあって、迷っちゃうなー」

彼女がウキウキしているのは、何も演技ばかりではなさそうだった。

職業柄か、武器や防具などを見ると、楽しくなってしまうのは、ケインにも通じるところがあったのだ。

その店を出てから、黒い革のリストバンドと、レザー・ナックル、肩当て、肘当てなどが、彼女の出で立ちに、新たに加わっていた。

帰り道では、他愛もない話の最中でも、マリスは気を抜いていないのが、ケインにもわかる。

もちろん、彼も何気なさを装ってはいても、辺りを伺っていた。まだ真昼である。

魔物が出現するには早過ぎる。

ヴァルドリューズたちとの待ち合わせは夕刻、町中の酒場であるのだが、マリスは、山の人気ひとけのない方へと歩いて行く。

まるで、何かを探しているかのように。

間もなく、一筋の煙が見えた。

マリスの表情が、微妙に変わった。

どうやら、探していたものが見つかったらしいのだが――

マリスとケインは、山賊たちが寛いでいるところに、出くわしてしまったのだった！

山賊たちは、ざっと三〇人。

茶褐色の皮膚に、ほとんど全員が頭を剃っていた。上半身裸の上に、黒い革の太いバンドを巻き付けた程度の、その地域では、典型的な山賊スタイルであった。

商人から強奪したであろう、宝石の連なった首飾りをしているものもある。

大柄で、目つきの悪い者ばかりであった。

そのような山賊たちが、道の両側を挟んで座っている中、マリスは躊躇ちゅうちよすることなく平然と突き進み、その隣のケインも、油断のない目で見渡しながら、進む。

「おっ？ 傭兵の若造だぜ」

「へっ！ こんな小僧どもに、国を預ける奴らの気が知れねえぜ」
二人に、野次が飛ぶ。

「おい見ろよ。良く見たら、なかなか美少年じゃねえか。あれなら、俺がお相手してやってもいいな」

「そうだな。ここんところ、女っ気のねえところばっか、襲ってたもん

な」

聞こえよがしの山賊の話に、ケインは、マリスの顔を盗み見たが、相変わらず毅然と歩いている。

「よお。あんちゃんたち、どこ行くんだい？」

賊の一人が、酒の入った木の器を持って、よろよろと歩み寄ってきた。が、マリスは、無視した。

「おいおい、そんな綺麗なカオしけると、俺たちのようなゴロツキは相手にしてくんねってのかい？」

「けっ、小僧が！ お高く止まりやがって！」

マリスは、ちらっと男を見やった。口元には、嘲笑の色が浮かぶ。「おっ？ 何だぁ？ こいつ、俺たちのこと、バカにしてんじゃねえか？」

そう言った賊の一人は、大きな段平を手に持ち、頭を刈った、大柄の太った男だった。

目、鼻、口などのパーツを、全部真ん中に寄せ集めた顔をしている。

おまけに、眉が困ったように下がっているので、盗賊としての迫力は皆無であった。

「ぷあははははは……！」

マリスが、いきなり吹き出し、腹を抱えて笑い出した。

「ば、ばか！ 俺だっておかしかったのを必死にこらえてたんだぞ！ それを——じゃなかった！ おいおい、こんな場面で、そりゃ

マズいんじゃないか！？」

ケインが横で忠告するが、なおも笑い止まないマリスに向かって、その賊は、顔を真っ赤にして、喚き散らした。

「こ、この小僧！ 何がおかしい！？ バカにしゃがって！！」

男が、段平を勢い良く振り下ろした！

ガキッ！

ケインが、いつの間にか紐を解き、布がはだけたバスター・ブレードで、マリスに向かって来た剣を受け止めていた。

「なっ、なんだ、あの剣は……!?!?」

「バケモンみたいなヤツだぜ」

山賊たちは、どよめいた。

たいていの者は、バスター・ブレードを見ただけで、恐れおののく。

それも、彼の狙いではあった。無駄な争いは避けるに越したことはないのだから。

「俺たちは、ただ、ここを通りたいだけだ。黙って通してくれないか?」

男の禿げた頭に、盛り上がった血管がピクピク脈打っている。

「ふざけんな! 誰が、おとなしく通してなんかやるもんか!」

どうせ、そのような返答だろうと、ケインはわかっていた。

途端に、山賊たちに囲まれる。

(どうやら、三〇人どころじゃなかったようだ……)

ケインが、目だけで賊の数を数えていると、

「きゃあ! こわい! ケイン、助けて!」

突然、マリスがケインにしがみついてきたのだった。

そこ場にいた全員が驚く。

ケインだけは、違う理由で驚いていたのだが。

「き、貴様、女だったのか!?!」

「そんなナリしてるから、てっきり男だと……!」

賊たちは、ざわめいていたが、次第に、彼らの目は、ギラギラと光り始めた。

「ここを通りたきゃ、通っていいぜ。もっとも、それが出来ればの話だな」

片目に眼帯をしている男が、薄気味の悪い笑いを浮かべて、剣を構えた。それを合図に、他の賊たちもそれぞれ武器を取り出す。

(マリスのヤツ、どういうつもりだ? わざわざ女だってバラさなくても——奴らの闘志に火をつけちゃったじゃないか!)

このような腕自慢の山賊たちは、村を遅い、落とした村の人々を

平気で嬲^{なぶ}りものにする。特に、女は辛い目に遭わされていた。散々犯された上に、最後は切り刻まれてしまうのだった。

軍隊にいたというマリスが、それを知らないはずはないだろう。今の彼女は昨日のように甲冑を着ているわけでもなく、身に着けているのは、たいした防具ではない。

その上、ヴァルドリューズもいなければ、獣神を召喚することも出来ない。

（ああ、せめて、防具屋にいた時みたいに、男でいてくれれば……

！　まあ、こいつらは、それでも構わないみたいだったけど……）
彼らの矛先は、ほとんどマリスに向けられていた。

その彼女は、まだケインの胸にしがみついたままだった。

（まさか、俺一人でこいつらと戦えと……？）

ケインは、そのつもりで、バスター・ブレードを構える。

野盗と剣と武遊浮術 (2)

ケインの構える、その異様な剣の大きさに、賊も一瞬ひるむが、この人数でならと思ひ返し、じわじわと間合いを詰めてきた。

皆、口々に、卑猥な言葉を吐いたり、下品な笑いを浮かべたりしている。

「へっへっ、どうした、お嬢さん？ 怖いかな？ 俺たちが。そっちの坊やを片付けたら、すぐにでも可愛がってやるからな」

ケインとマリスの周りは囲まれていて、逃げ場はない。

「言いたいことは、それだけみたいね」

マリスが低い声で静かに言った。

——その瞬間——！！

ケインの腰に下げていたドラゴン・マスター・ソードを、素早く引き抜き、目の前の賊の腹を、一気にかっ捌さばいていたのだった！

腹から、夥おびただしい血の量を吹き出して倒れるその男を血祭りに、立て続けに二人、三人と切り伏せていく。

山賊たちは、驚いて、後退あとずさった。

マリスがピタッと足を止め、振り向き様に、ビシッと剣を賊たちに向ける。

その顔には、余裕の笑みが浮かんでいた。

「どうしたの？ あたしを犯すんじゃないの？ このあたしが、あんたたちみたいな汚い不細工・イノシシブタに、そう簡単にやられるはずないでしょ？ せめて、イン○ン直して出直してこい！」

ケインの顔からは、血の気が引いた。

「な、なんて、口汚く罵るんだ！ こら、マリス！ 女の子のすることじゃないぞー！」

気が付くと、山賊どもは、赤くなったり、青くなったりして、皆完全に頭に血が上っていた。

ケインの目の前にいる者などは、顔面蒼白であった。

（さては、こいつ、マリスの言ったように○△X□か!?　なんだか、他にも、ちらほら、同じような反応してるヤツらがいる。

まったく、不衛生な生活してるから……じゃない!　何で俺が、こいつらのことを気に掛けてやらなきゃいけないんだ!　今は、こんなこと、どーでもいい!　）

マリスに一番近くにいた男が、怒りで肩をぶるぶる震わせた。

「こ、このアマ、ふざけた口きいてくれるじゃねーか!　見もしないで何がわかる!」

「……だから、あんたらも、そーゆー問題じゃなくて……」と、ケインが仲裁?　しようとするが、

「○△X□野郎!」

マリスが、また口汚く挑発する。

「てめえ、もう、許せねえ!」

山賊が束になってマリスにかかっていった!

と、同時に、ケインも、襲いかかってきた賊に対抗することになった!

賊の振り翳^{かざ}した斧を、マリスは、ひらりと避けると、木の枝に飛び乗った。

「高いところに逃げても無駄だぞ!　こっちには、ボウガンだってあるんだからな!」

ボウガンや弓矢を持った男たちが、マリス目がけて一斉に矢を放ったが、矢はむなしく空を切っただけだった。

瞬間、マリスは、ボウガンの一人の顔を蹴り倒していた。

そこへ、二〇人あまりの男たちが、一気に押し寄せ、彼女の姿は埋もれてしまった。

一方、ケインは一五人ほどを相手にしていたが、そのうち五人は、

既に倒していた。

彼の主義としては、殺しはしない。手足、腹などを攻撃し、戦闘不能にする。

むやみに人命を断つことはない。出来れば、反省して真っ当な道を進んで欲しい、とすら思っていた。

が、そのような輩は、まず、いるはずもなかった。

「その大剣は、俺たちがもらってやるぜ！」

「それさえなければ、貴様なんぞ、簡単に……！」

十人が、じりじりと歩幅を詰めてくる。

「そっか。じゃあ、持ってみるか？」

ケインが、バスター・ブレードを、賊たちに放るが、受け取った男は、その重さに耐えられず、大剣を抱えたまま、地面に尻餅をついた。

「おい、何やってる！」

他の男も、大剣の柄を掴むが、両手で引きずるのがやっとであった。

「な？ おっさんたちには、無理だって、わかっただろ？」

「ならば、これでどうだ！」

賊は、四、五人がかりで剣を抱えて、やっと腰まで持ち上げた。

そこへ、ケインが、バスター・ブレードへ蹴りをくらわせる。

賊たちは、弾き飛ばされた！

素早く、ケインはバスター・ブレードを取り返すと、左手で柄を掴み、慣れた様子で、軽々肩に乗せ、右拳は瞬時に戦えるよう、構えを取った。

その様子からは、剣術と武術を自在に使いこなしているのが、見て取れる。

実力の差は歴然であったが、それでも、賊たちは、まだ彼を若年の戦士と高をくくり、向かって行く！

彼も、今までの旅の道中、賊に出くわすこともあったが、賊に限らず、戦で出会う傭兵の中にも、きちんと武術を学んできたわけで

はなく、ただがむしやらに武器を振り回しているだけの者が多々いた。

それでは、モンスターとたいして変わらないと思っていた。

人間相手だから、手加減しているつもりだが、こうもケンカ下手だと、間違って死に追いやってしまうことも――などと、思っていると、予感が的中する。

「しまった！ 避よけろ！」

思わず、行動とは反対のことを、賊に叫ぶ。

左から来た奴を剣で振り払った時、その影に隠れていた者に気付くのが遅く、盾代わりにしていた大剣で、つい勢い余って切り飛ばしてしまったのだった。

男は、勢い良く、ぶっ飛んでいった。

「だから、ケンカ慣れしてない奴らは、やりにくいんだ！」
不必要に傷付けたことで、彼の中でも心が傷付く。

いつもそんな気がしていた。

いかに相手を最小限の被害で抑え、戦闘不能にするかが、彼の信念なのであった。

「こいつ、小僧のくせに、結構やるぞ！」

賊の間で、そのような声があちこちで起こる。

ケインは、大剣の峰を、肩に担ぎ、立ち塞がった。

賊たちと違い、息切れなどはしてもいなかった。

「やっとわかったか。こっちは、お前たちのように、自分より弱い奴しか襲わないような、おキラクな稼業じゃないんでね。常に、自分より強い敵とばかり戦ってきたんだ。若くても、お前らとはキャリアが違うんだよ！」

「なんだと！？ 生意気な！！」

ケインが、にやっと笑って挑発すると、賊たちは、カッと頭に血が上り、ますますなりふり構わず、剣や斧を振り回すのだった。

「まったく、大人気ないな」

ケインのスタイルは変わらず、大剣は、あくまでも防御で、それ

を軸に、拳と足蹴りのみで攻撃していた。

彼の方の敵は、大分手薄になってきたので、少しずつ、マリスのいた辺りに詰め寄って行く。

（マリスは大丈夫だろうか。さっき、二〇人くらいに襲いかかれていたけど……）

その時、賊の中に、マリスらしい人影を見付けて、ケインは啞然とした！

ケインの相手であった賊たちも、ピタリと手を止めて、声を上げる。

「なっ、なんだ、ありゃあ!？」

マリスが囲まれていた周辺には、十人の賊が、放射状に倒れていた！

全員、戦闘不能になって蹲うずくまっている。

そして、その中心には、次々とマリスにやられた者たちが、今もなお、積み重なっていくのだった！

ある者は剣で切りつけられ、ある者は、ちょっと殴られただけで吹っ飛び、その山に築かれていく。

ケインは、はっとして叫んだ。

「危ない、マリス！ 後ろだ！」

彼の警告もむなしく、男の一人が、マリスを背後から、羽交はがい締めにした！

「へっへっへっ、もうこっちのモンだぜ！ よくも、散々俺たちをコケにくれたな!! 見てろよ、捌なぶり殺してくれるわ!!」

ケインは目の前の賊たちを振り切り、マリスへと走った！

羽交い締めにされたマリスには、尚も五人の男たちが、じりじりと迫って行く。

「へっ！ 所詮は女だぜ。力では、男にかないつこないか」

「ただでは殺さねえ。じっくりいたぶってからだ」

マリスに迫る賊たちが、取り囲む。

「マリス！」

「こら、小僧！ 待ちやがれ！」

ケインと、彼を追う賊が走り寄ると、マリスが、不適な笑みを浮かべるのがわかった。

「やれやれ、あんたたち、相手の実力が、まーだわかってないようね？ このあたしが、あんたたち如きに、簡単に捕まると思って？ わざと捕まってあげたに決まってるじゃない」

そう言い終えると同時に、彼女は、身体を前に折り曲げる。

——と、羽交い締めしていた男の身体が浮いた！

「な、何い！？」

皆、咄然として、その場に立ち止まった！

「力つてのはね、あればいいってもんじゃないのよ。使い方よ」

マリスは、背中の男を、背負い投げると、すぐに男の足を両手で掴み、周囲の賊目がけて、まるで大剣のように、男を振り回した！
「うわあっ！ 何すんじゃあ！」

男たちは、次々と叩き飛ばされていく。それは、とても信じ難い光景であった。

「な、なんだ、あの女！？ バケモンか！？」

山賊たちから、声上がる。

だが、ケインには、彼女の力——いや、それが、実は、ある体術であることに、見当が付いた。

マリスの周りにいた賊たちが、殆ど飛ばされてしまったあと、大剣にされた男は放り出され、木にブチ当たって落ちる。

（なんつう、むごいことを……）

悪党も人間であるからには情けをかける彼とは、全く逆に、彼女は、完璧に彼らを物のように扱っていたのだった。

もはや、無傷の山賊は、ケインを追って来た五人のみである。

「じよ、冗談じゃねえぜ！ あんな怪力女に潰されてたまっかよ！
！」

賊たちは、命あつてのモノダネとばかりに、次々と敗走し始めた。

ひゅーん

何かが、賊の頭上を通っていく。

先頭を切って逃げていた賊の男が、腰を抜かし、後に続いていた男たちも、立ち止まった。

彼らの目の前に、いきなり現れたそれは、賊の一人であった！

彼らは、一瞬、何が起こったのか、理解できなかった——理解しなくなかったのかも知れなかった。

「このあたしから、逃げられるとでも思ってた？」

彼らの後ろから、マリスの声がする。

彼女は、放射状に倒れている男たちの中心に積み上げられた、呻き声を上げている負傷者の上に立ち、腕を組んでいた。

その中の一人を掴み取り、逃げようとする賊を足止めするために、ぶん投げたのだった！

「ケイン、そいつらを逃がしちゃだめよ！」

マリスの声が、悪党たちに、残酷に響く。

「ひーっ！！」

山賊たちは、その場に、へたり込んでしまった。

「あんたたち全員には、これから、『最大の屈辱』を味わってもらうわ」

マリスが妖しく微笑んだかと思うと、ひらりと飛び降りた。着地点には、やはり戦闘不能の賊が転がっている。

踏みつけられた賊が叫び声を上げるが、マリスはおかまいなしだった。

「あ……、あんた、一体……何者なんだ……？」

一人が、勇気を持って——というより、その言葉が思わず口を突いて出ていた。

「あたしの名前は、ルシール。ただの町娘よ」

「う、うそだっ！ そんなはずはねえ！！」

マリスは、どこまでも、賊たちに不親切であった。

「マリス、お前って、超ドSだったんだな」

山道を、町に向かって下っている途中、ケインが、苦笑しながら言った。

「そお？ 小さな悪を退治しただけよ」

マリスは、にこつと無邪気に笑った。

「あいつらは、金品を強奪したあげくには、平気で人を^{なぶ}戮りものにして、女は犯してきた連中なのよ。殺さないでやったんだから、それだけでも有り難く思ってもらわなくちゃ」

「でも、あいつら、あんな屈辱を受けるくらいなら、死んだ方がマシだと思ったんじゃないかなあ」

「だからこそ、『最大の屈辱』なのよ」

ケインとマリスは、顔を見合わせて、笑った。

「ど、どうか、命だけは、お助けを……！！」

五人の賊は、口々に、祈るように訴えていた。

「あんたたちは、そうやって命乞いをしている無抵抗の人間を、何十人、何百人、その手で殺めてきたのよ？ 自分だけは許してもらおうなんて、ムシが良すぎるんじゃないの？」

マリスは腰に手を当て、彼らを軽蔑の眼差しで、思い切り見下していた。

「反省してるんでしょーね？」

「も、もちろんです！ もう、いたしません！」

（調子のいいこと言ってるけど、こーゆー時って必ず、『ははは！ バカめ！』とか言いながら、躍りかかってくるヤツが、大抵一人はいるもんだが――どうやら、そんな殊勝気なヤツは、この中にはいないらしいな。かと言って、全員が、本当に反省してると思えないが）

ケインは、彼らとマリスとのやり取りを、静観していた。

「よろしい！　では、あんたたちは助けてあげる！」

「えっ？　そんな簡単に許しちゃうの？」

拍子抜けしたのはケインだけではなく、賊たちも呆気に取られ、口を半開きにして彼女を見上げていた。

「ただし、その証拠を見せてもらってからよ」

そう言うってから、彼女のさせたことは――

転がっている山賊全員を、素っ裸にし、一人ずつをロープで縛り、木の上から吊るすという作業だった！

「冗談じゃねえ！　何で、俺たちがそんなことを……！」

五人のうちの一人が、反抗的な目でマリスを睨んだ。

（あ、やっぱし、反省してない。まあ、確かに、反省してたとしても、そんなことするの、嫌だよな……）

と、ケインも納得した時、

しゅっ！

風を切る音がしたと同時に、マリスがマスター・ソードを横振りしていた。

触れてはいないはずのその男の頬からは、赤い一本の線が横に走り、血が滲み出た。

「あんたも吊るされたいの？　いいのよ、あたしが吊るしてあげても」

冷ややかな目で、マリスが言い放った。

「その代わり、ただ吊るされてるだけじゃ済まなくなるのよ。わかる？　あんたのケツの穴に、こいつをぶち込んでやるんだから！」

「わーっ！　まだそんなことを言うか！？　俺のマスター・ソードを、そんなふうに使うなー！！」

賊より早かったケインの反応に、マリスは、けろっとした顔で応える。

「あら、大丈夫よー。後で、こいつらに、綺麗に拭かせるから。これが、ホントの尻拭いってヤツよ。ほーほほほ！」

笑う者は、誰もいなかった。

——ということで、五人の賊たちは、自分の仲間を木に吊るし上げることに、専念しなければならなくなったのだった。

「ちよつとー、夕方から人と待ち合わせてんだからねー。早くしてくんない？」

マリスが、マスター・ソードを、ぶんぶん振り回して、催促する。

「は、はい、ただ今！」

「てめえら！ 裏切るのか！？」

「やめねえか、バカ野郎！」

五人は、苦しい声を上上げる仲間を、彼らに罵倒されながらも、急いで吊るし上げにかかっていた。まだ転がっている賊も、彼らとマリスを恨めし気に見つめている。

それは、彼らにとって、確かに屈辱であった。

全員を吊るし終えた後、マリスが更なる指令を与える。

それは、『用意しておいた太い木の枝で、吊るした者の尻を、思い切り叩いて回れ』ということだった！

「何てこと思いつくんだ！！ このアマ！！」

「この野郎！ ふざけやがって！！」

吊るされた賊たちは、口々にマリスに罵詈雑言を浴びせていたが、マリスは、両手を腰に当てたまま、彼らを振り返りもしなかった。

「……も、もういいじゃないっすか、そんなバカなこと、わざわざさせなくたって……」

「そうだぜ。あんたには、情けってもんがないのか！？」

五人が、それぞれに、怯える目で、訴える。

（これって、やる方も、やられる方も、確かにバカだよな。思いつくヤツが、一番とんでもないが……）

ケインも見守る中、

「情け？ な・さ・け？？ ――なによ、それ？」

無慈悲な言葉が返され、五人は一気にうなだれた。

「こいつらは、悪者よ！ 尻くらい叩かれて、とーぜんじゃないの

！ あんたたち、反省したんなら出来るはずよ！

さあ！ 今こそ正義のために、こいつらの尻を、思いっきりひっぱたくのよ！」

彼女の言うことは、皆には常に不可解であった。

務めを果たしたその五人を、マリスは約束通り、逃がしてやった。吊るされた中には、なんとか脱出する者もいるかも知れない。

逃げた五人は、常に生き残った元仲間に、追われる宿命となるのだった。

野盗と剣と武遊浮術（3）

「さて、皆との待ち合わせには、まだ時間がありそうだわ」
日は陰ってきたが、まだ薄暗くなり始めたばかりであった。
そこから、町までは、そう遠くはないだろう。

マリスが、辺りを見回す。

山道はなだらかな斜面になってきていて、ところどころ、大きな岩はあるが、適度な広さもある。

「場所としても、ちょうど良さそうね」

一人納得したマリスは、ケインを振り返り、

「あんなんじゃ、全然ウォーミング・アップにもなりやしなかったわ。だから、付き合ってもらおうわよ」

人差し指を立てて、ウイंकする。

何のことかわかっていないケインに構わず、彼女は、構えを取った。

拳がぶつかり合い、絡み合う。

汗が迸る。

彼女が大きく打ち込むと、彼の身体は、ふわりと宙に浮き、弧を描いて、岩に着地した。

場所を読んでいたように、間髪入れずに、間合いを詰めてきた拳が飛んでくるが、またしても風のように舞い上がる。

そこへ、高い蹴り（ハイ・キック）が攻めるが、彼は、信じ難いことに、彼女の蹴りを踏み台に蹴り上がり、空を舞った。

彼女も、飛び上がると、着地寸前に、相手の腰の剣を抜いた。

やむを得ず、彼も背中の大剣で対抗することに。

彼女の攻撃を躲しながら布を解く。

剣同士がぶつかり合う時、わずかに緑色の火花が散った。

「このくらいで、いいでしょう」

マリスが、剣を降ろした。

着地したケインは、ふうっと息を吐くと、額の汗を腕で拭った。

マリスの予告した、『お手合わせ』なのであった。

真剣同士になった時には、ケインは、正直ヒヤツとしたのだった。

「はぁ、やっと、ちょうど良い運動が出来たわ！」

マリスも汗を拭う。

「確かに、山賊相手より、この方がキツかったぜ」

ケインが苦笑いする。

山賊と揉み合っても息を乱さず、たいして汗もかかなかった二人であったが、それよりも短時間で済んだ『お手合わせ』の方が、はるかに凝縮された鍛錬となったのだった。

「それにしても、あたしの攻撃、全部躲してたわね？ 余裕で」

「余裕なんかないよ。当たったら痛そうだったから、必死に避_よけてただけで。全部は避けられなかったし」

「当たっても、ちゃんと受け身が出来てたわ。そんな人、今までいなかったわよ。かなり、鍛えてたでしょ？」

「ああ、それは、まあ……」

マリスは、じっとケインを見つめてから、にこっと笑った。

「また頼むわね」

「お安い御用——とまでは言えないけど、俺も訓練になるからさ。いつでも」

ケインも、微笑んで返した。

「ねえ、さっき言ってたけど、これって、『マスター・ソード』なの？」

まだ手にしているケインの剣を見詰めて、マリスが尋ねた。

剣身の腹の部分は、青銅とは違う青緑色の珍しい金属で、平たく、剣の形に合わせた形をしている。

そこには、一見、模様のような、呪文のようだが、魔法で使われるルーン語とも違い、マリスの見たことのない文字が掘られてあ

た。

刃はその外側を囲む、両刃の剣である。

他には、ガードと柄頭に質素な装飾があるのみ。

「形状も、その威力も、能力も、すべて謎に包まれている伝説の剣『マスター・ソード』が、見た目、こんなありきたりな、普通のロング・ソードみたいなものだったとはね」

「正確には、『ドラゴン・マスター・ソード』。この剣の存在は知ってたんだ？」

「ええ。伝説の剣のことは、聞いて以来、自分でも調べてたから。あたしも欲しいなあ、なんて思ったりして。

でも、これのどこが『ドラゴン……』なのかしらね。どこにもそんな装飾はなさそうだし……」

手合わせもそうだったが、剣を眺め回している様子からも、まだ若い少女であり、その整った外見を裏切る、生粋の武人らしさが伺え、ケインは、またもや意表を突かれた思いでいた。

「そういえば、使ってる時、……なんだか変な感じがしたわ。

まるで、——剣の中で、何かが暴れている——ような……？」

マリスは、言葉を探しながら、ためらいがちに話す。

「正当な持ち主じゃない者に使われて、——剣が嫌がってた——みたいに」

（なかなかいい勘してるな）

彼には、マリスの言わんとしていることは理解していたのだが、今説明することは、下手に彼女を脅かすことにもなると思い——とはいえ、怖いものなどなさそうな彼女ではあったが——あえて何も言わないでいた。

マリスは、剣が未だに『落ち着かない』気がしたので、ケインに返した。

「それで、そっちのは、『魔物斬りの剣——バスター・ブレード』よね？」

「ああ」

「ちょっと触ってみてもいい？」

ケインは、背中の剣の布を解き、マリスに渡す。

「わっ、重っ！」

マリスは受け取ると、道端の岩に腰を下ろし、膝の上で、じっと魅入ってから、両手で振り心地を見てみたり、日にかざしてみたりしていた。

ケインは、心の中で苦笑した。

剣を視る時の自分と、同じ見方であることに。

しかも、彼女は、賊たちと違い、剣を手にしても、よろめき倒れることはなかった。さすがに、ケインのように片手で扱うことはしなかったが。

決して、宝飾品のついた、美しく、洗練された剣ではなく、飾り気のない、無骨な剣であったにもかかわらず、マリスは、その銀色の鈍く光る刃に、しばらく、溜め息混じりに見蕩れていた。

「両刃よりも、片刃の方が切れ味が鋭いもの。思った以上の、良い剣だわ……！」

女性好みとは思えない剣であるのに、剣の良さを理解する彼女を、本物の戦士だと、ケインは好ましく思った。

「随分、使い込んでるのね。……どうして、こんなすごい剣を、持っているの？」

「受け継いだんだよ。俺の師匠だった男から。その男が、今際の際に、俺にくれたんだ……」

ケインは、視線を落とすが、口調は、それほど淋し気な様子ではなかった。

マリスは、彼を気遣うように見つめてから、言った。

「ごめんなさい。辛いこと、思い出させちゃって……」

ケインが、焦った。

「い、いや、いいんだ。マリスは、悪くないんだから……」

「マスター・ソードも、その人から？」

「これは、俺が自分で手に入れたんだけどさ」

マリスの目が、見開かれる。

「ねっ、ねっ、どうやって？」

「父親と暮らしてた村の近くに、たまたまマスター・ソードの眠る山があつて。」

早い話が、この剣のマスターから試練を受けて、なんだか合格したから、授かった——ってところかな」

「それで、それで？　どんな試練だったの？」

マリスの瞳は、ますます興味津々に深く瞬き、岩の上から、身を乗り出す。

そんなマリスに、眩しさを覚えたケインは、それを悟られたくなくて、話せば長くなるから、今は、皆と待ち合わせもしてることだし、いずれ話すと約束して、その場を逃れるので精一杯であった。マリスは、ちよつと残念そうであったが、約束には漕ぎ着けたので、とりあえずは引き下がった。

「そう言えば、マリスは、自分の剣、最後まで抜かなかったな」

「ああ、これは、切れ過ぎちゃうからね」

言いながら、マリスは、別の岩に腰掛けているケインに、剣を鞘ごと放った。

驚いたことに、それは、意外にも重かった。

マスター・ブレードほどではなくとも、マスター・ソードよりも、普通の剣よりも、かなり重かったのだった。

ケインは、多少の装飾のある、その剣を抜いてみた。

「この剣は——？」

「ただのロング・ブレードよ」

「えっ？　それで、魔獣ドラドの首を、一撃で斬り落とせたっていうのか？」

困惑している彼に、マリスが微笑んだ。

「コツがあるのよ」

「コツだけじゃ、ああはいかないし、普通の剣じゃあ、魔物は斬れない。この剣には、魔力がかかってるだろ？　それも、かなり強力

な。魔除け程度では済まないほどの」

マリスが、ひゅーと、口笛を吹いた。

「その通りよ」

おそらく、ヴァルドリューズが、対魔物用の魔法をかけたのだろう、とケインは解釈した。

「さっき、手合わせしてみて、剣も見せてもらって、わかったわ。モルデラでは、あの時、あたしが乱入しなくても、実は、ケインだけで魔獣を倒せたんじゃない？」

ざーんねん！ バスター・ブレードの働きは見たけど、そっちの剣がマスター・ソードだって知ってたら、余計なことしないで、観^みてるんだったわ」

「いや、クレアの護身のために貸すのは、バスター・ブレードじゃ無理だろ？ もうちょつとモンスターの数を減らしてから、マスター・ソードを使わせてもらおうとは思ってたけど、ドラドの次に出て来た相手があればじゃあ、いくらマスター・ソードでもどうか……」

「やってみれば良かったのに」

「だって、お前達が獣神召喚して倒したくらいの敵だぜ？ あんなデカイヤツ、今まで出逢ったこともなかったし……」

（それに、マスター・ソードは、……まだ『完璧』じゃない）

それは、口には出さなかった。

その間に、マリスがケインに大剣を返し、ついでに、ケインの隣に座る。

お互いの剣を、元通りに納めている間も話は尽きそうにない。

「ケインは、左利きなの？ さっきも、魔獣と戦っていた時も、左手で剣を使ってたわね」

「よくわかったなあ。右利きなんだけどさ、動きを偏らせないためもあって。」

片方の手でしか剣を操れないと、いつの間にか癖がつくからな。戦場では、相手の利き腕に合わせて、使い分けてるんだ」

「へー、そうなの」

マリスが、目を輝かせて、感心している。

「それにしても、伝説の剣を二つも持っているなんて――。やっぱり、ケインで、ただ者じゃなかったのね。

スカウトしたあたしの目に、狂いはなかったわ」

紫の瞳が、彼のふいを突いて、群青色の瞳を捕えた。

「そ、そんなこと、ないよ」

うっかり、カッと赤みの差した自分の頬に、腹立たしさを覚えながら、ケインは平静を装った。

「それより、マリス、きみの体術は、もしかして……『武遊浮術』
なんじゃ？」

マリスは、目を丸くした。

「よく知ってるわね。あんまり知られてないのに」

「流れる川の水が、重い大木をも浮かせてしまう浮力のように、力
はたいして使わずに、相手の勢いを利用して、自分以上の重さの
ものをも操る『武遊浮術』――俺も、ちょっとだけかじったことがあ
るんだ。武術は何でも極めてみたくてさ」

マリスは微笑むと、語り始めた。

「おおもとは、東洋の、とある時の皇帝が、自分の護身にも、スパ
イにもなりうる女性を、手元に置いておこうと考え、女性の武道家
たちを中心に編み出されたと聞くわ。

今では、『武遊浮術』の担い手も枝分かれして、皇帝の側にいる
者と、独立して外に向かった者とがいるそうよ。

独立した方は、女性が、自分の身を守るためにと、伝授するよう
になったんですって」

「へえー、そうだったんだあ？」

「それと、あれは、女から女へ受け継がれるのに、どうして、男の
あなたが使えるの？」

「え？　そうなの？　数年前に、東方の雑技団の女の子と偶然知り
合って、教わったんだ。『簡単なだけなら』って。」

言葉があんまり通じなくて、俺が無理矢理頼みこんだから、今思うと、断り方がわからなかったのかも？

その子とは、遠征の間しか会えなかったから、日数もそんなになくて、だから、術を極めるまではいかなかったんだけど、男には教えちゃいけなかったんなら、まずかったかな？ あの子、怒られなかったかな？」

マリスは、ケインを改めて見つめてから、言った。

「なるほどね。だから、あなたも、あの重いバスター・ブレードを、簡単に振り回せたってワケなのね？」

「ご名答！ ま、昔っから、重い剣で慣らされてはきたんだけどな」ケインは、笑ってみせた。

「それで、その東方の女の子は、可愛かった？」

予期せぬ質問に、ケインは少々面食らう。

「えっ？ ……まあ、普通かな？ 特別、可愛いとかでは……」

「でも、その子は、ケインのこと、気に入ったから、術を教えたんじゃないの？」

「ええっ？ ……い、いや、そんなことは、ないと思うけど……」

「あたしは、女だから、わかるわ」

マリスは、そこから見える岩山の風景に視線を移してから、続けた。

「彼女は、あなたに……惹かれていたのよ。だから、掟を破っても、教えたの」

「そ、そんなこと……だって、一ヶ月もなかったんだぜ？ 俺たち、お互いのことなんか、ロクに話してもいないし……」

「過ごした時間の長さなんて、関係ないわ。恋に落ちる時は」

マリスが、すぐ隣で、ケインを見上げる。

紫色の瞳が潤んでいる。

ただでさえ、神秘的な、紫色の宝石のような美しい瞳は、さらに輝きを増していた。

間近で、彼女のそのような瞳を見ることになるとは、全く予想外

だった。

思わず、その瞳に魅入ってしまいがちでも、彼女が、何を言わんとしているのか、見当も付かず、ただ困惑するばかりだった。

それには構わず、マリスは続ける。

「あたし、その子が、なんで『武遊浮術』をケインに教えたか、わかるわ。

あなたは、誠実な人だもの。決して、悪用しないって、わかったからよ。

そして、そんなあなたを……好きになったんだわ……」

まるで、彼女自身の告白であるかのように、マリスの瞳が和らぎ、淡く、頬が染まっていく。

（こんなに可愛かったっけ……？ そりゃあ、綺麗な娘こだとは思ってたけど……）

野盗相手に遊んでいる時とも、手合わせした時とも全く違う、初めて目にする彼女のそのような表情に、ケインは、心臓の鼓動が速くなっていくのを感じていた。

「ねえ、知ってた？ 東洋の時の皇帝は、武遊浮術を極めた女性を、側に置いていたのは、単なる護衛とスパイとしてだけじゃなく、……愛人としてでもあったんですって。

愛人をそのように鍛えたのか、それとも、側にいるうちに、二人の間に愛が芽生えてしまったのか……、どっちが先なのかしらね？
どちらにしても、ロマンチックよね」

ため息の後、マリスは、憂えた瞳をケインに向けると、ためらいがちに尋ねた。

「ねえ、ケインは、誰か……約束してる人とか、いるの？」

「……い、いや……、旅に出た時に、別れた女ひとはいたけど、……約束なんかは……」

そのようなプライベートなことは、誰にも明かしたくない彼ではあったが、つい答えてしまった。

だが、当然、心が疼うずくと思っていたのが、不思議と、そうでもな

かったことに気付く。

「そう。……その女とは約束してないんだったら、安心したわ。」

それなら、いいかしら？ ケイン、あたしは、あなたのことを……

……初めて逢った時から……」

心臓が大きく反応したのを、彼は、彼女に気付かれたんじゃないかと、ますます焦った。

眉目秀麗な妖精エルフを連想させる、美しく凛々しい、中性的な外見であつたはずが、今では、尊敬とも取れる従順な視線を送ってくる、恋する乙女のようなであつた。

（まさか、まさか……？？ いや、そんなはずは……、でも……なんで……？？）

まったく、自分の身に何が起きているのか、わからなかった。

彼女の瞳に呪縛されたように、身体が動かなかった。

なぜ、こんなことに……？

ただ、こうなってしまったら、もう彼は、自分が逃れられないことはわかっていた。

既に、彼女には捕まっている、と認めざるを得なかったのだ。

マリスの瞳が、やさしく瞬き、彼女の顔立ちの中で、唯一女性的である、淡いピンクに色付いた、整った形の唇が、微笑む。

この可愛い、同じ唇が、山賊に向かってあのように口汚く罵っていたとは、とても考えられない。

いったいどのような感触なのか……？

などと、ぼうつと考えているうちに、マリスの瞳が、恥ずかしそうに伏せられた。

ケインの心臓は、またもや大きく鳴り、飛び出しそうであつた。思わず、抱きしめたくなる衝動に駆られる——！

——が、

そこで、ぱちっと、彼女の瞼まぶたが開く。

「——っていうのが、『武遊浮術』の技の一つ、『愛技』あいぎよ」

唐突に、人差し指を立てて、あっけらかんと言うマリスに、ケインは全身固まった。

「女スパイでもあるわけだから、色仕掛けで相手を油断させたり、口を割らせたり出来るようにって、考えられたんだと思うわ」

もう、普段の彼女の表情と、口調に、戻っていた。

「……技……？」

ゆっくりと、無意識に、ケインの口からこぼれた。

「そう。それで、勘違いした男がふらふら近付いて来たところを、ガツン！ とね」

マリスは、拳を振り上げて見せ、にやっと笑った。

「ね？ こんな技もあるわけだから、武遊浮術は、男性御法度の術なの」

ケインは、まだ呆然としていた。

マリスは、ころころと笑った。

「やっぱり、知らなかった？ 今のは、愛技でも初級編よ」

「……初級……編……？」

ケインの思考回路は、徐々に機能を回復してきた。

（つまり……、からかわれてた！ ——って、ことか！？）

愕然とした後、ふつつつつ……と、こみ上げてくるものがあった。

何を期待していたのか？ どのような言葉を待っていたというのか？

旅に出てからというもの、誰にも話さなかった別れた恋人のこと、思わず白状してしまい、即座に後悔が襲ってきた。

（真に受けてた俺って、完全にアホじゃないか！？ しかも、あのまま、触れようもんなら、殴られてたわけだ）

腹立たしいやら、情けないやらで、彼の中で葛藤が起きているこ

となど、マリスは知りもせずに、無邪気に感心していた。

「それにしても、つられなかったとは、さすがケインね！　あたしのこの技が効かなかったなんて。それとも、初級編だったからかしら？」

上級編だと、もっとすごい技もあるから、気を付けてね」

と、にっこり。

（……って、誰に気を付けろってんだ？　誰に？　お前しかいないだろうが！？）

途端に、マリスが憎らしく思えた。

だが、彼が一番腹を立てたのは、自分にであった。

いつから、術中にハマったのか？

ぐるぐるとさかのぼってみるが、武遊浮術の話からだろうか？

いや、剣の話？

実は、最初の出会いから仕組まれていたのではないか！？

などと、疑い出したらきりがないのであった。

そんな彼の心境には気付かずに、マリスは、真面目な顔になって言った。

「あたしは女だから、身体の作りや大きさ、力では、どうしても男の人には、かなわないわ。だから、強くなるには、いろいろと工夫が必要なの。

『愛技』も含めて、武遊浮術は、あたしが旅をしていく上で、最も重要な技だわ」

旅をしていく――

それは、男にだって、過酷である。女には、もっとであろう。

環境の違う土地や、野盗や魔物が出る険しい道のりはもちろん、その上、魔物退治をしていくとなると、より一層危険が伴う。

道案内や護衛が必要なこともあっただろう。

だが、例えただの案内人でも、仲間でも、同行者であれば、魅力

的な彼女に、その気になってしまう者もいたのかも知れない。

『あたしが頼みたいのは、助っ人よ』

という言葉を書き出す。

今思うと、それは、友達や、ましてや恋人などは望んでいない、とも取れる。

あくまでも対等な『同志』なのだ。

見透かされたんだろうか？ 神秘的な紫色の瞳に魅入ってしまったこと、憧れに近いものを、彼女に抱き始めていたことを――？

それ以上の想いに膨らむ前に、バシッと潰された感もあった。

当のマリスに、果たして、そこまでのつもりがあったのか。

単に試したただけなのか、からかったただけなのか、または、本当に無邪気に術の解説をただけなのか、まったく見当が付かない。

ショックが癒えないままのケインではあったが、とにかく、自分は単なる助っ人なのだと思死に思い直し、なんとか平常心を取り戻す。

「なんで、そうまでして、戦士なんて危険なことやってるんだ？

マリスは、魔法能力だって普通の人よりも高いんだったら、魔道士にだってなれたんじゃないか？

接近戦で少人数相手の格闘・剣術よりも、遠距離戦・複数相手に出来る呪文攻撃の方が、危険が少ないだろ？ 偏見じゃないけど、

……女の子なんだし、普通は、そっち選択するんじゃないか？ クレアみたいに」

マリスは、ケインを改めて見直した。

「ケインは、なぜ戦士なの？ 男だろうと女だろうと、危険なことには、変わりないでしょう？」

少し冷静な彼女の声であった。

「そうだな……、向いてるのか、才能があるのかはわからないかはわからないけど……、性に合ってるからかな？

でなきゃ、旅にだって出ないし、傭兵だって、とっくに辞めてると思うしな。

「だいたい、俺から『こいつ』取ったら、何が残るってんだ？」
と、剣をくいと親指で指してから、少し照れたように彼は続けた。

「それと、……師匠に追いつきたくて。戦士としてだけじゃなく、人間的にも尊敬できた、彼のようになりたいって、幼心に思ったから……かな」

マリスが静かに笑った。

「あたしもおんなじよ。あたしに武術を覚えてくれた人を、尊敬してたし、懂れてた。

その人もあたしも、ただ、女だったってだけ」

彼は、改めて、彼女を見詰めた。

「そうか……、そういうことも、あるんだな……」

恐るべし武遊浮術の『愛技』——初級だとは言うが——を、身をもっ
以てして体験した彼は、マリスに対し、すっかり警戒心を抱いてしまったが、剣を興味津々に見入っていた彼女のあの様子だけは、演技ではなかったと思う。

マリスがどういう人物なのかは、まだまだ掴めなかったが、同じ戦士としてなら、わかり合えたような気がしたケインであった。

黒い竜——ダーク・ドラゴンの力　（1）

アトレ・シティー——

中原と呼ばれる、西洋と東洋とをつなぐ大陸の、そのちょうど中心の地域エリアにある国——アストーレ王国城下町である。

カイルの仕入れた情報では、数年前に魔道士の参謀が誕生してから、他国との交易も盛んになり、鉱山からは、珍しい宝石の原石も発掘され、急成長しているという。

タルムの町から森を抜け、川を越え、その間、モンスターにも出会う、マリス一行は、三日で辿り着いた。

国境では、身分証明を見せなくてはならないなど、大きい国には付き物の、入国審査があった。

マリスは、持っていた、いくつものネックレス型ネーム・プレートの中から『マリユス・ミラー』と男性名が彫られたものを選び出し、首から下げている。タルムの町で購入した革の服を着ていて、今回も、少年傭兵で通すつもりようだ。

なぜ、そのように、偽名がいくつも必要なのか、ケインは不思議に思った。

傭兵のケインとカイルも、常に、銀のネーム・プレートを首にかけていたが、当然、本名である。

ヴァルドリューズも、マリス同様、裏面に偽名の入った魔道士の紋章を、黒いフード付きマントの胸に、付けていた。

クレアは、巫女の証である名前入りネックレスを、そのまま身分証明に使っていた。

本来ならば、巫女を辞めた時点で返さねばならなかったのだが、巫女のままということにしておいた方が、世間の信用度も高く、このような入国審査などの場合でも有利なことから、マドラス（マリス）が、モルデラの祭司長に返さなかったのだった。

気の弱い祭司長が、魔獣を倒したマドラスを恐れ、強く言えなか

ったのをいいことに。

（ヴァルは、国を追われたって言ってたから、自分の辿った形跡を残さないように……ってのはわかるけど、マリスは……？ 国を出て来たっていうのは、亡命？ 逃亡？）

折りをみて、聞いてみたい気もするが、訳ありであるのなら、自分から話してくれるまで、待った方がいいだろう、とケインは思い返した。

アトレ・シティーは、一行の出会ったモルデラの町よりもさすがに大きく、そして、栄えていることは一目瞭然であった。

国境から、町の中へ入った途端に、いろいろな店が並んでいて、建築物も西洋文化が取り入れられ、洒落ていた。

一行は、まず宿を予約した。宿屋の主人も愛想が良く、宿の内装も、手が込んでいた。

どこへ行っても、印象が良い。

鍛冶屋の看板を近くに見かけ、ケインが通りすがりの町人に聞くが、誰もが、「あそこ以外の鍛冶屋って、湖のどこにあるやつかね？ 腕はいいけど、ちょっと変わった人だって噂だよ」という。

「なあ、マリス、すぐその鍛冶屋じゃだめなのかよ？ 町外れの湖って、な〜んか遠そうだぜ？」

巻き紙の地図を指差して、カイルが尋ねる。

「腕が良くな〜ちゃ、いやなの」

マリスに譲る気はなかったので、皆で湖を目指すことになった。

「なあなあ、クレアってさあ、どんな男が好きなの？」

まだいくらか歩かないうちに退屈してきたのか、カイルがクレアに話しかける。

「そんな風に、男の方のこと、見たことないわ」

「じゃあさあ、今まで、好きになったヤツとかも、いなかったの？」

「そんなこと……、別にいいじゃない」

「この中の男じゃあ、誰が好き？」

クレアが、困ったように、ケインに目で訴えた。

「おい、カイル、退屈だからって、クレアにちょっかい出すのはやめろよ。困ってるじゃないか」

「いーじゃん、ちょっとくらい。なっなっ？」

カイルが、ケインに向かって、片目を瞑る。^{つぶ}

「なんだ、それは！？」

二人を見ながら、クレアがますます困った顔になった。

「巫女の修行には、恋愛感情は妨げになるの。優れた才能のあった巫女が、修行中に、盲目的に恋に走ったら、一気にその能力が低下してしまっただって話もあるのよ。」

黒魔法は、そこまでじゃないけど、やはり、恋愛しない方が、早く術を習得出来るとも言われているわ。ましてや、クレアは、今は、魔道一筋でしょう？ それどころじゃないわよねえ？」

マリスに助け舟を出されて、クレアは安心したように微笑んだ。

「へー、そうなんだー。しかし、もったいない話だよなあ。せっかく、こんなにかわいいのに、恋愛しちゃいけないなんてなー」

カイルは、心から残念そうに言った。

「その点、マリスは戦士だから、関係ないんだろ？ 良かったなあ」

カイルが笑いながら、マリスの背を叩いた。

マリスは、への字に眉を寄せて、カイルを見ていた。

ヴァルドリューズは、黙々と彼らの最後尾にいた。

「なあ、ちょっと休もうぜー。俺、もう歩けねーよ」

しばらく山道を歩いた時、とうとうカイルが根を上げて、道端の岩に、へたり込んでしまった。

「カイル、クレアだって、こんな慣れない道、頑張って歩いてるんだからさ、お前が先に根を上げてどうする？」と、ケインが呆れる。

「うるせーなー。俺は、お前やマリスみたいに、鍛えられてねーんだよ」

「まったく、根性なしなんだから……！」

「いいわ。ここで休憩しましょう」

マリスの一声で、皆は木陰にそれぞれ場所を取り、座った。

ふと、ケインは、クレアの、革で編んだサンダルからはみ出た部分が、赤く腫れていることに気付いた。

「大丈夫か？」

「ええ」

「山歩き用の柔らかい革のブーツがあるから、町に戻ったら、買った方がいいな」

「ええ、そうするわ」

クレアが、痛みを堪えて微笑んだ。自分の手のひらを向けて、治療魔法をかけている。

「代わろう」

ヴァルドリューズが、クレアの足の治療を続けた。

「へー、ヴァル、あんたも、やさしいところあるんだな」

そう言って、ケインは、はっとなった。

（……まさか、カイルのヤツ、クレアの足を気遣って……。それで、わざと疲れた振りをしたんじゃない？……）

そのカイルは、何気ない様子で、ポケットから紙巻き煙草を取り出して、美味しそうに吸っていた。

「一本ちょうだい」

マリスが、カイルと同じ岩に腰掛けた。カイルが、マリスのくわえた煙草に、マッチで火を点けた。

「はー、おいしー。煙草なんて、久しぶりだわー」

カイルが笑った。

「煙草もやるのか？　そう言えば、お前、一体いくつなんだ？」

「一六」

「ええっ!？」

ケインとクレアは、同時に声を上げていた。

ヴァルドリューズも、いくらか目を見開いている。どうやら、彼

も、マリスの年齢を知らなかったらしい。

カイルだけは、それほど驚いてはいなかった。

「そっかあ。意外に、俺より年下かも？　とは思ってたけど、そこ
までだったとはなあ。俺は、二〇なんだけどさ」

「ええっ!?」

またしても、ケインとクレアが驚きの声を上げたのは、同時であ
った。

「なんだよ、お前ら、さっきから」

「カ、カイル、お前……年上だったのか……?」

「なんだよー、見りゃわかんذار?　このセクシーさは、オトナの
男じゃねえと醸し出せねえだろーが」

「はあ、……セクシーねえ……」ケインが、怪訝そうな顔で見てい
る。

「そういうお前らは、いくつなんだよ?」

そして、判明したのは、ケインとクレアが一八歳、ヴァルドリュ
ーズは二四歳ということだった。

（それにしても、マリスが一六なんて……信じられない!　それで、
あんな恋愛の演技が出来たってのか?）

女にしては、背も高く、一七〇センチ近くあり、あどけない中にも
大人びた雰囲気、たまに気取ったような言葉使いをしていたこと
や、どこことなく、しぐさに気品があることから、自分よりも年上な
のかと思っていた。

そうになると、タルムの山での出来事は、より一層腹立たしい。

ますます、彼は、一六歳の小娘などに騙だまされ、振り回されるわけ
にはいかない、と強く思ったのだった。

（ヴァルのヤツにしたって、二四という異例の若さで、もう一流の
魔道士とは……）

ケインが、ヴァルドリューズを、ちらつと見て、そのように考え
ていた時だった。

「いけないわ!　煙草は一八になってからよ!」

治療を終えたクレアが、マリスに近付いて行く。

「なによー、カタいこと言わないでよー」

クレアは、マリスの煙草を取り上げると、岩に擦り付けて火を消した。

「そこまですることないじゃないのー！」

「いいえ！ あなたの身体を思えばこそよ！」

睨みつけるマリスに対して、クレアも引かなかった。

「カイルも、煙草は、周りの人にも悪影響なんだから、今後気を付けてよね！」

クレアの注意は、カイルにまで及んだ。

とぼっちりを受けたカイルは、口をあんぐりと開け、思わず煙草を落としていた。

「んもう、……それじゃあ、出発ー」

不機嫌なマリスの一言で、一行は、湖のほとりにあるという、鍛冶屋を目指し、再び歩き始めることになった。

「ほう、お坊ちゃんたち、どういったご用件かね？」

鍛冶屋に着くと、そこには、想像し得なかった光景が広がっていた。

店の中は、そのまま工房になっていて、壁際の棚には、いろんな形の瓶や壺が並ぶ。

奥には、助手だろうか、顔に生気のない、ひよろひよろした男が一人、異様な色の煙があちこちから立ち込めている中、うろうろしているのが見える。

そして、一行の目の前に立っているのが、横に幅広い顔の半分が焼け爛れ、不揃いな大きさの目は赤く充血し、まだそんな年ではないだろうに、背中の丸まった、妖し気な風体の男だった。

室内だけでも充分不気味であったのだが、それに加えて鍛冶屋の主人は、一層不気味に人目に映ったことだろう。

「腕のいい鍛冶屋ってのは、あんたのことか？」

マリユス（マリス）は、そんな不気味な男にでも、一向に引く様子はなく、懐かしそうにも取れる笑みを浮かべて、話しかけたのだった。

主人は、にったりと笑った。

「腕がいいか悪いかは、そのお客の決めること。お気に召すまで、料金は頂かない主義で、やっておりますゆえ」

マリユスは、ふふんと笑った。

「わかった。じゃあ、お宅に頼むことにするよ」

マリユスは、ケインに持たせていたケースを開け、中にある、銀色の甲冑を見せた。

「ほう、これはまた、お見事な甲冑ですな」

主人は、爛れていない方の口の端を少し上げて微笑んだつもりが、歪んだ笑いになり、余計に人に恐怖感を与えた。

「これを、別の甲冑に作り替えてもらいたい。なかなか、これ以上の甲冑にお目に掛かれないもんでね。これ自体を作り替えた方が、早いんじゃないかと思ってさ」

「デザインを変えて、ということですか？」

「色もだ。それと、オレ、こう見えて、魔法能力も高くてね、魔道士を目指してるから、魔力を抑える効果も欲しい」

「それでは、魔力を抑える石を、埋め込みましょう。正規の魔道士協会のものを使用しないと、見つかった時に後々面倒なので、少々値が張ってしまいますが……？」

「構わんさ。金なら、あるからな」

主人は、紙と羽ペンを持って来て、インクを付け、しばらくマリユスと交渉していた。

「ところで、この甲冑は、どうされたんですかな？ 見たところ、これは、相当高価な代物のようで、おそらくは、どこかの国の騎士のものではないか、という気が致しますが？」

ひととおりの打ち合わせが終わった時、主人がマリユスに尋ねた。「拾ったんだよ。モルデラの山に転がってたんだ。持ち主が捨てて

いったんじゃないかな？ たまたま通りかかって見付けたんだけど、いいものみたいだったからさ、勝手に持って来ちゃったんだ。誰にも言うなよ」

マリユスは、いかにもいたずら小僧を装って、ウインクした。

「ほう、拾い物でしたか！ それでは、坊ちゃんのサイズに、直さないといけませんなあ」

主人は目を思い切り見開くと、メジャーを持って、マリユスに歩み寄り、はあはあと荒い息をした。

不気味さが、ますます募る。

「えっ！？ い、いいよ、いいよ！ サイズは大丈夫だったからさ、この通り作ってくればいいからさ！」

主人は、少し疑い深そうな、だが残念そうにも取れる顔をしたように、皆には見えた。

「なあ、マリス、あんな妖怪地味た、いかにも怪し気なじじいなんかに頼んで、本当に大丈夫なのかよ？」

鍛冶屋を出て、開口一番は、やはりカイルだった。

それを聞いたクレアが、じろつとカイルを睨む。人を見かけで判断するな、と言いた気だ。

「あーゆーのに限って、腕は良かったりするものよ。ワケありのものも、扱い慣れてるみたいだったしね」

マリスは、一向に気にしていなかった。

夜には、甲冑が出来上がるというので、彼らは、そのまま湖で時間を潰すことにした。

しばらく、座っていると、周りを見渡していたケインが、近くに茂っていた木々の中から、手頃な枝を見付け、形を整えると、草の蔓を糸代わりにくくりつけて、釣り竿にする。

「おっ？ 釣りか？ そうだな、時間潰しには、それがいい」

カイルも真似して、竿を作る。

ケインが、クレアとマリスの分も作りかけ、ふと近くに座っているヴァルドリユーズを振り返る。

「ヴァル、お前もやるか？」

だが、彼は、座ったまま、身動き一つしない。

やれやれ、また興味なしか……と思うが、どうもおかしい。

ケインが、ヴァルドリユーズの顔の前で、手を振ってみるが、何の反応もない。

「瞑想めいそうに入ったわね」

ケインの隣では、マリスが屈んで、ヴァルドリユーズを見ている。「時間がある時は、いつもそうなの。高い魔力を常に保っておく為に、イメージ・トレーニングしてるのよ」

「だったら、せめて、目くらい閉じてくれればいいのに。ああ、びつくりした」

魔道に疎いうとケインの反応が、逆に新鮮だったのか、マリスが吹き出して笑った。

「さ、ヴァルのことは、放っておいて、みんなで釣りを楽しませよう」

湖の水は、濁った青緑色をしていて、深いのか浅いのかもわからなかった。

暇つぶしでなければ、誰も、こんなところで釣りなどしたくはなかったのだが、わざわざ町に戻るのも面倒臭かったので、仕方なくである。

餌になりそうなムシを、地面を掘って見付け、蔓と小枝と一緒にくくると、カイルが、懇切丁寧に、釣りのやり方を、クレアに教える。

クレアは、ムシを怖々見ていたが、カイルに言われた通りに、水面に投げ入れた。

マリスは、経験があるらしく、ケインの隣で、勝手にやっていた。「小さい頃、じいちゃんに教わったんだー」

マリスが懐かしそうに、邪気の無い笑顔で言った。

一瞬、その和やかな笑顔に魅入ってしまったことを、恨めしく思いながら、ケインは気を取り直した。

「おじいちゃんと、一緒に住んでたのか？」

「ううん。森の中に、一人で住んでた魔道士のおじいちゃんね、あたしは家を抜け出して、しょっちゅう遊びに行ってたわ」

『糸』を湖に投げ直して、彼女は、続けた。

「ゴドーじいちゃんは、何でも知ってて、何でも教えてくれたの。見た目からして変わってたから、みんなは変人扱いしてたけど、あたしは好きだったわ」

（そうか。それで、一風変わった人にも、慣れてたわけか）

納得してから、ケインは、また尋ねた。

「魔法は習わなかったのか？」

「なんか、魔法って面倒くさい気がして。ゴドーには教わらなかったわ。彼も、教えようとはしなかったし、魔法で使われる『ルーナ語』は、家庭教師に習わされたけど、習った魔法は白魔法だったしね。

ああ、『サンダガー』の召喚で、あたしが唱えたのは、白魔法なのよ。

今では、あの魔法しか使えないの。神を召喚するための、あの『全身浄化』のみ。

まるで、それが出来るようになったのと引き換えみたいに、それまで使えた白魔法が、使えなくなっちゃって」

ケインは、マリスの様子を見ていて、それは、作り話ではないと思っただ。

「白魔法を家庭教師に習ってたってことは……？」

「あたしの母親が、……実は、巫女で、それで、あたしも、まあ、……貴族の生まれだったから、神殿に、巫女の修行にも行かされたこともあって……」

マリスは、言葉を選び選び、ケインの顔をなるべく見ないように

して、言った。

（……ホントかな？　　なんだか、今までと違って、歯切れの悪い言い方だし……。）

でも、こんなことでウソついて、何になる？

ケインが、疑いの目を、彼女に向けていると、

「マリス、お前、巫女の家系だったのかよ！？　じゃあ、両親とも神官か！？」

少し離れたところにいたと思ったカイルが、竿を替えに、近くまで来ていたところだった。
あとすさ

ひどく驚いて、後退っているカイルの後ろから、クレアも駆け寄って来た。

「それなら、マリスも巫女だったの！？　」

「なんだと！？　ウソつけ！　」と、即座にカイル。

マリスが慌てて言い訳した。

「ちょっと、大声出さないでよ、恥ずかしい！　ほらね、どうせ、誰も信じてもらえないし、驚かれると思ったから、あんまり言いたくなかったのに」

恥ずかしさで上気した顔は、演技ではないだろう、とケインは判断した。

マリスの本心を垣間見れたことで、ケインは、微笑ましいのと、してやったりと両方の思いでくすくすと笑った。

「ああっ、んもう、ケインまで……！！　」

マリスは、更に顔を赤らめた。

「ねえ、洗礼は受けたの？　ベアトリクスには、確か、有名なティアワナコ神殿があったわよね？」

モルデラからも、そこへ修行に行ったというベテランの巫女の方がいらして、実に誇らし気だったわ」

クレアは、嬉しそうであったが、マリスは、逃げ腰であった。

「あそこでの修行の日々は、……正直、あんまり思い出したくなくてね。どうしても、行かなくちゃいけないくて、イヤイヤだったから」

本当に、嫌そうな表情であった。

根が武人であるマリスに、巫女の修行は合わなかったのだろうと、ケインは納得していた。

魔法も、あまり好きじゃない、というのも本当だと思った。

実は、彼も、魔道士は、苦手だった。

魔道自体が得体が知れず、魔道士たちは皆、表情はなく、言葉も抑揚がなく、つくづく感情を読み取るのが難しいのを武器に、裏をかかれそうで、いまいち、信用が出来なかった。

武人の方が、わかりやすくて、付き合い易い。

そんなことを考えていると、ケインの竿に、ビクツと、何かが喰わえ付いた感触が伝わった。

「ケイン、きたの!？」

マリスが、目を輝かせた。

「おっ! なかなか大物っぽいやねーか!」

「すごいわ! 何が釣れたのかしら!」

カイルもクレアも、期待する。

ケインは冷静に、魚との駆け引きを手応えで読み取り、力を込め、一気に竿を引き上げた。

そうして、草の上に跳ね上がったのは、見たことのない灰色の魚だった。

体調は、二〇センチくらいで、さほど大きくなく、肉厚だった。

目が大きく、鱗も大きい上に、タイルのように固そうで、口から、緑色をした袋状の内蔵を吐き出しかけていた。

背と顔の両側には、黄色い水かきのような膜が付いていて、ひれ鰭のようである。

尾が三つ又になっていて、それぞれが黒いヘビのように、によりと動き続けていた。

頭を寄せ合い、期待に目を輝かせて覗き込んでいたはずの彼らは、お互いの表情が次第に曇っていくのが、見なくてもわかった。

「……奇形ね……」

マリスが、呟いた。

「いや、それだけじゃないと思うが……」

ケインも、ぼそぼそと応えた。

我ながら、なんという気色の悪いものを釣ってしまったのか、この湖には、こんなものしかないのか？

ケインは、胸が悪くなるような思いがした。

「気にすんなよ。続けよーぜー！」

「ええっ！？ まだ続けるの？」

カイルが精一杯笑いかけているのを、クレアが不安そうに見る。

「これ、食べられるかしら？」

マリスが、指をくわえて呟いた。

「よせよ、マリス！ こんなモン食ったら、死ぬかも知れないぞ！」

ケインが慌てて止める。

「焼けば大丈夫よ」

「んなムチャな！」

「ケインたら、心配性ねー。じゃあ、クレア、念のために、これを白魔法で浄化してみて」

クレアもカイルも、呆氣に取られていた。

「『浄化』って、魂に対して行うものであって、『消毒』じゃないんだけど……」

と、自信なさそうに、クレアは両方の手のひらを魚に向け、一応、浄化の呪文を唱える。

マリスは、手が直に触れないように、木の枝と短剣とで、鱗うろこを取り、魚の口から出かけた内蔵を引っ張り出し、枯れ枝を集めてきて、魚を串刺しにして焼いた。

その間、カイルは、呪文を唱え終わったクレアを付き合わせて、湖に向かって投じる。

「あいつら、まだやるか！？」

ケインは、すっかりやる気をなくし、足を抱えて、焚き火の前に

座っているマリスと一緒に、魚が焼けるのを見守っていた。

「これって、深海魚よね？」

彼にとっては、そんなことは、どうでもよかった。

ただ、マリスって、時々変なこと言うなあ、と思った。

だが、マリスは、真面目に考えているようであった。

「どうして、湖なのに、こんな魚がいるのかしら？ あの『糸』じゃ、そんなに深いところにまで、潜れないのにね」

そのうち、魚が焼けると、マリスは嬉しそうに串を手に取り、短剣で、そうっと魚に切れ目を入れて、中まで火が通っていることを確かめると、いきなりかぶりついた。

「だ、大丈夫なのかよ！？」

「平気、平気」

慌てて覗き込むケインに、マリスは、口をもごもごさせて、けろっとした顔を向ける。

「ちょっとパサパサしてるけど、思ったよりイケるわよ。ケインも食べてみる？」

「お、俺は、いいよ」

「これで、マラスキーノ・ティーがあればねー。ま、我慢するかあ」「ゲテモノ食い……！」

ケインは、こわごわ彼女を見ていた。

ふと、ヴァルドリューズの様子を気にするが、まだ瞑想中のようであった。

「やっぱ、だめだー。全然釣れねーや」

カイルとクレアが、引き上げてきた。

と、その時！

さばさばさば……！！

湖の中から、山の形をした巨大な物体が現れた！

黒い竜——ダーク・ドラゴンの力　（2）

まるで、夜になってしまったかのように、辺りは暗くなっていた。湖から姿を現した、その巨大な生き物は、体中に藻や苔がくっついていて、もとの色がわからないほどだが、皆が目を凝らしてよく見てみると、白い触手が密生していたのだった！

中でも、一際長い触手が三本、頂上でうねっている。

「中級モンスターだわ！」
ミドル

マリスが、叫ぶと同時に立ち上がると、触手の一本が、クレア目がけて降り掛かる！

「きゃああ！」

とっさに、カイルが、クレアを草むらの上に押し倒した。

「クレア、カイル、大丈夫か！？」

ケインもマリスも、二人に駆け寄る。

「ケイン！　カイルが……！」

起き上がったクレアは、青白い顔で訴えた。

カイルが、右腕を押さえながら、ゆっくり身を起こす。

「お、お前、やられたのか！？」

「大丈夫だ……、擦っただけだ」
かす

そうは言うものの、傷口は、皆が思ったよりも深く、紫色を帯びている。

「どうやら、あいつの触手は、毒を持っているようね」

マリスが、化け物から目を離さずに言った。

「毒ですって！？」

クレアが、泣き出しそうな目で、カイルを見た。

「大丈夫だって……」

というカイルの額には、脂汗が早くも浮かび上がってくる。

マリスが布を取り出し、カイルの腕の、傷よりも上の方に固く縛り、毒が全身に回るのを防ぐ。

「即効性の毒を持つモンスターのようね。ちょっと厄介かもね」

そうマリスが言う前から、クレアが毒治療の呪文をかけている。

幸い、モンスターは、陸までは上がって来られないらしく、湖に浮かんで、三本の触手をバタバタさせているだけだ。

カイルの顔色が、ますます悪くなって行く。

「だめだわ。私の知ってる呪文じゃ、モンスターの毒には効かないみたい。いったい、どうすれば……！」

「落ち着くんだ。何か方法があるはずだ。とにかく、モンスターから離れよう」

泣きそうな顔のクレアを諭すと、ケインは、カイルを抱き上げ、なるべく動かさずに、クレアと、水辺から離れたヴァルドリューズのところまで避難する。

そこで、マリスが、傷口に唇を押し当て、毒を吸い取り、吐き出した。

血と混じった紫の液体が、草の上に溜まっていった。

ケインが、マリスの肩に手を置く。

「代わるよ」

「いい。モンスターの毒の場合は、普通の人は、直接口に含まない方がいいわ。私は、免疫があるから、ちょっとは大丈夫なの。さっきの変な魚とかモンスター化したものを食べると、多少は魔物の毒に免疫が出来るって、じいちゃんから教わってて」

クレアは、マリスの隣で、カイルに回復の呪文を唱え、両手を向けていた。

治療にはならなくても、失われて行く体力を少しでもつなぎ止めておこうというのだった。

だが、それも、毒治療をしない限り、唱え続けていないとならないので、このままでは、クレアの魔力が尽きる時が、カイルの命の尽きる時となる。

「ヴァアルは、まだ目覚めないのか!？ 毒治療も出来るんだろ？」

「ええ、彼ならモンスターの毒治療も出来るわ。でも、こっちから

呼び醒さすことは出来ないの。彼の魂が永遠に『時空のはざま』で彷徨さまようことにもなり兼ねないから」

こんな時に――！

誰もが、同じ思いであった。

ケインは、立ち上がると、決意に満ちた瞳で、苦しんでいるカイルを見下ろした。

意識が朦朧もうろうとしているのか、半分目を閉じたまま、辛そうに肩で息をしている。

「……死ぬなよ、カイル……！」

ケインは、背中のバスター・ブレードを降ろし、布を解いた。

湖の怪物は、白い触手をくねらせて、まるで手をこまねいてでもいるかのようだった。

ケインは、バスター・ブレードを構えた。

長い触手のうちの一本が、ゆるゆると近付いてくる。

間近で見て初めてわかったが、その触手自体が、細かい刺が繊毛のように覆っているのだった。

（この刺が肌をえぐり、毒を浸透し易くするんだろう。ミドルモンスターなら、倒せない敵じゃない！）

ケインは、触手の動きを見逃さず、間合いを詰めて、一本を斬りつけた！

ぶしゅうううう！

切り口からは、モンスター特有の、黒ずんだ緑の体液が吹き出した。

それも毒を含んでいるかも知れないと思い、彼は、念のため、バスター・ブレードを盾にして防ぐ。

モンスターは、きゅいきゅい言って、痛みを感じているのか、暴れ回り、残りの触手を振り回す。

同じように切り刻むが、数えきれないほどの触手が襲ってくるの

で、切りがなかった。

しかも、モンスターには、それほどダメージは見えない。

（やっぱり、本体を攻撃しないことには倒せないか。あんまり使いたくなかったけど、仕方ない）

ケインは下がると、バスター・ブレードを地面に置き、そして、腰に下げていたマスター・ソードを抜き取る。

クレアは、必死で回復魔法に全力を注ぐ間、応急処置を終えたマリスは、戦況を見守っていた。

（いよいよ、あの『ドラゴン・マスター・ソード』を使うのね……！）

マリスは、自分が戦いたくてウズウズしていたほどなのだが、モルデラではケインの戦いを最後まで見られなかったのを残念に思っていたので、この場では、見守ることに決めた。

それと、カイルはもちろんのこと、クレアが心配でもあった。

カイルが自分を庇って、危険な状態にあることに責任を感じていることと、彼の命は自分にかかっている、とプレッシャーで押しつぶされそうになっているクレアの側についていた方がいいように思っただった。

ケインは、バスター・ブレードを振った位置よりも、モンスターから距離を取っていた。

（マスター・ソードは、あんな遠くからでも、使えるのかしら？）

マリスにも、マスター・ソードは、まったくの謎であった。

ケインは、触手を伸ばしてなんとか彼を捕えたそうにしているモンスターを、見据えた。

『剣に棲まいし黒い竜——ダーク・ドラゴン——よ

今こそ目覚め

偉大なるその力を

貸し与えよ！』

ケインが剣を握り直すと、剣は、黒い影に覆われた！

「なっ……！ なんなの、あれは……！？」

思わず、マリスは目を見開いて、その光景を見つめた。

黒い影は、剣全体を包み、巨大化していくと、黒い炎のように、吹き荒れたのだ！

ケインは、それを、まったく気にも留めず、モンスター目がけて放つ！

炎は、ダーク・ドラゴン——長い首と尾、丸みのある胴体から生えた、悪魔のような、コウモリのような黒い翼を持つという、伝説の黒い西洋竜——の形を連想させ、モンスターを突き破って行ったのだった！

それは、一瞬の出来事であった。

黒い炎は消え、モンスターは、自分が貫かれたことすら気付かないように、触手を、だらんと下げ、あたかも放心状態のようだ。

すかさず、ケインは、元に戻ったマスター・ソードで、次々と薙ぐ！

きゅううう！ と、モンスターは高い音を発すると、湖の中へと、落ちて行ったのだった。

（……なんだったの、あれは？ 召喚魔法に似てたけど、ちょっと違うような……？ ドラゴンそのものを召喚したんじゃないかって、まるで、……影みたいな。それとも、いったい何を——？）

マリスは、ケインを——マスター・ソードを、食い入るように見つめた。

モンスターが消滅したようなのがわかると、ケインが湖に向かって、構える。

マリスたちの話から、『魔界への入り口』も、塞ぐつもりだ。

構えたマスター・ソードは、またもや実態のない黒い竜に覆われ、竜巻のようにぐるぐると渦巻いていくと、先ほどの何倍もの大きな

規模となって、湖に打ち降ろされた！

すると、湖全体が黒々と染まり、まるで、魔と戦っているかのよう
に、あちこちでビカビカと、稲妻の如く、輝いた！

光が収まると、もう化け物は現れず、湖の色も、徐々に、澄んだ
碧色へと変貌していった。

マリスは、一人納得したように、頷いた。

戦いが終わったケインは、倒したことに安堵したり、ましてや、
満足感に浸るなどとは思いつかない様子で、ただひたすら、その身
を案じていたカイルの元へと急いだのだった。

ヴァルドリユーズが、カイルを治療しているのが見える！

草むらに座ったクレアが、カイルを抱きかかえ、心配そうな面持
ちで見守っていた。その隣では、マリスがじっと見守っている。

「ヴァル！ 戻ってたのか！？」

ケインがほっとして、顔をほころばせた。

ヴァルドリユーズは、両手をカイルに翳したまま、ゆっくりと見
上げた。

「遅くなって、すまなかった」

カイルの顔色が、だんだんと良くなっていくのを見ると、皆も、
ほっとしていった。

治療が終わると、クレアの膝の上で、カイルが、うつすらと目を
開く。

「カイル！ 大丈夫！？」

カイルは、ぼんやりと、クレアを見つめた。

「……ああ、クレア？ ……大丈夫だったか？」 かすれた声で、
かすかな笑いを浮かべていた。

「何を言ってるの！ 私よりも、あなたの方が大変だったんだから
！」

クレアの瞳からは、ぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「ごめんなさい。私の為に……本当に、ごめんなさい……」

クレアは、流れ落ちる涙を拭いもせずに、同じ言葉を繰り返していた。

カイルは、横たわったまま、手を伸ばすと、彼女の涙を、指に吸わせた。

「大丈夫だって。俺には、きみの涙は、もったいない……」

彼は、涙を拭った手で彼女の顎を軽くつかむと、そのまま自分の顔へ引き寄せていく――

――が、そこへは、ケイン、クレア、マリスの三人の鉄拳が、彼に降り注いでいた！

「冗談だよ、冗談！ ひでーよ、お前ら、ケガ人に寄ってたかってさ、おお、いてえ！」

カイルは、起き上がって、腹と頭とをさすった。

「じよ、じよーだんで、こんなことっ、しないでよねっ！」

クレアは、怒りの余り、言葉がとぎれとぎれであった。

「へー、じゃあ、本気だったら、良かったわけ？」

「あ、あなたって人は……！ 最低っ！」

クレアが、つんのめりかけて叫んだ。

マリスは、クスッと笑ったかと思うと、すぐに真面目な表情になった。

「ヴァル、あの湖を調べてくれる？」

黒い竜——ダーク・ドラゴンの力（3）

「……どう？」

湖の底を静かに見据えていたヴァルドリューズに、隣に立つマリスは、慎重な様子で尋ねる。

「これまでのいきさつから、この湖の底に異次元への出入り口が出来ていたようだが、今はもう、何も感じない。おそらく、マスター・ソードの力で、消し去られてしまったのだろう」

「それなら、良かったわ。それにしても、あれは、ミドル・モンスターだったわ。魔界の入り口まで開いていたなんて……何者かが呼び出し……!？」

突然、マリスの言葉が途切れた。

「……ヴァル、……それ、なに？」

かなり間の抜けたマリスの声で、ケインたちもヴァルドリューズを振り返ると――

彼の周りを、何かが、ちらちらと飛び回っていたのだった！

ちょこんとヴァルドリューズの肩に腰掛けると、こちらを、じっと見る。

ピンク色の肩につかないくらいの巻き毛に、薄いピンク色の衣をまとい、身長より少し大きい、ムシや、蝶に近い形の、透けた羽を生やした、それは、まさしく、手のひらに乗るくらいのサイズの、妖精の女の子であった！

「ミュミュ……!」

ケインが、大きく目を見開いた。

妖精は、みるみる膨れっ面になって、ケインを睨んだ。

「ひどいよー、ケイン！ ミュミュのこと、かんつつっぜんに、忘れてたでしょー!!」

一同は、驚いて、ケインと小さな妖精ミュミュとを見比べた。

「ごっ、ごめん！ だけど、今までだって、急にいなくなったり、

しばらく出てこなかったこともあったじゃないか。またかと思っ
さ。それに、いろいろあって、それどころじゃなくて……」

「それどころじゃないって、どーゆー意味さー!? しつれいな!
ミュミュはねっ、知らない時空で迷っちゃって、一人でとっても
淋しくて、泣いてたんだよ! そしたら、ヴァルのおにいちゃんに
助けてもらったんだからー!」

「ヴァ、ヴァルのおにいちゃん……?」

ケインも皆も、今度は、ヴァルドリューズの方を見る。

彼は、いつもの、無表情で、淡々とした口調で語る。

「瞑想から戻ろうとした時、異次元の空間で彷徨さまよっていたのを、た
またま見付けたのだ」

「……お前なあ、妖精が、時空で迷うなんてこと、あるのか?」

ケインが、ほっとしたような、呆れたような顔になった。

「ケインが助けてくれないからだよー! バカー!」

ミュミュは、ケインの頭を、か弱い拳でぽかぽかと殴った。

「ごめん、ごめん! ホント、すっかり忘れて……」

「なにいー!? もーっ! ミュミュ、ケインなんか、知らないも
ん! ホントに、おこったんだからね!

これからは、ヴァルのおにいちゃんに『付く』もん!」

そう言うと、ミュミュは、ヴァルドリューズの肩に、ちょこんと
止まり、ケインからは、ぷいっと顔を背けてしまった。

「まいったなあ、今度こそ、本気で怒らせちゃったかな?」

ケインは、苦笑いしながら、頭をかいた。

妖精は、頬を膨らませたまま、ヴァルドリューズの頬に、くつつ
いた。

「あ、あのー、お取り込み中、悪いんだけど……」

マリスが、まだびっくり目のまま、切り出した。

「ケインと、その妖精って、……知り合いだったの?」

「知り合いなんてもんじゃないよー。ミュミュ、ケインがマスター・
ソードを持つようになってからだから、二年くらい、一緒にいるん

だもん。

ミュミュたち妖精——ニンフの子供たちは、『でんせつのせんし』になる人間に、付くことになってるんだもん！

ミュミュ、ケインのこと、『でんせつのせんし』だと思って、くつついてたのに、全然、『でんせつらしいこと』はしないし、ミュミュのことは、ほうっとくし……！

もう、『でんせつは、ヴァルのおにちゃんにする』から、いいんだもん——！

「ありやりや、『伝説の戦士』ってのは、妖精の気分次第で決まるのかよ？」

カイルが、素っ頓狂な声を出した。すっどんきょうケインも、肩をすくめてみせた。

「あれっ？ あんたの剣……」

突然、ミュミュが、カイルの剣に、目を留め、ふーっと側に飛んで行った。

「『ここ』には、精霊がいるよ！ 何の精霊かは、わかんないけど……」

ミュミュは、カイルと、ケインとに振り向いて、言った。

「精霊だって？」

カイルが、首を傾げた。

「ああ、でも、言われてみれば、そうかも知れねえ。この剣は、俺を護ってくれてるような気がしてたんだ。

よくないことや、危険を察知して、なんとなく教えてくれる——そんな場面が、いくつかあったんだ。

それは、この剣に宿る魔力が、そうしてるのかと思ったが……精霊が棲んでたってワケだったのか」

「そーだよ。この剣の『せいれいさん』は、剣の持ち主を、まもつてくれるんだよ。

だから、この剣の魔法は、持ち主しか使えないの。他のヒトが、やろうと思っても、ダメなんだよ」

「確かに……、俺以外のヤツには、『浄化』の魔法は使えなかった」
カイルが、感心して、ミュミュを見た。

「お嬢ちゃん、教えてくれて、ありがとうよ」
ミュミュは、満足そうに笑った。

「ついでに教えてあげようか？ 妖精は、『いろんなもの』が見えるんだよ。『ヒトの守護神』とかも」

すっかり得意気になったミュミュは、マリスの目の前に飛んでいく。

「あんたの名前はねえ、マリス・アル・ティアナ……えーと、あれ？ なんだったつけ？」

みるみるマリスの顔色が変わっていく。

「な、なんで、あたしのことを……」

妖精は、ますます調子に乗って、続けた。

「守護神は、『雷獣神サンダガー』……でしょ？」

一同、驚きのあまり、絶句していた。

「ケインは、ジャスティ……いたっ！ 舌かんじゃった！ ええと、

何だっけ？ もう、いいや。で、ちなみに、この金色の髪のお兄ち

ゃんは……」

「ミュミュ」

ミュミュがカイルに何か言う前に、普段、寡黙な魔道士が、珍しくその場を遮った。

「人には、余計なことは、わざわざ知らせない方がいい。知ったことによつて、不幸になることもあるのだ。私や、マリスのように……」

甘えた返事をする、妖精は、ヴァルドリューズの頬に、再びすり寄った。

彼の言葉には、妙に重みを感じ、一同は、マリスとヴァルドリューズをみつめる。

もっとも、ミュミュの言うことは、正確ではなかったので、皆にもわけがわからず、知らされたうちにも入らなかったのだが。

（もしかして、ヴァルもマリヌも、特殊な能力を身に着けたため、或は、目覚めたために国を追われたり、魔物と戦わなくてはならない宿命になってしまったとか……？　それとも、何か、他にも……？）

ケイン、カイル、クレアが、そのように考えている間、マリヌはうつむいて、唇を噛み締めていたが、キツと顔を上げた。

「あたしは不幸なんかじゃないわ。運命なんて、自分のこの手で変えてみせるわ！」

静かだが、そう言い切った彼女の横顔を見つめながら、ケインは、なんとなく、自分は、それを見届けるんじゃないか、という気がしたのだった。

（それは、単なる俺の希望なのかも知れないけど……）

「おお、お待ちしておりましたよ。ご希望の品は、こちらでよろしいですか？」

夜になっても、湖は静まり返り、その周辺でも、低級な魔物ですら出現しなかった。

異次元への出入り口は、マスター・ソードの力によって、完全に閉ざされたと思われる。

一行は、鍛冶屋を訪れていた。

異様な煙が立ち込め、いつ見ても、不気味なところである。

「さすが、噂通りの良い腕だな。これは、報酬だ」

マリヌ扮するマリユスは、男言葉に切り替え、大金を支払った。

「こ、こんなに……ですかい！？」

鍛冶屋は、驚いていた。

見開かれた目は、より一層大きく、相変わらず、充血していた。

「それから、このことは、黙っていて欲しいんだ。万が一、鎧の持ち主に伝わってはマズいからな」

そう言って、マリユスは、口止め料代わりに、更に金額を追加したのだった。

「ふっふっふっ、これで、思う存分、暴れられるわ」

「えっ？　今までののは、違ったのか！？」

不適な笑みを浮かべているマリスに、ケインは思わず言っていた。
アトレ・シティーに戻るこの道中、マリスは、新品の剣を取り出し、クレアに渡した。

「これは？」

「クレアは、剣持ってなかったもんね。これ、護身用に使って。メタル・オリハルコンで出来た、あたしの鎧の一部を使って、軽めで作ってもらったから、大丈夫。

ヴァルに魔力を吹き込んでもらえば、魔法剣にもなるわ。それとも、魔法上達したら、自分でやってみる？」

マリスが、ウィンクした。

「マリス、ありがとう！　大事にするわ！」

クレアの瞳は、潤んで、美しく輝いていた。それを認めたマリスも、嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、そうだね、その妖精サン、あたしは、ここでは『マリユス・ミラー』って名乗ってるんだから、人前では、違う名前で呼ばないでね」

ミュミュが、パッと現れた。

「偽名使ったって、わかるヒトには、わかっちゃうのに」

妖精は、ブツクサ言っていた。

「あの、ケイン」

クレアが、小声で話しかける。

「私に、剣を教えてくれるの、今夜からでもいい？」

「わかった。でも、さっき、回復魔法をかけ続けてたから、大分疲れてるんじゃないのか？　今日はもう遅いし、明日にしよう。疲れを取ることも大事なんだぜ」

「でも、今は、そんなこと言ってられないわ。やっぱり、私が一番足手まといだもの。剣ももらったことだし、もう、誰の足も引っ張

りたくないの。寝る前に、ちょっとだけでいいから、お願い」

ケインは、クレアの瞳に、強い意志の光を見た。

彼女も、マリス同様、自分で運命を変えようとしている人に、違
いなかったのだった。

「わかったよ、クレア」

ケインは、やさしく微笑んだ。

先に、宿を取っておいて正解だったと、一行は思った。辿り着いたときは、夜中であつた。

結局、クレアには剣の握り方と、構え方くらいしか、教えられなかったと、ケインは、振り返っていた。

（今日はいっぱい歩いたし、釣りもしたし、モンスターも倒して、次元の穴を塞いだし、カイルは死にかけるし、ミュミュは見つかったし……いろんなことがあつたなあ。

ロクに観光出来なかった城下町も、明日は、少しは見えて回れるかも……）

宿屋のベッドの上で、そんなことを考えながら、ケインの意識は、眠りの中へと、引き込まれていった。

誘拐事件 Ⅰ

「大変よ！ ケイン！ カイル！ 起きて！」
アストーレでの翌朝は、ドアが激しく叩かれる音と、クレアの緊迫した声で始まった。

ケインは、ベッドの脇の、すぐ手の届くところにかけておいた『ドラゴン・マスター・ソード』に、手を伸ばし、宿泊部屋のドアを開ける。

そこには、全身に緊迫感をまとったクレアがいた。

「なんだよ、朝っぱらから、うっせーなー」カイルの寝ぼけた声が、毛布の中からする。

「きゃーっ！」クレアは、カイルのベッドの方に目をやってから、手で顔を覆った。

欠伸あくびをしながら起き上がったカイルは、ケインからすると、特に変わった様子は見られなかったのだが。

「カ、カイル、あなた……寝る時、服着ないの？」

カイルは、眠そうな半開きの目のまま、頭をボリボリ掻いた。

「なんだよ、そんなことかよ？ 俺は、寝る時は、何も身に着けない主義なんだよ。女以外はな」

ケインも、なんだ、そんなことかと、ホッとした。

「しかし、お前、ホントに傭兵か？ いくさで奇襲にあったりしたら、どうすんだよ？」

「その時は、この魔法剣が教えてくれるから、いいんだよ」

カイルが適当な言い方で答えながら、もう一度、欠伸をする。

「昨日、ここに着いたの夜中だろ？ お前ら、よく起きれるな。俺は、もう少し寝かせてもらおうよ」

毛布に潜り込むカイルの背に向かって、クレアが言った。

「マリスが、いなくなっちゃったのよ！」

「あっそ。メシでも食いに行ったんじゃないの？ それか、朝稽古

でもしてるとか、町をプラプラしてるとかじゃねえの？」

彼は、クレアの言葉にも、あまり動じる気配がない。

ケインも、彼と同じ考えであった。いないくらいで心配になる娘ではないだろう、と。

「手紙があつたのよ。私たち宛に」

カイルは、やっと、起き上がった。

『探さないでください。』

しばらくは、戻らないと思うので、みんなは遊んでてください。

お金は、あたしのベッドの下にあります。

なくなったら、自分たちで稼いでください。

よろしく。マリス』

クレアの見せた置き手紙には、そうあつた。実に、簡単極まりない文章であつた。

「おっ？ 一人一リブはありそうだぞ。てことは、一週間くらいは、食べていけそうだな」

ベッドの下から、カイルが、ごそごそと、コインの入った袋を取り出す。

「マリスが戻るのも、そのくらいか、それ以上かかりそうだってことか」

ケインが、首を捻る。

「クレア、ヴァルは何て？」

「何も言わずに、図書館に行ったわ」

「ヴァルは、いるってことは、マリスの単独行動か」

一人で金勘定に勤しんでいたカイルが、ご機嫌である。

「相棒のヴァルが何も言わないんだったら、放っておいていいんじゃないの？ 今までも、よくあることだったのかも知れないし。遊んでいいってんだから、俺たちも勝手にしようぜ」

カイルに促され、クレアとケインは、腑に落ちない思いでいたが、

とりあえずは朝食を摂りに、宿屋の一階へ下りた。

宿屋の料理を、カイルは勝手に頼み、何事もなかったかのように、骨付き肉に、がつついている。

「ねえ、カイル、マリスのこと、本当に放っておくつもり？」 クレアが心配そうな顔で尋ねる。

「ああ、そのつもりだけど？」

「心配じゃないの？」

「あいつは、俺たちより強いんだぜ？ こっちが心配して欲しいくらいだぜ」

そのカイルのセリフに、ケインが吹き出した。

クレアは、ますます心配な顔になった。

「だって、町にいるならともかく、森や山に入ったりしたら――ほら、もし、噂の北の森にでも行って、魔物のことでも調べていようものなら、山賊に出会いかも知れないんだし、昼間とはいえ、おそろしいわ！ ヴァルドリューズさんと離れている今は、召喚魔法も使えないんだし、いくらなんでも、大勢の賊を相手に一人でなんて無理だわ」

「そうか、クレアは、知らないんだっけ」 ケインが、パンをかじろうとした手を止めた。

「マリスは、大丈夫だよ。『武遊浮術』^{ぶゆうじゅつ}っていう東方の格闘技が使えるから、大柄な男たちが何人かかろうと敵じゃないさ」

「なんで、お前、そんなこと知ってるんだよ？」 カイルが怪訝そうな顔で、ケインを見る。

「アストーレに入る前に、俺とマリスとで防具屋に行っただろ？ その帰りに山賊に遭って、その時知ったんだ。」

たまたま、俺もかじったことある武術なんだけどさ」

そう言ったケインは、その後、『武遊浮術』の『愛技』をくらい、それは受け流せなかった……とまでは、言いたくなかったので、話さなかった。

「そうそう、なんだかそういうわけで、あいつは強いんだから、放っておいて大丈夫、大丈夫！ それより、

クレアは、か弱いんだから、俺たちの側を離れない方がいいぜ」

カイルが微笑んで、片目を瞑ってみせる。

クレアは、不安気に、それを見ていた。

「そういえば、ミュミュを知らないか？ さっき呼んだけど出て来なかったんだ」

ケインの連れである、ニンフの子供のことだ。

「さあな。なかなか可愛い顔してたけど、人間の女の子じゃなかったからな、知ったこっちゃないね。

まあ、例えば人間だったとしても、ワガママそうだから、俺はちょっとご免被^むりたいわ」

「そんなこと、聞いてねーって」

呆れているケインをよそに、カイルが、ツボの中のミルクを、ごくごく飲んだ。

「ワガママで悪かったね！」

「うわーっ！」

噂^{あしずさ}の妖精が、カイルの目の前にいきなり現れ、カイルが椅子ごと、後退^{あとずさ}った。

「ミュミュだったかしら？ あなた、マリスの居場所知らない？」

妖精は、ぱたぱたと透明な羽を羽ばたかせて、宙に浮かびながら、まあるい目でクレアを見上げた。

「知ってるけど、教えなーい」

一瞬、クレアの表情が引き攣^つった。が、すぐに、笑顔になった。

「あら、どうしてかしら？」

「えー？　なんか、マリスに怒られそうだから」

「そんな、適当な……！」

クレアが言いかけたのを、ケインが目で制す。

妖精は、気にも留めない様子で、スープを飲みかけていたケインの手の上に舞い降りると、四つん這いになって、木皿の中をじっと

見つめていた。

ケインは、スプーンを持ち替え、彼女の口元へと運んでやる。小さな口でスープを啜^{すす}る妖精の姿は、小動物を思わせ、微笑ましいものがあつた。

飲み終わると、ミュミュは、テーブルの真ん中の、籠の中の焼きパンの上に、ちょこんと腰掛ける。

「ミュミュさあ、実は、あるヒトを探してるんだよねえ。ケインには話したんだけどさ、『ユリウス』っていうヒトなんだ。

ケインに付いたのも、なんだか、このヒトと一緒にいたら、ユリウスに遭える！

って、思ったからなんだもん。『でんせつのせんし』とユリウスは、なんだか関係があるんだって。

それで、マリスと、あんたたちご一行が、ケッセイされたのを見たとき、もしかしたら、ユリウスの方から、出向いてくれるんじゃないかって、強く思ったんだ〜！」

ミュミュは、話しているうちに、ウキウキと喜んでいた。

「そんな根拠のないこと言われてもなー。当てが外れても、俺たちは責任取れないぜ？　だいたい、そいつ、何モンなんだ？

俺の知り合いにいたユリウスってヤツは、太ったオッサンだったぜ？　まさか、そいつじゃねえんだろ？」

肉の付け合わせの菜っ葉を食べているカイルの言葉に、ミュミュは、がっくりとうなだれた。

「そんなオッサンなんかじゃないよ。ユリウスは、願い事をかなえてくれるって言われてて、妖精たちのアコガレでもあるんだから。それは、それは、キレイなヒトらしいよ」

「ふうん、そうなの。人間からすると、妖精の方がキレイな気がするけど……？」

と、元気のなくなつたミュミュに、クレアがフォローを入れる。

「……にしてもさあ、マリスたち、あいつら、変わってるよなあ？」

「

三本目の骨付き肉に手を伸ばしたカイルは、かぶりついてから、話題を変えた。

まだ食べるのかと、ケインもクレアも呆れたものだったが。

「俺と知り合った時から、あの二人、宿の部屋は一緒だったんだぜ？俺だけ別室でさ。」

まあ、サイフが違うんだから当たり前だし、マリスが男装してたから、俺の目をごまかすのもあって、ヴァルと同室なんだと思ったら——女だって俺たちにバラしてからも、ヴァルとはずっと同じ部屋だろ？

お前らが旅に加わってから、奴ら、相変わらず部屋は一緒に、クレアがそこに入って、俺とケインが合い部屋とは、変な分け方じゃねえか？」

カイルの言う通り、奇妙な部屋割りだと、ケインもクレアも思っていた。

いつの間にか、ミュミュも聞き耳を立てていた。

「なあ、あいつら、実は、……デキてんじゃないの？」

カイルが、声をひそめた。

ケインの心臓が、どきんと鳴った気がした。

「まさか……。だったら、クレアのこと、部屋に入れないだろ？」

ケインも、カイルにつられて、ひそひそ声になる。

「ねえねえ、何の話？」ミュミュがケインの肩の上に乗る、興味深々である。

「こらこら、お子ちゃまには、関係ないんだよ」

ケインが焦って、ミュミュの顔を手で覆う。

見えない！聞こえない！と、ミュミュがばたばたする。

「なあ、クレア、あの二人、どんな様子なんだよ？」

「おい、カイル、変に詮索するのは、やめとけってば」

「いいから。クレア、一緒に部屋にいて、どうなんだよ？奴ら、イチャついてないか？」

カイルが、にやにやしながら尋ねる。

クレアは、しょうもなさそうにカイルを見た。

「別に、何も。たあいもない話をしてるか——といっても、話しているのは、いつもマリスの方で、ヴァルドリューズさんは、あんまり反応ないんだけど——または、何も話さずに、眠ってしまうこともあるし……。」

ただ、ヴァルドリューズさんは、マリスより後に眠るようにして
るみたい。

結界張ってるのかしら？ って、思えるようなこともあったし。
まるで、……『何かからマリスを護^{まも}っている』かのよう……？

「

思い出しながら、クレアが打ち明けた。

「ヴァルとは『国を出た者と追われた者同士』って言ってたからな。
お国のヤツだかなんかに、居場所知られたくないんじゃないねえの？」

カイルが、軽く言った。

「やっぱり、それが関係あるのかな？ 偽名使ってるし、足が付かないように、鎧も作り替えちゃったし、口止め料まで支払ってたし。
旅の痕跡を残さないようにしてるのかな？」

「

ケインの隣で、クレアも頷いていた。

それにしても、少々大袈裟に、皆には思えた。

マリスほどの戦士であれば、人数いる敵でも太刀打ち出来るであ
ろうに。

結界を張るということは、魔物でも警戒しているのだろうか？

（或は、魔道士の敵でもいれば、別だけど……）

と、ケインが考えていたところだった。

「ところで、クレアも、ヴァルに手エ出されたりしてないのかよ？」

「

からかうカイルに、心の準備が間に合わなかったクレアは、一瞬
遅れたが、すぐに、キツと睨みつけた。

「まあ！ 何てことこのよ！ ヴァルドリューズさんは、紳士的
な方よ！ 彼のような魔道を極めた方は、きつと、あなたのように

邪よこしまな考えは持たないんだわ！

魔法を教わっている時も、眠っている時でも、いつだって、私やマリスに指一本触れてはこないんだから！」

クレアは、師匠であるヴァルドリューズを尊敬しているらしく、侮辱したカイルを許せないようであった。

だが、そんなことには全然構わないカイルが、ゲラゲラ笑った。

「そりゃあ、単に、お前ら『お子ちゃま』には、興味ないってことだぜ！」

クレアは、ますます顔を上気させ、言葉もなく怒りを表していた。「だいたいさー、奴ら一年も一緒にいるらしいけどさ、俺が加わる前は二人でいたわけで、普通は何かあるだろ？ 恋愛感情が湧くとかさ。」

だけど、マリスが、いくらあれほどの美形でもな、まだ小娘だからなあ。俺としては、もうちょっと色気が欲しいかなあ。ヴァルだって、きつとそうだ。だから、そんな気が起きないだけだぜ。

なあ、ケイン、男だったら、そう思うよな？」

カイルは、調子に乗りながら、ケインの肩を叩いた。

そんなカイルを、ケインは横目で見た。

「お前は知らないだけだよ。あいつを小娘だと思って油断していると、いつか痛い目見るぞ」

かすかに苦い笑いを浮かべたケインは、目を反らし、溜め息を吐いた。

ヘラヘラ笑っていたカイルも、怒っていたクレアも、どこか疲れたようなケインの様子に、きょとんと顔を見合わせる。

ミュミュは、まだケインの手の中で、ばたばたしていた。

「さて、マリスが『遊んでいい』ってんなら、俺は、遊びに行かせてもらうぜ」

朝食をたいらげると、カイルは、宿の外に向かった。

「お前ら、どうすんだ？」

「私は、図書館へ行ってくるわ」

「なんだよ、またヴァルんところかよ」

カイルは、つまらなそうに、鼻を鳴らした。

「今までも、慎ましやかな巫女の生活だったんだろ？ 今日くらい、パーッと遊んだって、バチは当たらないんねえの？ なあ、ケイン？」

大剣は部屋に置いてきていて、今はマスター・ソードだけを身に着けているケインも、カイルの意見に賛同し、クレアに頷いてみせた。

「そうだよー、今日は、アストーレ王国の祝日だよー。お姫様の一六歳のお誕生祝いで、国中お祭りなんだって！ 豪華なパレードはあるし、お店もいっぱい出てるみたいだよ！

ねーねー、みんなで見に行こうよー！ まちの西の方にある、おっきなテントの中では、お芝居や、動物ショーが見られるんだって！ マリスも、案外、それを見に行っちゃったのかもよ？」

「なるほど。その辺の祭りとは全然ケタが違うってのかぁ！」

ミュミュとカイルは意気投合して、盛り上がっていた。

「それでも、やっぱり、見物する気分にはなれないわ」

クレアの意志は、固かった。

「しょうがねえなあ。んじゃあ、この際、野郎でもいいや。行こうぜ、ケイン！」

「いや、俺は、万屋よろずやの仕事でもするから」

カイルは、足を滑らせた。

「よりにもよって、なんだよ、お前ら、クソ真面目な！」

ミュミュも、肩をすくめてみせた。

「あゝあ、ケインてば、いつもそんななんだから」

「だって、マリスが、いつ戻るかわからないだろ？ それまで生活するのに一リブじゃ足りないかも知れないし。今のうちに備えておかないと」

あんどりと口を開けているカイルには構わず、ケインは続けた。

「それと、夜になったら、例の北の森に行ってみる。俺なりに調べてみようと思うんだ。ヴァルにも一緒に来てくれるよう、頼むつもりだ。その前に――」

ケインが、一旦言葉を区切った。

「今、ちょっとだけ下見に行って来ようと思うんだ。昼間だから、何ともないだろうけど、道くらいは下調べしておかないと。いきなり知らない夜道は迷うからな」

「それくらいなら、私も付き合えそうだわ」

クレアが、微笑んだ。

あんぐりと口を開けたままだったカイルは、その上、目を白黒させながら、彼ら二人を見比べた。

「呆れた奴らだなあ、まったく！ お祭りよりも、化け物の森の下見だとお？」

「ミュミュも、どうだ？ 一緒に来るか？」

ケインに、まん丸な目を向けた妖精は、

「ううん、ミュミュ、行かない。お姫様のパレードの方が、面白そうだもん！」

というと、あっけなく、パツと消えてしまった。

拍子抜けした三人であった。

「……ま、まあ、ミュミュは、楽しいことが好きだからな。はははは」

ケインが笑いしながら、頭を搔く。

「……お前、ホントに、あの妖精に『付かれてる』のか？」

カイルが、横目で言った。

それから、彼らが、町人から仕入れた情報で森に着いたのは、まもなくのことであった。

それほど、険しい道ではないが、背の高い樹木が多く、昼間でも薄暗い。

「ここは、おそらく、街道として使われてたんじゃないかな？」

腐った木の立て札が落ちていたり、馴らされた一本道があったりと、人の行き来したような形跡を、ケインが指差した。

町人たちの話では、今では、樹木が密集していて、崖が見通せず、危険ということで、整備された街道を使うようになったのだと。

「だけどさ、見ろよ？」

カイルが、顎で指した方角には、果物の芯や、食べカスと思われる物が、岩の側に落ちていた。

「あの食いカス、まだ新しそうですね？　つい最近、人が通ったってことじゃねえか？」

「だけど、行商人とか、普通の通行人にしては、様子が違う」

ケインが、その岩に近付いていく。

「ああ、そうだな……」

何気ない仕草で、カイルは、後ろにいるクレアに、手のひらでストップをかけた。

クレアが、立ち止まる。

「争った後がある。人間の血か、動物の血かは知らねえが、動物にしちゃあ、かなりの量だぜ」

「果物カスが多いところを見ると、一見、大型動物かと思ったが、……屍骸らしいものの痕がない」

「……一呑みなら、痕は残らねえからな」

カイルとケインの目が合う。

クレアはビクツとして、息を飲んだ。

三人の考えは、一致した。

魔物が、森に住む、または行き来していた動物たちや、しばらく前まで通行していた人間達を襲った。

しかも、大きな動物でも人間でも、丸呑み出来るほどの大きさだろう、ということに。

「そんなヤツがこの辺りに侵出するってことは、どこかに次元の穴があるはずだよな？」

「ああ。もう少し先に行ってみるか……」

そうして、しばらく進んではみたが、似たような景色で、次元の穴のようなものも見付からずじまいだった。

三人は、倒れている樹木や、岩の上に腰掛けた。

「この木だって、人間が伐採したような斧の跡はないし。何か、『大きな力で倒された』って、感じだよな」

樹木の黒ずんだ痕に触れながら、ケインが言った。

「魔法か何かかしら？　大きな生き物が体当たりしたようにも思えるけど」

「この高さからすると、かなり大きな身体ってことだ。だけど、さつきから、全然動物なんかは見かけないから、……やっぱり魔物だろうな。でも、いったい、どこから……？」

「ねーっ！　はやく遊びに行こうよー！」

言うと同時に現れたのは、やはりミュミュだった。

「お前、とつくに遊びに行ってたんじゃないのかよ？」と、ケイン。

「だって、一人じゃつまんないし、もうすぐパレードの時間になるって、街の人たちが話してたから、教えに来てあげたんだよー」

「おお！　そうか！」

カイルの瞳がみるみる輝き出した。

「なあ、もうだいたいここの道はわかったから、パレードでも見に行こうぜ！」

「行こう、行こうー！」

ミュミュは、カイルの肩の上に座り、カイルは、はしゃいで駆け出してく。

その後を、ケインとクレアは、まあいいか、とついて行った。

誘拐事件 ②

清々しく、晴れ渡る空であった。

ミュミュの言った通り、大通りの両側には露店がずらっと並んでいる。

図書館に行く前に、ちょっとだけ見物しようと、ケインがクレアを誘った。

そうでもしなければ、真面目なクレアは、気を抜かないと思ったからだ。

おもちゃの短剣や、防具、マント、国旗、冠などを売っている子供向けの店や、動物を形どった置き物、いろいろな色や形をした石やアクセサリー、宝石などの店もある。

クレアが、アクセサリーののひとつを手にとって、眺めていた。

「それ、気に入ったの？」

「え、ええ。でも、巫女は、お守りやまじないのアクセサリーしか、身に着けられないから」

「魔道士になるんだったら、多少はおしゃれしても構わないんじゃないの？」

「そうけど……」

クレアは、どうしたものか、迷っていた。

「おじさん、これ、ひとつくれる？」

クレアが慌てた。

「いいわよ、ケイン、わざわざ買ってくれなくても」

「いいじゃないか。こんな時くらいしか、プレゼントなんて出来ないんだから」

何の気なしに購入すると、ケインは、シルバーのシンプルなデザインのネックレスを、クレアの首に着けてみせた。

「ほら、似合うよ」

クレアは、頬を赤らめた。

「ありがとう。アクセサリをプレゼントされたのなんて、初めてだわ。……嬉しい」

ケインは、驚いて、クレアを見つめ直した。

町娘でさえ、アクセサリくらいは、身に付けているものだ。

見守り石の意味合いもあるが、たいてい、ネックレス、髪飾り、イヤリング、ブレスレット、指輪……などが多く、色や形、磨き方や石のカットの仕方など、好みの物を着けていた。

良く磨かれていたり、カットが凝っているほど値段も高いので、町民の手を出せる範囲では、丸い形で、色も不透明に近く、濁っていたりするものが多い。

石の透明度が高く、凝ったカットと、他の金属や鉱石を組み合わせた装飾が施されるほど高級品で、貴族階級でないと、なかなか手に入れないものだ。

特に、珍しい鉱石が発掘されたアストーレでは、装飾品の需要は高く、貴族でも市民でも、誰しもが、ブレスレットとネックレスを着けるのは当たり前になっていた。

「そうか……。巫女って、随分慎ましやかにしてなきゃいけないんだな……」

カイルがもったいながるのが、ケインにはわかる気がした。

目鼻立ちも整っている上に、クレアは、控えめで、人々に好印象を与える美少女であった。

着飾れば、一国の王女にだって、見られないこともないだろうに、質素な装いしか許されなかったとは。

ケインは、気の毒に思った。

「ミュミュにも、何か買ってーっ!!」

いきなりミュミュがケインの耳元に現れた。

「うわっ、びっくりしたー! お前、どこから……? それよりも、カイル見なかったか?」

「知らない。さっきまで一緒だったけど、街娘たちに囲まれて、どこか行っちゃったよー。ミュミュ、ひとりでつまらないから、こっ

ちに來たの」

ケインは、またしても、彼に呆れた。

「まったく、あいつは！ クレアに、『俺たちの側を離れるな』とか言っというて、なんていい加減な！」

クレアも、彼の隣で、呆れた顔になる。

「それでさー、クレアに買ってあげたんなら、ミュミュにもアクセサリー買って！！」

「ええっ？ だって、ここには、ミュミュに合うような小さいものは……」

ふと、小指用の指輪を見付けた。

「これなら、足にはめられるかな？」

ケインは、銀色の輪っか（リング）を、つまみ上げ、ミュミュがそこへ足を通す。

「わーい、わーい！ はけた、はけたー！」

その後、三人は、他の露店を見たり、ミュミュの希望で芝居を見たりした。

見物客でいっぱいだったので、大通りには向かわず、少し離れた道に行くことにしたのだが、そこで、ミュミュは、どうしてもパレードが見たいと言って、消えてしまった。

「私、今まで、こんなに規模の大きいお祭りなんて見たことなかったわ。」

もちろん、街の大きさ自体が違うんだけど、モデルラでは、収穫祭くらいしかやらなかったの。

それも、毎回準備に追われているばかりで、全然見れなかったし……今日が初めてよ、見る側に回れたのは」

クレアが、晴れ晴れとした笑顔を見せている。

苦労が多かっただろうと、彼女の今までを想像していたケインは、良かったなあと、微笑ましく、彼女の笑顔を見ていた。

その時、近くで悲鳴が聞こえた！

「助けてくれー！ マリスー！！」

聞き覚えのある声に、ケインとクレアは顔を見合わせると、声のした方に向かって、走り出した。

狭い道を抜けると、空き家のような古い家が見え、裏は原っぱになっていた。

そこで、カイルが数人の柄の悪い男たちに追いつめられ、殴られて吹っ飛んだのか、壁を背に、寄りかかっていたのだった。

彼の魔法剣は、そのうちの一番大柄な男が持っている。

「ああ、ケイン！ ちょうどよかった！ 助けてくれ！」

駆けつけたケインを見付けると、尻餅をついているカイルが、情けない声を出した。

（それにしても、こいつ、オンナに助けを求めるとは……）

ケインは呆れながらも、カイルと男達の間に入った。その後ろで、クレアがカイルを抱え起こす。

「ほう、知り合いがいたとはな」

男たちは、町人のなりをしているが、この街の、出会って来た人々とは雰囲気が違う。

といって、山賊や盗賊とも違っていた。

「五人がかりで一人を襲うとは、賊まがいのことをして、何のつもりだ」

ケインが凜として男達を見据えるが、彼らは答える気はないようだ。

にやにやして、彼を見回しているだけである。

「ケイン、こいつら、やっちゃってくれよ！ ちくしょー、俺の剣を返せ！」

カイルは、そう喚^{わめ}いているが、ケインは、やたらに戦うことはない、話し合いで解決するならば、と思っていた。

もっとも、このパターンで、今まで解決してきたことなどなかったが。

「この剣は頂いていく。ついでに、貴様の剣も、置いていってもらおうか」

魔法剣を持っている男を除いた四人が、それぞれ剣を構え、じりじりと間合いを詰めてきた。

「取れるもんなら、取ってみな！」

言うと同時に、ケインはマスターソードを抜いて、手前の者に向かっていった。

ただし、剣は、あくまでも防御のためだけであって、相手の剣の攻撃をマスターソードでかわ躲しながら、右手で続けざまに二人、腹とみぞおち鳩尾に重い一撃を喰らわす。

下手に、顔などを殴るよりも、この方が、しばらくは苦しくて身動きが取れないからであった。

彼らは、ケインが剣を使うものとはばかり思っていたのか、少々面食らっている。

すかさず、ケインは、ひらりと飛ぶと、『かしら頭』と思われる、魔法剣を手にした男の前に降り立ち、そいつの喉笛に、ピタリと剣を当たった。

飛び越された男たちが追いかけてようと体の向きを変えたところで、足が止まる。

「さあ、その剣を、こっちに返してもらおうか」

静かなケインの声に、頭目の額から、一筋の汗が、つつーと流れた。

と、その時！

何もない空間に、突如『割れ目』が出来た！

ちらっと見えた縦に割れた空間の中は、空とは全然違っている。いろいろな色が混ざり合ったような、見たことのない景色であった！

賊の頭目が悲鳴を上げ、暴れながら空中に浮かぶと、その中に吸

い込まれていく！

残りの賊たちも、それぞれ宙に浮かび上がり、困惑しているうちに、空中にあちこち出来た同じような他の割れ目へと、それぞれ消えていってしまった。

恐ろしい恐怖の叫び声さえもが割れ目に吸い込まれ、割れ目とともに消えていった。

そこには、元通り、何事もなかったかのように、空があるだけであつた。

「……そ、そんな……！ 何だったんだ、今は……！？」

ケインは、目の前で起きた光景に驚きを隠せなかった。クレアも、声も上げられないほどだ。

「俺の剣ーっ！！」

後ろから、カイルの叫ぶ声がする。

「ごめん、カイル。魔法剣、持って行かれちゃった」

ケインは、振り向いて、「えへっ」と、笑ってみせた。

「笑ってごまかすなーっ！！ そんなこと、男がやってもかわいくないぞーっ！！」

「あ、やっぱり？」

ガミガミとケインを罵^{ののし}っているカイルには構わず、背を向け、ケインは腕を組む。

「それにしても、空間に消えるなんて、あんなこと、奴等^{やつら}に出来るはずがない。あれは、魔法なのか？」

「私、さっき見たの。最初に、魔法剣を持った人が割れ目の中に吸い込まれた時、中から引っ張っている手が見えたの」

ケインもカイルも、クレアに注目する。

「あんなことが出来るのは、人間では、魔道士しか考えられないわがくつと、カイルが跪^{ひざまづ}いて、頭を抱える。」

「ああ、なんてこったあ！ 俺の剣が、よりによって魔道士の手に渡ってしまうとは……！！」

魔法剣は、人の持つ精神力や、魔力に反応する。

魔道士ならば、剣の威力を最も引き出してしまうところだ。

「でも、カイルの魔法剣は、ミュミュによると、精霊の意志が関係してるんだろ？ だったら、たとえば魔道士が持っていたとしても、悪いことには使えないんじゃないか？ ましてや、それを使って俺たちがやられることもないし」

カイルが、がっくり肩を落として溜め息をつく。

「ケイン、お前って、つくづくおめでたいヤツだな。あんな、空間を行き来するなんて、相手は上級の魔道士だぞ？ そんなヤツなら他の魔法攻撃も出来るように、剣をちょっと改造しちゃうかも知れないし、だいたい、俺の身を守るものがないじゃないか！

普通の剣じゃ、中級モンスターを倒すことすらできないんだし、お前のバスター・ブレードみたいに、対魔物用に出来てる剣なんて、そこら辺には……」

カイルは、はっとなって、ケインの手にしている剣を見つめた。

「ケイン、その、そのマスターソードってヤツを、俺に貸してくれ！」

カイルは、すばらしい思いつきに、瞳を輝かせていたのだが……。

「……………」

「そんな、不審な者でもみるような目つきで、俺を見るなよ。なっ？ なくさないようにするからさー、貸してくれよー」

無言で疑いの目を向けているケインに対して、カイルはヘラヘラと愛想笑いを浮かべた。

「カイル、ひとつ聞いていいか？ お前ほどの腕なら、さっきの奴等なんか簡単に追っ払えたんじゃないのか？ それが、どうして？」

カイルは、クレアの方をちらっと見たが、すぐに目を反らした。

「……一緒にいた女を助けたかったら、武器を捨てろって言われたんだ。彼女が逃げてから殴られた。幸い、顔じゃなかったから、良かったけどな」

クレアもケインも、呆れた視線をカイルに送った。

二人と別れてから、それほど時間も経っていないというのに、もう女と知り合ったというのか。

（女の子を守ろうという心掛けは立派だが、ことの始まりが始まりだから、同情出来ない。こんなヤツにマスターソードを貸したりしたら、女の身の保証と引き換えに、悪党どもに、簡単に売り渡さないとも限らない……）

しばらく考えてから、ケインは、にこっと笑いかけた。

「カイル、武器屋に行って、お前の剣を見てみよう」

「わーっ！ やっぱり、お前、俺を信用してないな！？」

「当たり前だ！」

二人のやり取りを、クレアは、しょうもなさそうに見ていた。

クレアが、このことをヴァルドリューズに報告するついでに、勉強もするというので、二人は、図書館まで送っていった。

クレアの初めての祭り見物は、ほとんどくだらないことに時間を費やしてしまい、呆気なく終了してしまったのが、ケインには可哀相に思えてならなかったのだが。

それから、二人は、武器屋に向かった。

すれ違う町娘たちが、振り返る。

「傭兵の人たちだわ。外国人みたいね」

「格好良いわね」

などという声がちらほらする。

（ふーん、カイルって、女から見ると、そんなにカッコいいのか。

まあ、イケメンではあるけどな）

と思いつながら、ケインが彼を見ると、カイルは、すれ違い様に女たちに、ふっと微笑み、流し目を送っていたのだった。

「お前！、そーゆーことして、女を誘き寄せてたのか！？」

そこへ、二、三人の町娘たちが集まってきた。

「ねえねえ、傭兵さんたち、どこからいらしたの？」

「あそこの焼き菓子、とっても美味しいのよ」

「一緒に食べない？」

「じゃあ、お言葉に甘えて、お茶にでもしようかなー」

はしゃいでいる娘たちに、カイルも、にっこりと、さわやかな笑みを送る。

（ホント、懲_こりないヤツ）

呆れているケインに、町娘の一人が話しかけてきた。

「そっちの傭兵さんも、いかが？」

気が付くと、娘はケインに、誘うような、媚_こびた目を向けていた。
「いない。食べたくない」

ケインは、無愛想に、つっぱねた。

その反応にしらけた町娘たちは、次々去っていく。

「お前さあ、彼女たちに失礼だろ？　せっかくの好意をそんな簡単に無にするもんじゃないぞ」

「武器屋に急ぐぞ」

ケインは、ぶーぶー言うカイルには取り合わずに、先を急いだ。

祭りのせいで、町全体が開放的になっているようだった。

先ほどとは違う娘たちが、こちらを見て、黄色い声を上げていた
かと思うと、またしても彼らは囲まれていた。

「あもう、どちらから、いらしたんですか？」

「話すほどのところでもない」

やはり、無愛想に振る舞うケイン。

「旅の傭兵さんなんでしょう？　いろいろお話聞きたいわ」

カイルが何か答えかけていたが、ケインは、彼の首根っこを抱え込んだ。

「俺たちは、恋人同士だから、放っておいてくれ」

町娘たちは、さーっと、いなくなってしまった。

「あーっ！　お前、何てこと言うんだよー！　みんないなくなっちゃったじゃないかあ！」

カイルが、ギャーギャー言っても、ケインは無視した。

「あのなあ、町娘の中にはな、同じ町の男なんかよりも、外の国で戦ってきた強い男との恋を夢見てる娘だっているんだぞ。」

平凡な生活の中にいるからこそ、よその国から来た、榮譽ある伝説的な男と、燃えるようなひとときを過ごしたい——そういう女心が、お前には、わからんのか!?

それを、お前は、むぎむぎと、よりによって、俺たちが恋人同士だなんて、ふざけた言い訳しやがって、あの娘たちの純粋な気持ちを踏みにじったんだぞ!」

（よくもまあ、そこまで自分に都合よく考えられるもんだ。早い話が、それにあやかかって、自分がオイシイ思いをしたいだけだろ?）
ケインが取り合うのもバカバカしく、黙っているのをいいことに、彼は喋り続けた。

「お前さあ、女嫌いなのか? それとも、女が怖いとか? もしかして、ホントに男が好きとか?」

ケインは無視して、勝手に言わせておいた。

「あ、わかった! 実は、好きなヤツがいるんだろー? 誰だよ、白状しちゃえよ、黙っててやるからさ。」

郷里くにに置いてきてるとか? 仲間内か? クレアか? マリスか? それとも……

ヴァルドリューズか!?

ばたっ!!

コケたケインは、ゆっくりと立ち上がった。

「俺はなあ、進んで恋人作るようなマネはしないんだよ。旅は続けるし、戦いの中でいつ命を落とすかわからない身だろ? 残された女の方はどうなる? ずっと俺を引きずって生きていけてのか? そういう思いはさせたくないし、別れが辛くなるようなことは、わざわざしたくないんだよ」

言っていて、自分の中のどこかが疼うずいたような気がした。以前ほどではないにしても。

「俺だって、そんな殺生なことはしたくねーよ。だからさあ、一瞬

だけでいいっていう娘を見付けるんだよ。お互いがそういう気持ちなら、後腐れだつてないんだからさあ」

キツと、ケインがカイルを睨む。

「俺は、そういう考えは持ち合わせてない」

「ふくん、あつそ」

カイルは、面白くなさそうな声を出した。

「生憎、さっきちょっとパレードを見に行ってる間に、いい武器は盗まれちゃったみたいでね。今は、これくらいしか残ってないんだよ」

武器屋の主人の話に、二人は啞然となった。

「おい、頼むよ、おっさん。パレードが見たかったら、ちゃんと店番置いとけよ」

カイルが文句を言った。

「いやあ、町の警備隊も、パレードの方の護衛で手一杯でさ、頼めるのがカミさんくらいしかなくてさ。」

そしたら、いきなり五人くらいの男が押し入っていて、いい剣をみんな持っていつちまったんだそうなんだよ」

ケインとカイルは、顔を見合わせた。さっきの五人組だろうか？

「その五人て、賊か？」

「いいや、盗賊とは違うらしい。ちゃんとした、そこら辺の町人の服を着ていたようだし、カミさんのことを脅して、武器を盗っていっただけだったしなあ」

「パレードの時間ていったら、お前が襲われてた頃だぞ」

「奴等の一味かな」

ケインとカイルが、ひそひそ言い合う。

「おじさん、宿屋の近くに鍛冶屋があるだろ？ あそこで剣を作ってもらったら、どのくらいでできるかな？」

ケインが尋ねる。

「そうだねえ、今日は祝日で、皆浮かれてるからねえ、まあ、一週

間あれば、作ってくれるだろうよ」

「冗談じゃねーや。剣が出来上がるまで、ケインかヴァルが護衛でずっと一緒だったのか!? それじゃあ、女の子たちと茶も飲めやしねえ」

カイルの呟き^{つぶや}が、ケインにも聞こえる。

「しょうがないなー。じゃあ、ここにある剣の中から、カイル、好きな選べよ」

剣が出来るまで、彼のお喋りに付き合える自信は、ケインにはなかった。

今思うと、湖の鍛冶屋は、甲冑と剣を半日で作れたというのは、腕が良かった、または、不思議な力でも使えたのかも知れないな、などと、ケインはうっすら思った。

その間に、カイルは、柄のところに、ちょっとした細工のある普通のロング・ソードを選んだ。

「ありがとさん。じゃあ、ちょっとおまけして、二〇リブルでいいよ」

店の主人がにこにこ顔で言う。

「——だってさ、ケイン」と、カイルは、ケインの肩に、ぽんと手を乗せる。

「は? カイル、お前、マリスからもらった金は?」

「どっかで落としてきたらしい。えへっ」

彼は、頭を掻きながら、笑っている。

(ホントだ。男がやっても、かわいくないっ!)

恨めし気に見るケインに、カイルは、一層ヘラヘラしてみせた。

「『色男、金も力もなかりけり』って、言うじゃないか。はははは」
「……そんなこと、言わないぞー」

ケインは、仕方なく、カイルにまでプレゼントをあげる羽目になっってしまった。

「さんきゅー、ケイン! だか、これは、これとしてだな、俺の魔法剣は、お前がちゃんと取り戻すんだぞ。」

お前は、俺の剣を目の前にしていながら、みすみす奴等に引き渡してしまっただけだから。その責任は大きいぞ！」
仁王立ちになっているカイルに、ケインは絶句していた。

武器屋では、ついでに、警備の仕事のことも聞いてみるが、もう募集は終わったということであった。

今日のところは、よろず屋としての仕事も見付かりそうもない。武器屋を出ると、もうパレードは終わっていて、大通りは閑散としていた。

「何してたのー？ パレード終わっちゃったよー」
ミュミュが、二人の目の前に現れた。

「面白かったか？」
「うん！！」

ふと、カイルが、ミュミュの足元に目をやる。

「あれ？ ミュミュ、どうしたんだ？ あしかせ 足枷なんかはめて」
ミュミュが、みるみる膨れっ面になる。

「違うもん！ あしかせなんかじゃないもん！ これは、アンクレットだよー！ オトナの女の必需品だよー！ ケインがミュミュにプレゼントしてくれたんだ」

「ほー、ケインがねえ……」

カイルが、ケインを横目で見る。

「……お前、不毛だなー」

「なっ、何を言い出すんだ、何を……！」

「どうりで、普通の女に興味を持てないわけだ」

カイルは、うんうん頷いて、一人で納得していた。
それには構わず、ミュミュが切り出す。

「今晚、アストーレ城では、姫様の誕生パーティーが開かれるんだって。」

各国の特使やら、王子様やらが来て、一緒にお祝いするんだよ。ステキだねー！」

ミュミュは、浮かれまくっていた。

「ねーねー、ちょっとだけ、覗いてみない？」

「無理だよ。お城じゃあ、警備も充実してるし、ミュミュだけで見に行ってきなよ」と、ケイン。

「ふーん、わかった」

ミュミュは、つまらなそうに、ぱたぱた飛んでいった。

「腹減ったなー。酒場にでも行って、何か食うか？」

「そうだな」

ケインとカイルは、早めの夕飯を食べに、酒場へ行くことにした。一行は、いつも酒場で落ち合っていた。もしかしたら、マリスに会えるかも知れないと、ケインは思った。

「カーッ！ うめえ！ 一汗かいた後は、やっぱり木の実酒に限るぜー！」

カイルが、酒の入ったツボを、どんとテーブルに置いた。

（こ、こいつ……！ 何もしてないくせに）

ケインは、トリの竈^{かまじ}焼きに手を伸ばしながら、カイルをたしなめる。

「おい、あんまり飲むなよ。カネがないんだから。まったく、どっちが年上なんだか……」

だいたい、お前の長剣が、無駄な上に一番高かったんだぞ」

「わかった、わかったっつーの」

そのうち、クレアとヴァルドリューズも現れ、同じテーブルを囲んだ。

ケインは、クレアからヴァルドリューズも聞いているであろう、北の森の話をし、後で見に行こうと持ちかけた。

「で、そっちは何か収穫はあったか？」

カイルが、むしやむしやミシアの実をかじりながら、ヴァルドリューズを見る。

「先ほどから、たまにだが、魔力の波動を感じる」

ヴァルドリユーズが、無表情に語る。

「それは、やっぱり、アストーレ城の宮廷魔道士のものなんだろう
か？」

ケインの質問に、彼は首を横に振った。

「ひとつだけではない。違う波動がいくつかあるのだ」

「いくつか……？」

皆、顔を見合わせた。

「もしかして、ミュミュの言う、王女の誕生パーティーに出席する
ために来た、外国特使たちの中に、魔道士がいるんじゃない？」

ケインに向かって、ヴァルドリユーズは、ゆっくりと頷いた。

「この国には、あまり魔道が伝わってきたという記録はなかった。
だからこそ、参謀になったという宮廷魔道士が現れた時は、相当珍
しかったに違いない」

「今のところ、この国の魔道士は、彼だけみたいよ」

ヴァルドリユーズに次いで、クレアが静かに言った。

「てことは、俺の魔法剣を持っていた奴等は、外国の奴かもしれない
ってことか」

カイルが、面白くもなさそうに、木の実酒をがぶつと飲んだ。

「武器屋から、良い剣だけを盗っていったのも、その仲間だとする
と、奴等、武器ばかり集めて、何を始める気なんだろう？」

ケインが、皆の顔を見回し、問いかける。

「ま、外国の奴等の仕業しわざだとすると、王女のパーティーとやらで、
しばらくはこの国に滞在するんだろ？。その間に、俺の剣を取り
返せばいいってことか。けっ、長期のご滞在を祈るぜ」

カイルが投げやりに、酒のツボを置いた。

「だから、パーティー見に行こうってばーっ！」

またしても、突然ミュミュが出現した。

「カイルの剣も、きつとあるよ」ミュミュは、にっこり笑った。

「適当言うなー！」カイルが泣き叫んだ。

「何にしろ、一見の価値はあるかも知れんな」

ヴァルドリユーズが、静かに言った。

「北の森を調べるのは、魔法剣を取り戻してからでも、遅くはないだろう」

誘拐事件 3

アストーレ城――。

ケインとカイルは、警備の身なりをして、サロンの外の庭に並んで立っていた。

バルコニーから会場の様子が覗けるような位置である。

国の警備隊の制服は、ヴァルドリューズが用意し、隊長には、彼が催眠術のような魔法をかけたので、最も好都合な場所につけたのであった。

クレアも、女官として、大広間に潜り込んでいる。

「ごちそうもおいしかったよー」

ミュミュがケインたちの目の前を、ちらちら飛んでいる。さつそく、つまみ食いしてきたのだった。

バルコニーから覗く会場では、各国の王子や特使が紹介され、次々と室内に入場している。

王女が一六歳ということで、あの王子たちは、花婿候補というところであった。

「あのヒトは、カオはいいけど、痩せ過ぎで頼りなさそうねえ。あらあら、あのヒトは、がっしりしてカッコいいけど、ちょっとヒゲが濃いよ。それにしても、あんなにたくさんさんのヒトたちの中から、お婿さん選べるなんて、ヨリドリミドリでいいねー！」

ミュミュが、きゃっきや言いながら、ずけずけと、王子たちの品定めをしていた。

ケインは、ちらっと、自分があそこにいなくて良かったと思った。

大広間は、たくだんの参列者たちで賑わっていて、楽団の優雅な演奏も流れていた。

貴婦人たちは、髪や耳に、ごてごてとした飾りを身に着け、お腕をひっくり返したようなドレスを着ていた。男たちは、長髪を後ろでリボンで結び、びらびらした前掛けをしている――そのように

しかケインには思えず、いずれも奇妙でならなかった。

「いや〜ね、ケインたら。あれは、この地域エリアでの最新ファッションじゃないの。

『びらびらしてる』のは、『前掛け』じゃなくて、『ネクタイ』
っていうんだよ」

ケインの心を読んだミュミュが、訂正する。

「アストーレ王国アトレキア陛下、並びに、第三王女アイリス殿下、
おな〜りー」

宮廷音楽家たちの演奏が、がらっと雰囲気を変え、国王と王女の
入場を告げる声が聞こえた。

来賓たちは、静まり返り、一斉に入り口を向いた。

「おい、ケイン、見てみるよ。いよいよお姫様の登場だぜ」

カイルが、わくわくしながら、肘でケインをつついた。

厳粛なムードの中、穏やかな笑みを浮かべて歩く、豪華なマント
に実を包んだ中肉中背の男と、ひらひらと軽そうな素材で出来たド
レスを着た、小柄な少女が続いて入って来た。

「……なんだよ、まだコドモじゃないか。まあ、一六ってったら、
こんなもんか。マリスは、もうちよつと大人っぽいけどな」

カイルが、がっかりしたように呟く。

ケインの位置からは、王女の顔まではよく見えなかったが、それ
よりも、彼は、特使たちの方が気になっていた。

近隣諸国数カ国を始めとして、遙か南方の貿易国の代表までが参
列している。

最近、勢力を増してきたという国だけあって、是非、アストーレと
お近づきになりたいという国は多いのだった。

「しかし、お姫さんてのも可哀相なもんだよなあ。あの中に、好み
の男がいたとしても、自分じゃ選べないんだもんな。国の都合で決
められちゃうんだろ？」

「そうだよな、ミュミュ、お姫様じゃなくて良かったー」

「その点、町娘の方が自由だよな。カッコいい傭兵と想い出も作れ

るし」

「きゃはは！ 何それ、自分のこと？」

カイルとミュミュの会話を背に、ケインは、広間を慎重に覗いていた。

魔道士らしき黒いフード付きマントの者も数人いたが、今のところ、特に怪しい動きはなさそうだ。

噂の参謀とやらの姿は、どれだかわからないでいた。

特使の魔道士も、真っ赤なカシスルビーを付けていたが、アストーレ国王の近くに、それらしきルビーを額に付けた者は、見当たらない。

広間では、優雅にダンスが行われた。

外国の王子の一人が、アストーレ王女にダンスを申し込んでいる。王女の隣では、国王が微笑み、王子と王女が広間の中央に進み出て、踊り始めたところである。

カイルが大きな欠伸あくびをした。

「いいねえ、貴族は。こんな風に、ちんたら過ごしても、カネはあるんだからな。」

俺も、どっかの王女に一目惚れでもされて、逆玉の輿にでも乗っかりてえや」

カイルが冷やかすように、または、どうでもいいように言った。

突然、広間の明かりが、ふっと消えた！

貴婦人たちの悲鳴や、動揺の声が次々と上がる。

「な、何だ！？ どうしたんだ！？」

カイルまで、動揺していた。

「バカ。最初から、何かあると踏んで、ここにいるんじゃないか」
強盗か人さらいか、はたまた暗殺か……！？ いずれにしても、逃走するための手段が、この近くにあるはず！

と、踏んだケインが庭を駆け抜けていくと、案の定、裏の細い道

に通じている門の近くに、ウマが二頭つないであるのが見える。

そこには、警備の格好をした者が二人いたが、明らかに偽物にせものであった！

彼らは、同じ制服のケインを見るなり、剣を抜き、襲ってきたのだった！

彼は、マスターソードを抜き、応戦した。

昼間の時と同じように、剣で攻撃を受け止め、拳でやりかえす。

「ケイン！ 賊がそっちに行ったぞ！」

カイルの声がした方を見ると、人影がやってきたその後を、カイルが追って来ていた。

「待て！」

ケインが向かうと、賊は、何かを抱えたままウマに跨またがって逃走した。

「カイル、ここは任せた！」

ケインは、まわりつく二人の男を蹴り飛ばし、もう一頭のウマに飛び乗った。

賊を乗せたウマに、すぐに追いつく。

道が狭いため、なかなか横に並ぶことは出来ない。

漸ようつやく、視界が開けたと思うと、広い野原となり、その先は森であった。

そこへ逃げ込まれると、視界が悪い上に、モンスターもいるので厄介だ。

ケインは、ウマのスピードを上げ、野原では、なんとか横に並ぶことが出来た。

「止まれ！」

言ってみたところで、相手は止まるわけはなかった。

よく見ると、賊の前に乗せている黒い布の中から、女のドレスの裾のようなものが、ひらひらはためている。

（さては、こいつ、人さらいだな！）

ケインは、ウマを近付けていき、無理矢理、賊のウマに飛び移った！

ウマは、人間三人分の重さに耐えられず、バランスを崩し、嘶いて、横向きに倒れた。

彼は、咄嗟に、布を被せられた女を庇って、地面に落ちた。

どんな体勢でも受け身を取る訓練をしていたおかげで、彼自身は怪我はしなかった。

一緒に倒れた男の被っていたフードがめくれていた。知らない顔である。

だが、やはり、昼間の連中のように、盗賊という感じはしなかった。

彼は、誘拐した女を諦めたのか、一人で森へ逃げ込もうとする。

「そっちはモンスターがいるぞ！」

ケインの警告も、彼には届かなかった。

追いつめられた犯人というのは、ますます人気のない方へ逃げていくもで、賊は、一人で森に向かって走る。

ケインも、急いで後を追ったが、男の叫び声と森のざわめく音で、彼の最期を悟った。

下等のモンスターと言えども、訓練もしていない者が魔除けなしで済むものではない。

ケインは、ウマが、倒れているところまで歩いて戻った。

黒い布に包まれた女は、まだ倒れている。

ウマから落ちた時、どこも打っていないはずであったが――。

「おい、大丈夫か？」

ケインが抱え起こすと、微かに葉の匂いがした。騒がれないために、葉を嗅がされたのだとわかる。

被せられた黒い布をどけると、そこに、青白い顔が現れた。

長い睫毛に、うっすらと開かれたピンク色の小さな唇に、小さい顎、まだ幼そうな娘であった。

「大丈夫か？」

ケインが、声をかけながら、揺すぶる。

娘の^{まぶた}瞼が、ゆっくり開いていった。

「……あ、あなたは……？」

小さな唇が、か細い声を発した。

栗色の、縦に巻かれた髪、丸みを帯びた顔に、少し目尻の下がった茶色の大きな瞳、美しく弧を描いた整えられた眉、つんと尖った小さな鼻、チェリーを思わせるピンク色の小さな唇、か細く弱々しい肩、軽い身体……。

彼女は、全体的に、色素が薄い感じであった。

美しいというには、少し違ったかも知れなかったが、すべてが、か弱く、はかな気で、頼りなかった。

彼の保護本能が、くすぐられた気がし、しばらくの間、彼女から視線を反らせないでいた。

娘も、ぱつちりと見開かれた瞳^めで、ただただケインを見つめていた。

「へー、さっきの『お腕をひっくり返したような』とか『びらびらした前掛け』なんかよりも、ずいぶん詩的なひょうげんじゃないのー？」

ケインが、はっと見上げると、ミュミュがぱたぱた飛んでいた。

「ケインー！ 大丈夫かー！？」

カイルが走って来る。

その後方では、警備隊がウマに乗ってやって来ていた。結構な人数がいた。

カイルが、ケインの手元を覗き込んだ。

「あれー、お姫さんじゃん。……じゃあ、誘拐されたのって……！？」

「何っ！？ 姫っ！？」

ケインは、もう一度、娘の顔に目をやる。

視線の合った娘の頬が、ほんのりと赤く染まった。

「アイリスー！ 無事か！？」

国王がウマから降りて、転げそうになりながら、走り寄った。

「お父様……！」

ケインは、ゆっくり王女を抱え起こした。

王は跪いて、娘を心配そうに抱え込む。

「薬を嗅がされて、まだ身体が動けないようですが、じきに回復するでしょう」

そう言い終えると、ケインは頭を低くした。

「そなたは、どの隊の者だ？」

国王の質問に、彼は焦るが、どこからともなくヴァルドリューズの声が聞こえる。

だが、周りは誰も反応していない。おそらく、彼にだけしか聞こえないのだろう。

「ダルシウム將軍の隊の、ケイン・ランドールです」

「おお、余の親衛隊のか！？ それで、犯人はどうしたのだ？」

ケインは、王女を気遣うようにちらっと見てから、すぐに王に視線を戻し、低い声で答えた。

「あの森に逃げ込み、……モンスターにやられたものと思います」

「……そうか。サロンの庭に残った、そやつの仲間を調べれば、はつきりしたことはわかるだろう。」

それにしても、手柄だったぞ、ランドールとやら。こうして、姫も無事だったことだしな。

今夜はもう遅い。とりあえずの礼として、我が城で、ゆっくり休むが良い。明日改めて、城で、そなたの栄誉を称えよう！」

ケインとカイルは、ウマを並べて、警備隊とともに、城へ向かった。

城に泊まれることになって、カイルは有頂天で喜んでいた。

「お前が賊を追っかけていった後、残った二人は、俺がやつつけて縛り上げたんだぜ。」

だから、俺のことも表彰してくれるんだとさ。なにしろ、一国の

王女の誘拐を防ぐことが出来たんだからな。賞金とかも、がっばりもらえそうだな、おい」

ケインは、それには、愛想笑いで返した。

「だけど、俺たちが城にいるってこと、マリスに連絡しなくて大丈夫かな」

カイルは、呆れた。

「お前なあ、マリスは、勝手にしていいって言ってるんだぜ？　じゃあ、どこに寝泊まりしようが、構わねえじゃねーか」

「お前こそ、お気楽に喜んでるけどな、まだ事件は解決してないし、賊が簡単に入り込めたくらいだぜ？

……どうも、俺は、あの城では、何か、ややこしいことが起きてるんじゃないかって、気がするんだ」

ミュミュが、周りに見付からないようカイルの肩に止まり、髪の毛に隠れていたらしく、彼の髪をかき分けて顔を覗かせて、真面目な表情のケインを見ている。

「ああ、そうかも知れねえな。ま、それは、お前が解決してくれよ」

カイルは、ヘラヘラと、ケインに笑ってみせた。

ケインは、肩をすくめた。そして、これじゃあ、今夜は、北の森に行くのは無理そうだな、と思った。

この事件がもとで、ケインたちは、思いのほか、ここアストーレに長く滞在することになるのだった。

アストーレ城の陰謀1 Ⅰ

暖かい日差しを受け、ケインは瞼を開いていく。

「……!?!」

それが、見慣れないアラベスク模様の描かれた天井であることに気付くと、慌てて起き上がった。

すぐ横の大きな窓にはレースのカーテン。タイルの床はよく磨かれ、光沢がある。

（そうだった。俺とカイルは、アストーレ城に泊まったんだっけ。どうりで、広くて綺麗な部屋なわけだ）

着慣れないガウンと夜着を脱ぎ、急いで、昨夜の警備服に手を伸ばす。

しばらくして、女官が朝食の時間を告げに来た。

女官に案内された部屋には、大きなテーブルに、背もたれの長い、豪華な椅子がいくつも並んでいた。床には、動物の毛皮の、こちらも豪華な敷物が敷いてある。

「よお、ケイン」

カイルも、やはり警備の制服である。

二人は、進められるまま、テーブルの端の方に並んで腰掛けた。

「陛下がお見えになるまで、お待ち下さいませ」

女官たちは、ペコリと頭を下げて、部屋を出て行った。

「へーっ、王様とご一緒に朝食かよ!?! すげえな!」

カイルは、声が室内に響き渡らないよう、ひそひそ声で言った。

部屋には、次々と、貴族とおぼしき人々が入室してくる。

二人は誰が誰だかわからずに、いちいち立ち上がって、ぺこぺこするばかりであった。

「おお、おぬしたち、もう来ておったか」

そう声をかけたのは、がっしりとした体格の、険しい顔をした、白髪混じりの初老の男だ。

ふいに、ヴァルドリューズの声が、二人の頭の中に響く。

（そうか、この人が……）

その男は、彼らの隊——国王の親衛隊の將軍、ダルシウム侯爵であつた。

ヴァルドリューズが催眠術のような魔法でもかけたのか、ダルシウム侯は、二人と、まるで面識があるかのように、親し氣だつた。

その直後に、アストーレ国王が側近を連れて登場する。

どうやら、国王だけでなく、国のお偉い方との朝食会に、参列することになっているらしいと、ケインとカイルは悟り、一氣に緊張した。

広いテーブルには、料理が次々と並べられていく。

その間、国の重鎮たちは、世間話をしていた。

「なあ、ケイン、これって宮廷料理ってヤツだろ？　すげー豪華だな」

カイルもケインも、初めて目にする宮廷料理に、目を見張る。

南海の方でしか獲れないというゴールド・グルクンツナの香草蒸しサルサソースがけ、レッド・チキンのミシア焼き、スモーク・ゴールドサーモン——などと、ひととおりの料理の説明がされた。

どれも、普段は手の届かない、ケインたち庶民が見たことのないものばかりであつたが、給仕が取り分けるので、全員に料理は届く。

南海のゴールド・グルクンツナは、二人が今まで口にしたサカナとは、全く違つていた。

皮は碧翠色あおみどりから金色へ光り輝いているが、中身は白身魚であつた。今が旬のようで、脂がのっている。

ケインたちには美味いとは思えたが、少し甘めな氣もする。

だが、かかっているサルサソースというのが、スパイスの効いた、少々酸味のあるソースで、魚の甘みと調和が取れているのだつた。

（貴族って、朝からこんなにも食つてゐるのか。いいなあ）

感心しながら味わっているケインに、カイルが突いてきた。

「なあ、これなんだ？」

銀色の大きな杯に入っている、赤いぷちぷちしていそうなものを、カイルが指差しているが、ケインもわからなかった。

二人は、見よう見まねで、他の人々のように、スプーンですくい、クリームを塗ったパンに乗せて、食べてみる。

口の中で、ぷちぷちしたものが弾け、中の汁が出て来たが、甘いわけでもなく、酸味もなく、彼らには、なんと表現していいかわからなかった。

甘いものと思っていたクリームも、しょっぱかった。

彼ら庶民には、美味しさがよくはわからなかったが、貴族たちは、実に美味しそうに食べながら、話を弾ませているのだった。

「そろそろ、ダルシウム候、そなたの方から、あの二人を紹介してくれないか」

食後のカシス・ティーを、皆で啜っている時、アストーレ国アトレキア王が言った。

「おお、そうでございましたな」

ダルシウム候が、紅茶の入ったカップをテーブルの上に置いた。

内心ヒヤッとした二人の心配をよそに、ダルシウムは、彼らを、王女の誕生祝賀会用に特別に雇った傭兵のうちの二人というように、紹介した。

「そうであったか。いや、実に優秀な傭兵を見付けたものだな。

そなたたち、旅の途中であったか。諸外国の客人たちが帰国なさるまで、引き続き、城の警備の方を任せたい。

それから、そなたたちの栄誉を讃えた式典は後になってしまうが、昨日の賊を取り調べ、事件を解決してからでもよろしいかな？」

「光栄であります」二人は、声を揃えた。

「では、今晚からは、正規軍の宿舎で過ごすが良い」

ケインもカイルも、傭兵の身で、正規軍の宿舎に寝泊まり出来ることに感動し、しばらく浸っていたのだが、貴族たちは、そんなことには関心はないらしく、再び世間話を始めていた。

「そう言えば、ダミアス殿のお姿が見えませんか」

「昨夜のパーティーにも、出席なさらなかったようだ」

いったい誰の話かと、ケインとカイルが顔を見合わせていると、一人の男が入室してきた。

「おお、ダミアス、やっと来おったか！」

王が、男を自分の隣に招き寄せた。

「……！？」ケイン、カイルは、思わず身を乗り出しそうになって、あるものに注目した。

男は、普通の貴族と同じような服装であったが、黒い髪に隠れた、額の紅い宝石を、彼らは見逃さなかった！

「あれが、噂の参謀……」

「——にして魔道士の……！」

参謀は、王の隣に、軽く会釈をして座った。

あまり特徴のない、痩せた男であった。年の頃は四〇代だろうか、額や目元、口元に深く刻み込まれた皺が、思慮深く、年齢よりも老けて見えてしまっていた。

「昨日の事件は、ご存知ですか？」

公爵の男が、参謀の男に尋ねる。

「王女殿下の誘拐未遂事件ですか？ 存じております」

男は抑揚のない声で、静かに答えた。

「貴公はその頃、どちらへいらしたのですかな？ 昨夜、サロンでは、お見掛け致した覚えがないものでな」

公爵の隣の男が、嫌味のように言う。

「書齋におりました。わたくしは、華やかな場が、どうも苦手でございますまして。今までを、思い起こして頂ければ、お解りかと存じます」

表情を変えずに、参謀の男は返した。

（ありゃー、なんだか険悪なムードじゃね？）

（……だな）

カイルとケインが目配せする。

「その時、王女を救ってくれたのが、あそこにおける二人なんじゃよ」
アストーレ王は、この微妙な空気に気付かないのか、朗らかに参謀に笑いかけ、ケインたちの方に振った。

ケイン、カイルと、ダミアスの目が合った。

彼の目は沈んでいるように見え、顔同様、あまり表情がなかった。
「今夜は、特使たちと接見がある。今度は参加してくれるであろうな？」

「ごもつともでございます」

参謀は、王に少しでも微笑んだ。

その後は、何事もなく、しばらくして朝食会は解散となった。

ケインとカイルは、本日の警備の打ち合わせのため、ダルシウム將軍の後に続いていった。

ふと、朝食会に出席していた公爵たちが目につく。公爵二人は、何やらこそこそと話している。

「おい、ケイン、さっきの様子だとき、どうも噂の参謀殿は、すべての人に支持されてるわけじゃなさそうだよな」

「ふらった現れたよそ者に、参謀の地位を持って行かれちゃったんだからな。面白く思っていないヤツも、ちらほらいるってわけか」

カイルとケインは、小声でそんなことを話しながら、將軍の後について、城の中の長いロビーを歩いていった。

護衛の打ち合わせが済むと、二人は、正規の親衛隊に混じって、簡単な訓練を受けた。

もちろん、雇われ兵として、城の軍隊と一緒に行動したことはある。だが、正規軍の中で、これほどのちゃんとした訓練など受けたことはなかった。

なにしろ、傭兵はほとんど歩兵で、持ちウマがなければ、ウマに乗って戦わせてくれることは滅多にない。

そして、個人よりも、団体であることが多い。ケインもカイルも、

傭兵の仕事の時は単独よりも、他の傭兵達と寄り集まって申し込むことがほとんどだった。

それでも、いくさでは、切り込み隊や、盾として使われるのだが、自ら志願した場合の報酬は良かった。

そんな彼らからすると、親衛隊というのは非常に条件が良かった。国の大将の周りを預かるのだから、戦況が有利であるうちは出番がなく、安全という楽なポジションなのだ。

今後、どのように状況が転んでもいいようにということと、情報が入り易いことから、ヴァルドリューズが彼らをダルシウム候の管轄へ忍び込ませたのだろう、と彼らは、今、気が付いたのだった。

訓練の後は、短い休憩時間となった。

兵士たちは、水筒の中身を飲んだり、木陰で休む者、仲間と喋る者などである。

ふと、訓練場の警備の兵士が、女官と、ドレスを着た小柄な少女とを連れて、ダルシウム候に取り次ぐ。

そのドレスの少女とは、アストーレ王国第三王女アイリスであった。

「これはこれは王女殿下、こんなむさ苦しいところへ、ようこそお出でくださいました」

ダルシウムが、少々驚きを隠せない顔で、深々と礼をした。

「少し見学してもよろしいでしょうか？」

「どうぞどうぞ、今は休憩時間でして、もう少々すれば訓練の時間になります。」

あまり面白いものではないと思いますが、見守って頂けるようであれば、兵士たちも励みになりました。」

続けて、老將軍は宿舎や訓練場の説明をするが、王女はどこか上の空で、まるで何かを探しているように、きょろきょろと見渡していた。

その視線が止まる。

そこには、休憩時間でも剣の素振りをしているケインと、木に寄りかかって、彼にペラペラ話しかけているカイルとがいた。

王女は、彼らに向かって、方向転換する。侍女も後ろから付いていく。

すぐに、カイルが気付いた。

「……あ、あのう……」

王女が、小さな高い声で何か言いかけるが、侍女がそれを制し、前へ出る。

「ケイン・ランドール様と、カイル・アズウェル様でございますね？ 姫様から、お話があるそうです」

そう言って、王女の隣に控えた。

ケインは素振りをやめ、カイルも木から背中を離し、王女に敬礼し、地面に片膝を着いた。

「あ、いいのです。どうか、面^{おもて}を上げてください」

言われた通り、頭を下けたまま、二人は立ち上がったが、王女は緊張しているのか、まごまごしていて、なかなか話を切り出せない。

ケインは、本物の王女と対面し、話をするなどということは、今までの人生の中で、初めてであった。

確かに、今まで目にしてきた町娘たちとは違い、気品もあり、高貴な生まれから来る優雅な物腰が王族ならではの、感心させられる。

（だけど、なんだかまだ可愛らしいというか、幼いというか……？ それにしても、なんでお姫様が、こんなところへ？ 今までも、

兵士達を激励してたとか？

いや、それなら、もうちょっと慣れた感じがあっても……。しかし、可哀相なくらい緊張してるなあ）

ケインは、王女の真意を汲み取ろうと、見詰めていた。

「……あ、あの……ごめんなさい、訓練の邪魔をしてしまつて……お気に障りました？」

「いえいえ、全く然、大丈夫ですよ」

カイルが微笑んで見せながら、肘でケインをつつく。

「おい、ケイン、そんな顔するなよ、姫様怖がってるじゃないか。ほら、にっこり笑って」

別に、ケインは普通にしていたつもりだったのだが、王族に対しては無愛想だったかと、慌てて態度を改めようとした。

しかし、どんな風に笑ったらいいいのか、と一瞬迷ったケインは、口の端をちよつとつり上げただけだった。

「……やっぱり、怒ってらっしゃるんですね」

そんなつもりは毛頭なかったのだが、不自然な笑いになってしまったかと、反省する。

「そうですわね。お礼を申し上げるのが、こんなに遅くなってしまったのですもの。危険を侵してまで助けて頂いたというのに、その上、剣の練習の邪魔までしてしまつて、……本当にごめんなさい……」

王女は、うつむいた。

ケインは、慌てて本当に笑顔を取り繕った。

「い、いや、そんなことどうだっていいんだ……です！ その、俺、いや、わたくしは、全然怒ってなどおりませんです」

失礼があつてはいけないと思う故、慣れない言葉遣いに舌を噛みそうになる。

「すいませんねー、こいつ、照れ屋なんです。ホントは、姫様に話しかけて頂いて、超嬉しいはずなんですよー。だから、どんどんお話ししてやって下さいねー！」

カイルが、助け舟のつもりでしゃしゃり出たのだが、ケインは余計に焦った。

「こら、姫様に向かって、何てこと言うんだ！ しかも、その言葉遣い、失礼だろ！？」

王女は、呆氣に取られた顔をしていたが、そのうち、くすくすと笑い出した。

「面白い方たちですね。言葉遣いなどは、そんなにお気になさらないでください。私にとっては、新鮮ですので。」

……あの、助けて頂いたお礼は、是非改めて致したいと思っておりますが、とりあえず、よろしかったら、午後のお茶の時間にも、お二人でいらして下さいませんか？」

笑って緊張がほぐれたように、王女は、先ほどよりはリラックスして語りかけた。

彼女をお茶会に誘うと、王女は楚々として、帰っていった。

「おい、俺たち、王族のお茶会に誘われたぞ」

カイルが、ほわ〜んとした顔で、感動する。

「ああ、そうだな。だけど、俺、作法とか全然知らないし……。だいたい、俺たちみたいなのがそういう場にいるのかな？」

「いーんじゃないの？ 言葉遣いも気にするなって言ってくれたんだし、俺たち庶民の反応って、王族からしたら新鮮っぽかったじゃん？ あのお姫様、いい子だな〜」

二人とも、初めて招待されるお茶会を楽しみに、訓練が再開されると張り切ったのだった。

「……と、そこで、俺は、持っていた魔法剣を引き抜き、その巨大モンスターを消し去ったのさ！」

「まあ、勇ましい！ カイル様って、お強いのね！」

カイルのホラ話を、貴族の少女たちは真面目に聞き、崇拜の目さえ向けていた。

ケインとカイルは、王女に招待された、プチ・サロンでのお茶会に来ていた。

王女の従姉妹や女官など、十数人が集まり、にぎやかに話をしていた。結局、ここも、町娘の集まりと大して代わり映えはしなかった。

それにしても、彼女たちのする話は、どこの高級焼き菓子が美味しいとか、どんなデザインのドレスがどうだとか、誰々の詩集が素晴らしいなどということばかりで、十人が十人、同じものに興味を持っているようだった。

それが、ケインには、とても不思議で、好感を持つというよりも、どちらかというと嫌悪感を覚えるほどであった。

カイルは、ちゃっかり自分のペースで楽しんでいるのに比べ、彼は、ちつとも楽しくなかった。

お茶に誘った当の王女は、話が出来るほどの距離にはいない。

いったい、なぜ自分達が呼ばれたのか、彼にはわからなかった。

なんとなく居心地が悪い気がしたケインは、ふらっと部屋を出ようとした。

「おや、もうお茶会は終わりにかね？」

扉を開けたところで、ちょうどアストーレ王に出くわし、ケインが慌てて最敬礼をすると、「よい、よい」と笑いながら手を振り、王は室内へ入っていった。気さくな王の人柄が現れていた。

「まあ、お父様！」

「おお、アイリス。今日はなんだか賑やかだのう。私も入れてくれないかね？」

「ええ！　どうぞ、こちらへ」

王も、お茶会に加わり、ケインは何となく退室しそびれてしまった。

「ランドール、君も華やかなところが苦手なのかね？」

王がケインに尋ねてきた。

「はい。慣れていないものですから」

「ほっほっほっ、はつきり言うものじゃのう」

ちよつと無遠慮だったかと、ケインは取り繕おうとしたが、王は気にも留めていないようだ。

ケインは、窓辺の方へ行き、外の景色を眺めた。

やはり、自分は、女の子とお喋りしているよりも、町を歩き回って見物したり、剣を振り回して悪い奴等をやっつけたりしている方が、性に合っているのだ、とつくづく感じていた。

窓から見える、草一面の広い庭を眺めていると、ふと、マリスのことを思い出した。

（そういえば、あいつは変わってたな。女でも、俺と同じ戦士の性質を持っていた。今は、どこでどうしてるんだろうか……？　なん
で、急にいなくなったんだろう？）

一緒に武器屋を回ったり、モンスターを倒したことを思い浮かべているうちに、彼は、ここにいることにますます違和感が募るのと引き換えに、無性にマリスに会いたくなった。

そんな彼を、王女は時折見つめていたのだが、取り巻き達に囲まれていて、なかなか動けないでいる。

そこへ、「失礼します！　国王陛下、至急、將軍のもとへ、お出
てください！」

ランドール、アズウェル、召集だ！　」

国王親衛隊の一人が現れた。

その声の調子から、尋常でないことを感じ取ったケインとカイルは、顔を引き締めて、

王と側近よりも先に部屋を出て、親衛隊隊員に続いて走っていった。

アストーレ城の陰謀1 〔2〕

「何ということだ……！」

アストーレ王アトレキアが、強張^{こわば}った顔で、思わず呟いた。

王女のお茶会が開かれていたプチ・サロンとは一変して空気の違う軍の作戦会議室に、朝食会の時のお偉い方が集結していた。

昨日の誘拐未遂で監禁していた男たちが、尋問はこれからという時に、二人とも脱走しているというのだった。

「結局、昨日の事件は、何者の仕業かわからず仕舞いですな」
そんな声も、ちらほら上がる。

「これは、内通者がいるに違いませんな。牢の場所を知り、脱走の手引きをするなど、外国の方々に、出来るわけはありませんからな」
公爵の一人が、ちらつと参謀を見る。

「そう言えば、おぬしは朝食会の時、遅れていらしたな」

もう一人の公爵も、不審な目付きで、じろじろと参謀を見た。

「どういう意味でしょうか？」

参謀ダミアスは、無表情で問い返す。

「つまり、あの時、どこかに寄っていたから、朝食会に遅れたのではないか、ということですよ。参謀殿のことならば、牢番も聞くかも知じませんからなあ」

「それに、魔道士ならば、どこでも自在に現れることが出来ますものなあ。今回の王女殿下誘拐事件は、実は、貴公も一枚かんでいる……などということではなければ、いいのですが」

二人の公爵は、したり顔で参謀を見ている。一方、参謀の方は、相変わらず、表情はないままだ。

「そなたたち、何を言つとる。ダミアスが、そのようなことをするわけがなからう！」

余は、内部のものの仕業などとは、思っておらん！ といって、訪問中の外国の方を疑うのは微妙なところ。

……ダルシウム候、この件は、そなたに任せる。親衛隊の中から人員を選びめぐり、即刻事件解明に当たってくれ。諸外国の方に気付かれぬよう、くれぐれも、内密にだぞ。

彼らは客人だ。不愉快な思いは、させてはならん」

「仰せつかりました」

將軍は深々と頭を下げた。

事件解明を命じられたメンバーの中には、ケインとカイルも入っていた。

親衛隊の上官たちでは、接見の時に室内の警備を担当していたり、顔が知られたりしているため、それ以外の手の空いている者で、比較的動き易い者たちが選ばれたのだった。

総動員数は十人。

滞在している一カ国につき、二人の計算になっている。

ケインの担当は、近隣の一つ、ガストー公国だった。

カイルは、南海の貿易国ライミアで、朝食に出たゴールド・グルクンツナの産地である。

まずは、さりげなく見張り、調書を取り、報告するというもの。

ケインは、さっそく、ガストーの王子と特使のいる室に向かった。

「……僕には無理だって、爺や」

「そんな弱腰でどういたしますか」

「だってさ、他の国、見ただろ？ マスカーナ、デロス、クリミアムに、貿易国のライミアまで来ちゃってるんだよ？　うちの国が、一番小さいじゃないか。」

ライミアなんか、珍しい国魚なんかをお土産に差し出しちゃうしさ。南方の貿易国と手を結んだ方が、こちらさんだってお得だと思ってるんじゃないの？」

「ですが、私のお見受けした限りでは、公子様ほどのお美しい方は、いらっしやらなかったように存じます。何も取り柄の無い国である

からこそ、公子様のその魅力で、王女殿下に見初めて頂くのです。昨夜のダンスで、一番にお声をかけて踊られたのは、タリス様、あなた様なのですから、きっと、姫様の印象もお強かったに違いありません。

接見の時に、それとなく、この爺が、王にお尋ねしてみます故に

……」

「ふーん……。でも、あの子に色仕掛けなんて、通用するのかなあ。な〜んか、幼そうだったけれど」

「これ、坊^{ボン}！ お口を慎みなされ！」

「だって、僕は、従姉妹のタリアと将来を誓ってるんだよ？ それなのに、お父様は、アストーレと仲良くしたいからって……！」
そこで、特使が、ノックの音に気付き、扉を開くと、小姓の格好をしたケインが、酒の入った壺を持って来たところであった。

彼は、公子とその側近の老人の杯に、王族の飲むカシス酒を注いだ。

なるほど、ガストー公国公子タリスは、セミロングの金髪に、青い瞳の、端正な顔立ちで、なかなかの美声年であることがわかる。そして、爺やと呼ばれていた参謀のこの白髪頭の老人が、お守役であるのだろう。

他にも、お付きの者が数人いたが、特に変わったところもなく、魔道士らしき人物も見受けられなかった。

全員分の酒を注ぎ終わると、彼は部屋から出て行った。

隊員達のもち寄った情報によると、魔道士を連れて訪問してきた国は、マスカーナ王国と、デロス王国のみだった。

ケインとカイルは、もう片方の見張りと交代して、自由時間となった。

カッコいい仕事だと張り切っていたケインには、少々物足りなく、残念だったのだが。

町の酒場には、ヴァルドリューズとクレアが、既に来ていた。そこへ、ケイン、カイルが加わる。

「貿易国ライミアの特使は、結構やり手っぽかったぞ。こここのころ、国交を盛んにしてきてるみたいだし、今回集まった中では、一番遠方だ。あんなところからの訪問の知らせは、アストーレにとっても、願ったりってところだったんじゃないかなあ」

言いながら、カイルが、木の実酒を、ぐいっと呷^{あお}った。

「お互いに、国交を望んでいるのであれば、アストーレの姫を娶^{めと}ったり、小細工なんかしなくても、アストーレとの友好関係は持てるよな。……てことは、ライミアは、今回の騒ぎには関係なさそうだな」

ケインは、木の実酒を、木の器に注いだ。

「ケインの方のガストーは、どうだった？」

「ああ、あそこも関係なさそうだったよ。アストーレとお近付きになりたくても、大して特徴のない国みたいだし、公子の腕だけが頼りらしいが、その公子も気が乗らないみたいだった。

周りが、煽^{あお}ってるだけみたいだったな」

ケインは、隣に座っているヴァルドリューズに向いた。

「魔道士が同行している国は、マスカーナとデロスの二国だそうだが、どのくらいの能力を持つ奴等なのかは、まだわからないけどな」

ヴァルドリューズは、木の実酒の入った器をじっと見ていた。

「マスカーナもデロスも、魔道がそれほど盛んというわけではないみたい。魔道士は、代々参謀になっているけど、まじないや占いが少々出来るという程度のもので、どちらかというと、豊富な知識が売りの、学者のような役割らしいわ」

クレアが代わりに答えていた。

彼女は、ケインたちが城で警備に当たっている間に、調べものをしたり、合間を縫ってヴァルドリューズに魔法を習ったりしているのだった。

「……そう言えば、またミュミュがいないな」ケインが、きよろき

よろ辺りを見回した。

「先ほどから、姿が見えない」ヴァルドリューズが、表情のない声で言った。

「どーせ、どっかで遊んでるんだろーな。あゝあ、マリスもどこに行っちゃったのかわかんないし、俺たち、いつまでこんなことしてりゃあ、いいんだかなー」

カイルが伸びをした。

「あ、そーだ、ケイン。お前、俺の剣、ちゃんと探しといてくれよ。忘れてないだろーな？」

「なんだよ、今は、それどころじゃないだろ？ 事件が片付いたら探してやるよ」

「なんだ、その面倒臭そうな態度は！？ あれはなあ、俺にとって大事な剣なんだぞ、わかってるのか！？ 」

カイルが絡み出した。

「わかってるって」

「いーや！ お前は何もわかつちやいない！ あの剣が、どれほど大事なものか」

カイルは、木の実酒を追加で頼むと、再び呷った。

「俺が、まだ幼かった頃、町の骨董品屋のばあちゃんが、俺に見せてくれたのが最初だった。売り物じゃなくて、ばあちゃんが旅の人から譲り受けたんだそうだ。」

鞘や柄に、綺麗な宝飾品が鑲^{ちりば}めてあったろ？ ばあちゃんが言うには、一流の細工師の手が施されているんだそうだ。それだけで、一級の値打ちのあるものだったが、旅の人は、さらにその剣の価値を上げるようなことを付け加えた、『この剣は、持ち主を災いから守ってくれるのだ』と……」

静かに聞き入っている皆を、カイルは満足そうに見渡すと、話を続けた。

「旅人の話だと、自分は、ある国の末裔の者だということだった。」

ある時、大量のモンスターが一斉に城に襲いかかり、死闘の末に、その国は滅びてしまったのだそうだ。

気が付くと、まだ幼かった彼だけが、なぜかひとり生き残った。そして、手には、知らず知らずのうちに、その剣が握られていて、彼の周りには、モンスター達の残骸が転がっていた、と。

彼には、まったく身に覚えがなく、恐ろしくなって、その場から逃げ出した。

だが、剣は、しばらく彼の手からは、離れなかったんだそうだ」カイルは、木の実酒を啜った。

「ヴァルス帝国――」

ヴァルドリューズが、重々しく口を開いた。皆、一斉に彼に注目する。

「突然のモンスターの襲撃に、三日にして滅ぼされてしまったというヴァルス帝国。

その数年後、魔物ハンターと呼ばれるひとりの剣士が、各国を巡り、魔物に悩まされていた国々を救って歩いた、という言い伝えを、以前、耳にしたことがある」

カイルが、ヴァルドリューズを見て、にやっと笑った。

「さすが、よく知ってるじゃねーか。その旅人は、まさに、ヴァルス帝国第四王子、フィリウスだったのさ」

「ふーん、じゃあ、あれは、王家に伝わる剣だったのか」と、ケイン。

「そうでもないらしいんだが……。なんでも、時の王様が、珍しいもの好きで、どこかの貿易商が持ってきたのを気に入っちゃって、王室にずっと飾っておいたんだってさ。

まさか魔法剣だとは、まったく知らずに」

「それで、その王子様は、そんな大切な剣を、どうして人に譲ってしまったの？ その剣で、モンスターを退治してまわっていたんでしょう？」

クレア尋ねる。

「病で行き倒れになっていたところを、偶然、骨董品屋のばあちゃん
が助けたんだと。」

その頃には、もう大分年も取ってみたいだし、無敵の剣士も、
老いには勝てなかったんだろう。親切にしてくれたばあちゃんに、
お礼にくれたんだってさ」

「そうか！　そして、今度は、そのおばあさんが魔物ハンターとな
って活躍したんだな！？」

「んなワケあるか！」

ケインの、お茶目なつもりのボケに、カイルは即座に突っ込んだ。
「魔物ハンターとなって、いくつもの国を救ったフィリウス王子や、
親切な骨董品屋のおばあさん……それに続いたのが、よりによって、
あなたのようなチャランポランな人だったなんて、……フィリウス
王子も、さぞ、報われない思いでいることでしょうね」

クレアが美しい顔でずけずけと言ひ、遠くを見詰めて、祈りの言
葉を呟いた。

ケインも、側で大きく頷く。

「だーっ！　なんだよ、二人してグルになりやがって！　お前ら、
デキてんじゃねーの！？」

カイルが喚いた。

「なんて下品な……！　あなたって、すぐにそういう方に結びつけ
るんだから。まったく、信じられないわ！」

クレアが、また怒り出す。

「……って、俺が、あの剣に執着するのは、何もそれだけじゃない
んだ」

急に、カイルは真顔になり、静かに話し出した。

「知っての通り、あの魔法剣の霊気は人体には無効だ。人相手の戦
場では、普通の剣として戦ってきたが、当然戦況が不利だったこと
もあった。」

そんな時だ。

そいつを抱えて眠り込んでいると、胸騒ぎがして、ふと目が覚め

た。

なんだか、よくないことが起きるような、妙に落ち着かない気持ちになって、俺は、軍のテントを抜け出した。

森の中には、モンスターが潜んでいることは承知だったが、なぜだか、そこが安全な場所だという気がして、入っていったんだ。

しばらくすると、いきなり、ひゅんひゅん音がし、振り向くと、俺が今までいた陣地に敵軍の火矢が降り注ぐのが見えた。

次々と、テントが燃え上がり、逃げ惑う兵士たちの悲鳴が、俺の隠れている所にまで届いてきた。

敵の奇襲攻撃を受けて、俺のいた軍は、ほぼ全滅だったらしい。こんなことは、一度や二度じゃなかった。

もともと悪運の強いところはあったが、危険を察知して逃げるような、俺にそんな特殊能力があるとは思えない。なにしろ、俺の魔法能力はゼロに等しいからな。

そういうことが何度か続くうちに、フィリウス王子の言葉、『災いから守ってくれる剣』ということのを思い出し、日増しに実感していくようになったのさ」

彼は、木の実酒がなくなると、今度は、ミシアの実をかじり始めた。

「――そんなわけで、あの剣は、俺のお守り代わりみたいなモンだったんだよ。

だから、ケイン、絶対、取り戻してくれよな」

「あ、そうつながるわけね」

ケインは、苦笑いをした。

「そうだ、ヴァル、あの剣持ってたの、どうも魔道士らしいんだ。空間を渡る術、あんたも使えんだろ？　なあ、ケインだけじゃ頼りないから、強力してくれよ」

カイルがヴァルドリューズを、希望に満ちた目で見る。

「……悪いが、その件に関しては、協力出来兼ねる」

ヴァルドリューズは、感情のない声で答えた。それには、一同、

意外であつた。

「ええっ！？　な、なんでだよ！」

カイルが、血相を抱えて、ヴァルドリューズの顔を覗き込む。

「魔道士同士は、戦ってはならぬと、魔道士協定で決められている」
カイルは、髪を掻き^{むし}った。

「お前さあ、型破りな魔道士なんじゃなかったのかよ？　『サンダ

ガー』呼び出すなんて禁呪使ってるくらいなんだから、このくらい、いいじゃないか！」

「心配せずとも、あの剣は、必ずお前のもとへ、戻ってくるだろう」
「なんだよ、気休め言いやがって！」

カイルが突っかかっていっても、それ以上、ヴァルドリューズは喋らなかつた。

「まあ、なによ！　自分の剣じゃないの。人を当てになんかしないで、自分でお探さないよ！」

クレアが目の端をつり上げて、カイルに抗議した。

「けっ、まったく、友達甲斐のないやつらだぜ。……ケイン、お前はちゃんと協力しろよ。

絶対だからな！」

ケインは頷く前に、いつものように呆れたのだった。

正規軍の宿舎に戻り、時間のあつたケインは、庭で素振りの練習をしていた。

カイルはというと……、ベッドメイキングに来たメイドの女の子をからかっていて、既に調子の良さは取り戻しているようである。すると、親衛隊の一人が呼びに来て、またしても彼らはさきほどの会議室へと連れて行かれたのだった。

「こういうことだね、ダルシウム！　姫の衣装室にこのようなものがあつたとは……！」

早く事件を解決致せ！」

アトレキア王は、イライラした口調であつた。ダルシウム將軍は、

頭を下げたままだ。

こともあろうに、王女の衣装室に、王女誘拐を仄めかす脅迫状があったのが、後から駆けつけたケイン達にもわかった。

「姫もすっかり怯えてしまっておる。そなた、特使の見張りにだけ気を取られるのではなく、姫の護衛をいつもの倍に増やすのじゃぞ！」

王が、つかつかと、室内を落ち着きなく歩き回っている。普段は、温厚な人柄ではあるが、娘のこととなると、冷静でいられなくなる面もあるらしい。

「し、しかし、おそれながら、衣装室や浴室などまでは……、ご存知の通り、隊には男の者しかおりませんので……」

將軍は、王の顔色を伺いながら、おそろおそろ切り出した。

「では、女官の人数も増やせ！ ええい、腕の立つ女官は、いないのか！？」

「そ、そのような女官などは、聞いたことが……」

カッカしている王に、八つ当たりのように、管轄外のことまで押し付けられ、將軍は、すっかり困り果てていた。

「……おや、これは……！ インカの香の匂いが、微かにいたしますな」

それまで、脅迫状を眺めていた公爵が、そう言って、將軍に渡す。ダルシウム將軍も、匂いを嗅ぐ。

「……確かに、何かの香のような香りが……」

「インカの香とは、魔道士が瞑想する時などに使う、お香ではなかったですか？」

「おお、そうでしたな。なんでも、精神の集中を手助けし、修行の効率を図るのだと、聞いたことがありますぞ。……そういえば、参謀殿のお姿が、またお見えでありますな」

公爵の二人は、寄り集まって、口々に、そうだそうだと言いつつ合っていた。

「そちたち、まだダミアスを疑うというのか！？」

王は、一層目をつり上げた。

「陛下、ダミアス殿のお部屋を訪問してみれば、おわかりになることですよ」

公爵のひとりが、さっさと室を出て行き、手招きする。

ぞろぞろと人々が移動するその後に、ケイン達も続いていった。

参謀の書斎に着くと、公爵が扉をノックする。

「ダミアス殿、おいでか？」

しばらくして、ドアが開き、魔道士の顔が覗いた。

「失礼いたすぞ」

公爵が部屋にずかずか踏み込んでいく。

「……何用ですか？」

顔色を変えずに、魔道士が問うが。

公爵は、部屋の週王にしばらく立つと、にやりと笑った。

「さっきの脅迫状と、同じ匂いがする……！ やはり、貴公が犯人だったのだな、ダミアス殿！」

会議室にいた全員が書斎に入ると、間違いなく脅迫状と同じ香の香りが、室内に漂っていた。

「犯人とは、穏やかな話ではありませんね。それに、脅迫状とは、一体何のことです？」

ダミアスは、少しも同様などはしていなかった。

「……とぼけおって……！」

公爵が、吐き捨てるように言った。

「ダルシウム候、こやつを即刻、事件の重要参考人として、しょっ引いて行かんか！」

「いや、しかし、これだけでは、逮捕までは……」

「まだそんなことを言っておるのか！？ インカの香など、魔道士しか使わぬもの。我が国では、こやつしかおらぬ。外国の者には、城の中を行き来など出来ぬのだぞ？」

これだけ条件が揃っておれば、もうこやつが犯人だと決定的では

ないか！」

「いや、しかしながら……」

そのように、公爵とダルシウムが口論していた中――

「あーっ！ 俺の剣！！」

その声にびっくりしたケインは、隣を見た。カイルが、部屋の隅を指差し、叫んだのだ。

一同が一斉に注目する中、カイルは進んでいくと、部屋の隅に立
て掛けられている、宝飾品の鏤められた剣を取り上げた。

「一体、どうしたというのだ？」

ダルシウム侯が、カイルに尋ねる。

「これは、昨日盗られた俺の剣です。……間違いない！ ……剣を
持っていたのは、五人の男たちだったが、奴等は、剣ごと空間に
消えやがったんだ……！」

ケインとダミアス以外の連中は、ざわめいていた。

「それは、まことか？」

「はい！」

「空間に消えるなどとは、並の人間に出来ることではない。お主の
ような一流魔道士ならば、出来ないこともないだろうがな」

公爵が、ダミアスを挑戦的に見た。ダミアスの静かな瞳が、一瞬
鋭く光ったように、ケインには思えた。

「おい、この剣を、どうやって手に入れた？」

カイルが、いかにも疑わしい目で、参謀に聞いただす。

「私は知らない。……いつからか、そこに立て掛けてあったのだ」

「……てめえ、まだシラを切るつもりかっ！」

カイルがダミアスに掴み掛かる前に、ケインが飛び出し、押さえ
込んだ。

「やめろ、カイル！ 落ち着けっ！」

「放せよ、ケイン！ これで、もうハッキリしたじゃないか！ こ
いつが、俺の剣を持っていた張本人なんだよ！ こいつ、きつと、
俺の魔法剣を使って、良くないことを考えていたに違いねえ！」

頭に血が上って暴れているカイルを、ケインが押さえ付けているのと、ダミアスとを、一同は、困惑しながら、ただ見つめていた。

「……わしには、何が何だかわからん。……ダルシウム、そなたに、この場を任せる」

王は、ふらふらと、参謀の書斎を出て行った。

「……ダミアス殿、とりあえず、ご同行願いたい」

複雑な表情のダルシウム侯が、ダミアスの腕を取ると、彼は素直に従った。

「良かったー！ 俺の剣が戻ってきて。ああ、どこにも傷はついてないみたいだし、本当に良かったー！」

正規軍の宿舎では、カイルが、剣を眺めては、鞆に頬ほお擦りしていたが、ベッドに腰掛けて腕を組み、考え込んでいるようなケインに、気が付いた。

「なんだよ、浮かない顔して。俺の剣が戻ってきたのに、お前、嬉しくないのか？」

カイルが、部屋に着いてから黙りこくっているケインの顔を、じつと覗き込む。

「……」

「……なあ、どうかしたのか？」

ケインには、あることがずっと引っかかっていたのだった。

「カイル、お前、本当に、お前の剣を、あの参謀が盗ったと思うか？」

「当ったり前じゃん！ お前も見ただろ？ 現に、俺の剣は、ヤツの部屋にあったんだぜ？ それが立派な証拠じゃないか」

「じゃあ、姫の控え室に脅迫状を置いたのは？」

「それもやっぱ、あいつなんじゃないの？ あの五人の男どもを使って、武器を集めさせたのか、魔法剣とわかって横取りしたのかは知らないけど、手に入れた魔法剣が、人間には効かないことがわかって、そのうち改造しようと思ってたか、或は、見た目も綺麗だ

し、部屋の飾りにでもしてたってところなんじゃねーの？

つまり、あいつは、姫様を人質にして、王を降伏させ、城を乗っ取ろうとしてたんだよ」

カイルは、解り切ったことを聞くな、とでも言いたげな顔であった。

「……そうかなあ。空間移動が出来るくらいの一流魔道士が、わざわざそんな小細工までして、国を乗っ取ろうなんてするのかなあ。

そんなヤツなら、武器や魔法剣の力を借りなくたって、ひとりで充分なんじゃないか？

脅迫状にしても、香の香りが付いたまんまにしておくなんて、……参謀にまでなったヤツの犯すミスだとは、俺には思えないんだ」
ケインの話を聞きながら、カイルは、ベッドに、ごろんと横になった。

「……だったらさあ、あれか？ この国は、魔道士が珍しかったみたいだから、ちょっと魔道をカジったことのあるダミアスが、すごい魔道士に見えてしまった。

間拔けな、人のいい王様は、そいつを参謀にして、もう怖いもの知らずの気でいた……とか？」

「間拔けって……ったく、失礼なことを」ケインは、苦笑いした。

「それだったら、空間を移動して、お前の剣を盗っていったのは、違うヤツってことになるぞ」

カイルは首を捻った。

「じゃあ、あれかな？ ……あの公爵たちが、日頃からよく思っていなかった参謀を、ハメようとしているとか？

あいつら、この国の人間にしては、やたら魔道士のやることに詳しくなかったからな。どっかで、闇の魔道士でも見付けて、ダミアスに濡れ衣着せたとか？

今回の事件は、アストーレのお家騒動だった……ってのはどうだい？」

カイルは得意気であったが、ケインは、まだ腑に落ちない顔であ

った。

「うーん、それだったら、何も、姫様の誕生日に合わせることはないんじゃないかな。普通の日でもいいんだし。しかも、昨日の今日だろう？」

カイルが、眉をへの字にした。

「だから、ヤミ魔道士がいい日を占ったら、偶然、姫の誕生日だったんじゃないの？ 外国人たちがたくさん訪れるから、目眩ましにもなるしさ。失敗したら、全責任を、参謀であるあいつに押しつけ、娘を思う王の親心を利用し、参謀をクビに追い込もうと企んだ……」

「……それって、結構、ムリがないか？」

「じゃあ、ケインはどう思ってるのさ？ 俺は、今言ったことくらいしか思い付かないぞ」

カイルは、パタンと、ベッドにフテ寝した。

「まだ、わからない……」

カイルは、への字眉のまま、口をひん曲げた。

「ああ！？ わかんねーだあ？ なんだよ、人の言うことに散々ケチつけておいて！」

「とりあえず、クレアに会いに行ってくる」

すつくと立ち上がったケインを、カイルは、あんぐりと口を開けて見上げた。

「会いにつて……今からか？」

「ああ」

カイルが起き上がって、まじまじとケインの顔を覗き込む。

「……夜這いか！？」

「違うよ！！ 誰が、そんなことするかっ！！」

カイルが、にんまりと笑った。

「そうかー、そうだよなー、お姫様よりは、身分的にはクレアの方が近いから、まだ可能性あるかも知れないもんなー。よし、ガンバレよー！」

にやにやしながら、カイルがケインの背を、ばんばん叩いた。

「バカ！ 俺は、ただ……ちょっと気になることがあったから、クレアに確かめに行くだけだよ！」

「そーか、そーか、クレアの気持ちを確かめに……。だけど、彼女は、俺に気があるかも知れないぞ？ 悪いなー、ケイン」

「……あのな、どこをどーしたら、クレアがお前に気があるってんだ？ いつも『最低！』
って怒ってんのに」

「バカだなあ、お前、ホント女心がわかってねーなあ。いやよ、いやも好きのうちって言うじゃないか。俺の今までの経験から言うと、あれは絶対、俺に惚れてるね。それか、惚れるね」

自信たっぷりのカイルに呆れてから、ケインは宿舎を出て行った。

外国特使たちの滞在期間は、約五日間。既に、二日が過ぎようとしていた。

この三日中に、なんとかしなければならぬ。

真相は、実は、カイルが上げた通り、参謀か公爵が黒幕なのかも知れないとは、ケインも思った。

だが、彼には、どうしても、引っかかっていることがあったのだ。

ひとつは、王女誘拐を仄めかす脅迫状。

そして、もうひとつは、空間の割れ目から覗いた『人の手』――。

ケインは、クレアの泊まっている宿へと、次第に足を速めていった。

王子たちVS賊

「午後は、予定ですと、パルストウル神殿の見学ですね」

アストーレ城に滞在中の五カ国——ガストー、ライミア、クリミア、マスカーナ、デロスの王子たちと、アストーレ第三王女、王女のお気に入り侍女たち二人を交えた朝食の最中の、クリミア王女の発言であった。

ケインは、ガストー公国公子タリスを見張るため、小姓の成りをして部屋の間立に立っている。

ライミア担当のカイルもいれば、他国担当の警備兵たちも小姓の格好で、料理を運んだり、茶を注いで回ったりしていた。

「アストーレの姫君方は、皆ご幼少の頃、巫女の修行のため何年か、そちらでお過ごしになられたのだとお聞きます。アイリス殿下も、そうだったのですか？」

マスカーナの王子が尋ねた。

「ええ。わたくしも、三年間、祭司長様方と過ごしました」

王女が、小さな声で答えた。

「なにかと歴史のある神殿ですからね。はるか遠方から、わざわざこちらの祭司長殿の説法をお聞きしたいとやってくる王族もいると聞きます。」

私は、実はそれほど宗教には興味があるわけではないのですが、有名な神殿とあらば、是非拝見したいものです」

南国ライミアの、浅黒い肌をした、利発そうな王子が、淡々と言った。

「どんなところなのか、楽しみだなあ」

「殿下、是非ご案内してください」

王子たちが口々に言うが、王女は、微かに微笑ただけで、うつむいている。

「……なんだか、元気がありませんね」

食後、小姓たちが片付けをしているところ、マスカーナ王子が、バルコニーで憂鬱そうに外を眺めている王女に、近づく。

「無理ありませんよ。誕生パーティーの当日、変な輩に誘拐されかけてしまったのですものね。でも、そんな風に塞いでいたら、かえってお体によくありませんよ。賊のことは警備隊にお任せして、皆で外に出てみませんか？ 気分転換にもなると思いますよ」

「……ええ、でも……わたくし……」

王子たちには、前日の脅迫状のことまでは知らされていなかった。王女は、一日で、随分とやつれた様子である。

しかし、王女とお近付きになりたい、または、国の使命を背負ってきた王子たちにとっては、本日の神殿行きはチャンスのひとつである。何とか、王女には、行く気になってもらわないとならなかった。

「ご心配でしたら、護衛のものを増やして行かれてはいかがです？ 武道には、私も少々心得がありますし、心配せずとも、大丈夫ですよ」

そう言って現れたのは、デロス王子だった。やりとりの聞こえたケインは、片付けをしながら、それらの様子を垣間見ている。

デロス王子は、そのような発言をするに値する、背も高く、がっしりとした体格の持ち主だった。

顔の方は、お世辞にも整っていると言いは難かったが、人の良さそうな感じが現れている。

ケインは、このような典型的な武人タイプの間人は、嫌いじゃなかった。

先ほどから王女と一緒にいるマスカーナ王子の方は、まあまあハンサムといってよかったが、少し細すぎる傾向があった。

この二国は、魔道士も同行しているという。

クレアの情報によると、二国とも、それほど魔道に長けているというわけではないようだが、油断は禁物だとケインは思う。

「行きたくないのなら、無理に行かなくてもいいんじゃないの？

僕たちだけで見学すれば」

ケイン担当のガストー公子タリスが言った。

緩くウェーブのかかった金色の髪を肩に垂らし、バルコニーを背にもたれかかっているが、その青い瞳は心ここに在らずといったところだ。

改めて見ると、確かに彼は、この五人の王子たちの中では、とりわけて美青年であったが、昨日の話通り、やる気は全然なさそうである。

「護衛のものをぞろぞろと連れて歩かなくてはならないほど、この国は治安が悪いのか？」

ライミア王子が、少しうんざりしたような顔を、警備隊長に向ける。

隊長は、丁重にもてなしたいという王の心遣いである、というようになことを言っなだて、王子を宥めていた。

午後は、予定通り神殿に行くこととなった。

すっかり気が滅入ってしまった王女を、王も心配し、国王親衛隊からも人員を割いて、警護に加わえ、外出を勧めたのだった。

「うわー、随分綺麗なところなあ。城下町を抜けてすぐだったいのに、もうこんなに緑があるのかあ。

爺や、見てみなよ！ 今、川で魚が飛び跳ねたよ！

いいなあ、アストーレは。僕たちの国なんて、ごつごつした岩肌に囲まれているし、川は少ないし……ここは、いいなあ！」

「ええ、ええ、そうでしょうとも！ ですから、王女殿下とご結婚なされば……」

「今度は従姉妹のタリアと来たいなあ！」

「これ、坊ボン！ そうではなくて……！」

ガストー公子の暢のんき気な声と、家臣の声が、馬車の中から聞こえてくる。

王子たちを乗せた六台の馬車は、アストーレの親衛隊に守られな

がら、ゆつくりと進んでいる。

城下町を抜けた辺りからしばらくして、田園風景が目の前に広がる。ガストー公子タリスの言う通り、長閑な景色の所であった。

ところどころに、民家も見える。

鍛冶屋のいた湖とは反対方向だが、こちらの道の方が、多少は人の手が入って、整えられていた。

間もなく、広い草原へ出て、休憩となった。

警備隊や小姓もウマから降り、草の上に座ったり、持参した水を飲んだりしている。

王女が、馬車から降りた。

薄いクリーム色の、簡素なドレスを着ていた。

王女も各国の王子たちも、城の中での格好と違い、皆、軽装であった。

まだ若い侍女たちが、花を採ってきて、冠を作り、王女の頭上に乗せる。

王女も、城にいた時よりは気が紛れて来たのか、侍女に花冠の作り方を教わったりしているうちに、時々笑顔をのぞかせるようになっていた。

マスカーナとデロス王子の二人が、特使たちを伴ってそこへ集まり、称賛する。

その後方では、ライミア王子と特使が、「あそこに見える鉾山は、もし値を付けるとすると、いくらぐらいだろうか」などと話していた。彼は、王女には興味がなく、アストーレの土地に興味があるようである。

クリミアム王子と特使たちは、他の山々を眺め、風景を楽しんでいた。

ガストーの公子は、王女や王子たちからは離れ、草の上に仰向けになり、昼寝をしている。

白髪の、家臣である例の爺やが、またしても、それを窺^{たしな}めていた。アストーレ王女に興味があるのは、マスカーナとデロスの王子た

ちであるのは、一目瞭然であつた。

「どうやら、姫の婚約者は、あの二人のどっちかに決まりそうだな」
小姓の姿のカイルが、同じく小姓姿のケインのところへ、やってきた。

二人に限らず、小姓は、白い生成りのフード付きマントを身に着けていて、頭からフードを被っているので、顔はわかりにくい。

「ああ、そうだろうな」

「お前、いいのかよ？ お茶会でも、あのお姫さん、お前のこと、ちらちら見てたぞ？」

ケインは意外な表情で、カイルを見た。

「姫が？ 俺のことを……？ ……何で？」

「何でって、お前……ホントに気付かなかったのかよ？」

カイルも意外そうな顔になった。

「からかうなよ。傭兵と王女なんて、だいいち、不釣り合いだろう？
相手が悪いぜ」

ケインが苦笑する。

カイルが、フツとわらつた。

「そうだな。お前はクレアにしたんだもんな。そう言えば、昨日の夜、あれからどうした？ こいつ、白状しろよー！」

カイルがケインの頭を抱え込む。

「違うって言ってるだろ。クレアには、城の女官を頼みに行っただけだよ！」

パツと、カイルの手が放れた。

「何っ！？ お前、この大事な時に、城の中でまでイチャつこうってのかー！？ 不謹慎だぞー！」

「だから、違うって！ だいたい、お前に不謹慎だなんて、言われる筋合いがないぞ！」

くだらないやり取りをしているうちに、休憩時間は終わる。

そこから神殿は、もう目と鼻の先であつた。

王族、貴族以外は、神殿は立ち入り禁止であったため、王女や王子、王女の侍女と王子達の家臣、親衛隊の護衛などが見物に行き、小姓や、警備員の数人は、外で待つ。

「これが、パルストウル神殿か……」

ケインは、ウマに餌をやりながら、建物を見上げていた。

三角の、青いのがった屋根を空に向かって伸びやかしている。建物を、いくつもの太い支柱が支えていて、どっしりとした、丸く囲む造りになっていた。

先進国の王族は、大抵、宗教と結びついている。王族に生まれたからには、帝王学、国政の勉強などと同時に、必ず、聖人や巫女の修行を受けるのだ。

それでこそ、王や王妃になった時、神からの神託に沿った正しい判断が出来るという考えから来ていた。

なので、王族は、生まれつき魔力の高いものが多く、それは神から授かった能力とされ、決して悪用することのないよう、白魔法しか選択は許されていない。

魔力とは、何も、『魔物の力』という悪い意味合いはない。

詳しい原理が解明されていないこの世界では、あくまでも、神秘的な力とされ、人々の憧れでもあった。

王族とは、異なる方法に魔力をつかっているのが魔道士だった。

この世の、非物理的な事柄の研究に勤しむのが、彼らの仕事である。

その研究の成果は、『魔道士の塔』と呼ばれる組織が管理し、そこから『魔道士協会』へ情報が行き、今でも、呪文や占いの道具などが作られ、増え続けているのだという。

騎士や、兵士、或いは傭兵などという、王族とは遠い身分の者でさえ、魔道士協会で購入したというお守りを、肌身離さず持ち歩いている迷信深い者や、毎晩神に祈りを捧げている信仰心熱い者もいた。

いつ命を落とすかもわからないこのような稼業では、おかしくはなかった。

ケインは、そのような神頼みには興味がなかったのだが。
(いつでも信じられるのは自分の腕だけ。それで命を落とすようなことがあっても、そこまでの人間だったのだから、しょうがない、と諦めるさ)

雲一つない晴れ渡った空に浮かぶ神殿の屋根を見つめ、そんなことを考えているうちに、王女や王子たちが戻ってくる。

小姓たちはウマをつないでいた紐を解き、城に戻る準備に取りかかる。

その帰路でのことだった。

突然、ウマの嘶いみなく声がしたかと思うと、いきなり一台の馬車が列からはみ出し、暴走した！

「なんだ！？ どうしたんだ！？」

王子や特使たちは、馬車から身を乗り出し、呆気にとられて見ていた。

親衛隊、警備隊たちが叫んだ。

「いかん！ あれは、王女殿下の馬車だ！ 止めなくては！」

王女を乗せた馬車は、離れたところで止まった。

その途端に、ウマに乗った二〇人近くの男たちが、方々から集まって来たのだった！

「動くな！ 動くと、姫の命はないぞ！」

賊の頭かしらのような大柄な男が、幅のある段平を持って、声を張り上げた。

「きゃああー！！」

数人が、馬車から王女と女官たちを引きずり出し、捕えている。

「なんと……！ 御者が、いつの間にかニセ者とすり替わっていたのか！？」

アストーレの騎士たちが、叫ぶ。

「何者だ！ 姫をお放し致せ！」

護衛隊長も、進み出る。他の隊員たちも、ウマの上で剣を構えた。
「ふん、剣なら、こっちにもある」

馬上の賊たちも、それぞれ剣を構えたが、人数では、親衛隊を加わえた警備隊の方が勝っている。だが、それでも賊たちの表情には、焦りはない。

「ふっ、やってみな！」

頭の合図で、賊たちが横一列に並び、王女と人質の間の壁となる。警備の騎士たちが、王子たちの護衛の者だけを残して、一斉に攻め込んでいった！

パキン……！

賊と交えた親衛隊である警備の騎士たちの剣は、いとも簡単に折れてしまった！

「ば、馬鹿な！？ なんとということだ……！ 剣が折れるなど……！」

騎士たちは、一旦退いた。

賊の高笑いが響く。

「そんなもろい剣では、俺たちの剣にはかなわないぞ！」

賊たちは、皆、余裕の笑みを浮かべている。

「あーっ！ あいつら、俺の剣を奪ったやつらだ！」

カイルが叫ぶ。

「それに、あっちの端のヤツらは、パーティーで王女を誘拐したヤツだぞ！」

それは、カイルもケインも、確かに見覚えのある者たちであった！

彼等の身なりは、バラバラであった。

上半身が裸の上に、黒い革でできた太いベルトのようなものを斜め掛けしている者や、部分的に防具を付けているもの、モヒカン刈り、スキンヘッドなどの典型的な野盗の集団がいれば、一見して町

民のような普段着ではあるが、身体が大きく、人相も悪い、カイルの見覚えのある者たちもいた。

まるで、寄せ集めの盗賊団である。

「てめえら、剣は盗むわ、人質は取るわ、やることが汚ねえぞ！」
カイルが、フードを降ろし、進みながら叫んだ。

「おや、お前さんは、あの時の……？　そうかい、城に使える小姓だったのか。あん時とは、えらくカッコが違うんで、すぐには思い出せなかったぜ」

賊たちが、ゲラゲラ笑い声を上げ、からかうように言った。

「剣がだめなら、これはどうだ！　行け！　モルディアーノ！」
ふいをつかれて一瞬ひやつとした賊たちが、声のした方を慌てて探す。

その声の持ち主は、マスカーナ王子であった。

王子の隣にいる魔道士が、なにやらぶつぶつと呪文を唱えている。
しばらくすると、魔道士の手のひらから、光で出来た球が現れた！

王子が「行け！」と言ってから、数分が経っている。

魔道士の光の球は、賊目がけて一直線に飛んでいった！

だが、それほどのスピードはなかった。

「へっ！　効かねえよ！」

賊のひとりが段平で受けると、球は剣に弾かれ、消えてなくなった。

もう一人の魔道使いであるデロス王国の魔道士も、攻撃を始めた。
火の球、光の球、電光——いろいろな技が発射されたが、いずれも剣に吸い取られ、賊たちにダメージを与えるには至らなかった。

馬車から、首だけ出して、様子を見ていたがストー公子は、口をぽかんと開けている。

彼は、ただの傍観者であった。

（あの剣は、町の武器屋から盗まれたものか？　だが、あそこには、あんなふうに魔力

を吸収する剣なんて置いてあるわけではない。あれは、魔道士の手が加えられているんだ！」

ケインは、賊たちと魔道士たちの戦況を、冷静な目で観察し、他に魔道士がいないか、気配を探っていた。

「ええい！ 皆、何をやっているのだ！ 全然効かないではないか！ 私が行く！」

デロス王子が馬車から降り立ち、剣を抜いた。

「お待ち下さい、王子！ 危険です！」

「うるさい！ 下がっている！」

お付きの者たちは、大柄な王子の体に巻き付き、皆必死で止めたのだが、彼の丸太のような腕が一振りしただけで、皆、吹き飛ばされてしまった。

「ほう」賊たちは、ちょっとは骨のあるヤツが出て来た、とばかりに、面白そうな顔をした。

「面白い。やってみろよ！」

モヒカン刈りの体格の良い賊がひとり、王子の前に出る。

「貴様ら、私の剣を受けてみるがいい！」

デロス王子が、その体格に見合った大剣を、勢い良く振り下ろした！

ガキッ！

賊は、大柄な王子の大剣を、たいして力を入れずに受け止めると、反撃に移った！

王子の剣は、割れることこそなかったが、かなり押され、戦いは明らかに賊のペースだった。

「どうした、王子様よ？ さっきの自信はどこへ行ったんだい？」

モヒカン男が、ヘラヘラ笑う。

「おお、あの殿下が、押されているとは……！」
デロス王国の特使たちは、驚いていた。

「あのお方は、王子というご身分ではあっても、毎年、国で行われる剣術大会で、常に優勝なさっているお方！　それが、あんな賊ひとりごときに……！」

それは、ケインにも聞こえた。彼から見ても、王子は鍛錬された剣士であり、対して、賊は、武術の基礎もあまり身に付いてはいないのがわかる。

それが、なぜ、優勢であるのか？

カイルが、ケインを振り返る。

何かがおかしいと、カイルも気付いていることが、ケインにも伝わった。引き続き、戦況を見守る。

とうとう、デロス王子の剣は弾き飛ばされてしまい、どすつと尻餅をついた。

「……な、なぜだ！　なぜ、私の剣術が通じない！？　」

「へっへっ、実力の差だな。王子さんよ」

賊が剣の背で自分の肩を叩きながら、余裕の笑いを浮かべている。

「もういい。貴様が勝ったのだ。とどめを刺せ！」

王子が悔しそうに、上目遣いで賊を見る。

（おいおい、これって、そういう問題じゃないだろう！？　）

ケインもカイルも、目を見開く。

デロスの側近たちも慌てふためいて、駆け寄った。

「では、仰せの通りに。ついでに、家来ごとやってやるか」

家臣たちがデロス王子を取り囲むのを見下ろしながら、モヒカン男が、舌舐めずりをする。

「待った！！　」

声のした方を皆が振り向くと、今度はクリミアム王子が剣を手に、馬車から降りてきたのだった。

「数々の非道、これ以上許すわけにはいかん！　武器を捨て、姫と人質をこちらに返してもらおうか！」

クリミアムの王子は目立たなかったもので、ケインもカイルも、あまり印象になかった。

背はそれほど高くはなく、細身の身体に、髪は栗色の巻き毛で、ちよつと神経質そうな顔をしていた。

彼が、武道などをやってはいないことは、ケインたちには、すぐにわかった。

あんまり強くは見えない王子ではあったが、あのデロス王子がやられた後だというのに、勇敢にも賊に向かっていく心意気は立派に思えた。

だが、これ以上、王子たちや王女を危険にさらすわけにはいかないと、ケインは思った。

「ほお、今度も王子様かい？ 遠慮しないで、かかってきな！」

そう、賊の目が怪しく瞬く。

クリミアム王子は、捕われて、身動きが出来ずにいる王女に、微笑んだ。

賊に後ろから抱えられている王女も女官たちも、恐怖で顔は青ざめている。

「心配しないで、アイリス王女殿下。僕が、こやつらを退治してみせます」

「随分、余裕じゃねえか、王子様よ？」

賊の言葉に、クリミアム王子が振り返り、剣を構えた。

その構え方を見て、ケインもカイルも、彼が、剣術ド素人であるのを確信した。

事件の犯人

「待て！」

剣を構えて見合っていた賊とクリミアム王子が、声のした方を振り向く。

生成りのフードを被った小姓がウマから降り、やってくるのが目に留まった。

「俺が相手になる」

賊たちが、じろじろと見回す。近くまで来ると、彼が意外に背丈があることもわかった。

「なんだ、小姓のガキじゃねえか。俺たちも、なめられたもんだぜ。なあ？」

「こんなに圧倒的な力を見せ付けられても、まだわからんとはな」

賊がゲラゲラと笑うが、小姓はまったく動じずに、クリミアム王子の横に行くと、静かに言った。

「殿下、危ないので、お下がりにください」

「い、いや、だけど……」

クリミアム王子は、なにやら口の中でもごもご言っていたが、おとなしく、自分の馬車の近くまで下がっていった。

「さてと、お坊ちゃん、何をして遊ぶのかなあ？」

賊たちがふざけて笑っている。

小姓は、腰に差していた剣を、ゆっくり抜いた。

「ほう、ロング・ソードなんかで、俺たちの剣にかなうとも思っ
てのか？」

賊たちは、また笑い出した。

「これは、ただのロング・ソードなんかじゃない」

言い終わると同時に、彼は、手前で笑っていた賊の剣を、弾き飛ばした。

その時、緑色の火花が散るのを、見逃さなかった！

「やはりな。お前らの剣には、魔法がかけられている！ だから、魔法攻撃は効かないし、剣は異常に硬くなっていったってわけだ！」
小姓は、確かめたかったことが確認出来ると、小姓の生成りのフード付きマントを外した。

風になびいた栗色の髪、青い大きな、少し目の端の上がった瞳、まだどこか幼さのある顔立ちではあったが、鍛えられ、引き締まった筋肉質の身体が、衣服の上からでもわかる。

「……あのお方は……！」

王女の瞳が見開き、小さく呟く。

「こ、こいつ……！ やっちまえ！」

賊たちは、もうにやついてはいなかった。

皆、段平やロング・ブレードを振り翳し、小姓だった者——ケインに向かって突進していったのだった！

数人もの剣を、左手のマスター・ソードで受け止める。

緑の火花が散る。

今度は、そこにいる者たちにも、はっきりとわかった。

ケインは、受け止めた数人の剣を、左手だけのマスター・ソードで支えると、右拳を彼等の腹に食い込ませ、蹴りを入れた。

いつもの戦法と同じく、剣はあくまで防御のため、攻撃は素手であつた。

むやみに人を斬りつけたくはないというのと、今回は、王女や女官のいる前であつたので、残酷なシーンがあつてはいけないのだ。

ケインは、楽々と、ひとりずつの剣を弾き飛ばしていった。

「な、なんで、魔力のかかった俺たちの剣が、効かないんだ！？」

中には、青くなって、そう叫び出す者もいた。

「言葉を返すようだが、実力の差だろ？」と、難なく剣を弾き続ける。

あつと言う間に、盗賊たちの剣は、全部吹っ飛び、地面に突き刺さるか、転がっているかであつた。

再び剣を手にしようと走り出す者もいたが——

「おっと、こいつはお預けだぜ。盗品は、持ち主に返さなくちゃな」という声がし、どかつ！と腹を蹴られ、吹っ飛んでいく。カイルであった。

彼は、ケインの弾いた剣を、拾い集めていたのだった。

ケインが親指を立ててみせると、カイルはウインクで返した。

二人の連携プレーで、剣はそつなく回収出来、盗賊たちは武器を持つ者はいなかった。

そこで、ケインが、何を思ったか、マスター・ソードを鞘に納める。

「バカが！ 唯一俺たちを捕まえられようというこの状況で、剣をしまうとは、気でも狂ったか！？」

ハゲ頭の賊が、そう喚く。

ケインは、けろつとした顔を向けた。

「別に狂っちゃいないさ。お前らなんか、素手で充分ってことさ！」

言うと同時に、ケインは、盗賊たちを次々殴り倒し、蹴り飛ばしていった。

その頃には、もう護衛の騎士たちが、王女や女官たちを助け出し、逃げ惑う賊どもを捕えにかかっていた。

「……そ、そんな……！ 話が違うじゃねえか……！」

賊のひとりが思わずそう呟くのを、ケインは聞き逃さなかった。

そして、それがあある方向を無意識のうちに見ていたのを、目で追うと……

（……そうか……！ そういうわけだったのか……！）

彼には、事件の黒幕が誰であったのか、大方の見当が付いたのであった！

「話は聞いたぞ！ よくやった、ランドール！」

宿舎に戻ると、ダルシウム將軍が顔をほころばせて、やってきた。「うちの親衛隊も齒が立たなかった相手を、いとも簡単に倒してし

まったそうではないか！

賊も、皆捕えたことだし、陛下も非常に感心なさっていて、お前を、姫の直属の護衛にとも、考えておられるようだぞ！」

「すげえじゃねえか、ケイン！」

カイルも嬉しそうに、ケインの背中をどついた。ケインは、将軍に敬礼はしたが、特に表情は変えなかった。

そこへ、捕まえられた賊たちが並ばされ、跪かされる。

「昨日のように、逃げられてはいかんからな。今から尋問を始める」
ダルシウム将軍の尋問に、彼等は観念したのか、ぶすつとしながらも、すらすら答えていった。

身代金目当てで、王女誘拐を企てたところ、パーティーでの誘拐に失敗したので、そのまま誘拐のチャンスを狙っていた、ということだった。

「うそつけ！ お前ら、町でパレードが行われていた時、武器屋を襲ってただろ！」

それに、そいつとそいつ、見覚えがあるぞ！ 確か、俺の剣を盗った時いたよな？

お前とお前も、パーティーの時に、庭で俺が捕まえた奴等じゃないか！

ちゃんと覚えてるんだからな！ 脱走なんかして手こずらせやがって。

お前らだけじゃ実行できるわけないんだ、魔法の使い手なしにはな！

しらばっくれてもだめだぜ！ 吐けよ、誰なんだよ、黒幕は？
てめえらと一緒にいた魔道士様は、一体どこのどいつなんだ！？
さっさと言わねえか！」

ダルシウム将軍を差し置いて、カイルが、近くにいた賊のひとりを締め上げ、強く揺さぶった。

「う、うう……、さ、さん……」男が、苦しそうに呻く。

「ああ？ なんだよ、聞こえねえよ！」

「……お前が掴んでるからだろーが」隣で、ケインがしょうもなさそうに、カイルの肩を叩くと、カイルは、少し手を緩めた。

「……さ、参謀の……ダミ……ア……ス……」

呻き声は、そう、はっきりと聞き取れた。

「本当かつ!? 脅迫状も、あいつか!?!」

男は微かに頷いた。

カイルが、手を離す。

「な、なんと……、本当に、ダミアス殿とは……!」

將軍は、呆然としていた。

「あの野郎……! やっぱり、しらばっくれてやがったな!」

カイルが憎々し気に言った。

賊どもは、親衛隊に引っ立てられ、牢に連れていかれた。

「……黒幕がダミアス殿とは……。陛下には、何と申し上げてよいものか……」

ダルシウムは、その場で考え込んでいた。

「將軍、是非、聞いて頂きたいお願いがあります」

ダルシウムは、気の重そうな顔のまま、ケインを見た。

「この事件を、もうちょっと調べてみたいので、陛下に報告するのは、もう少し待って頂けませんか?」

ダルシウムの目が見開かれる。

「な、なんと!? ……どういふことかね!?!」

「……今は言えません。まだ確信したわけではありませんので」

ダルシウムは、しばらくケインの顔をじっと見ていた。

確信してはいないというものの、その瞳から、事件を解決する何かを見付けたような、自信を見出した。

「……わかった。おぬしに賭けてみよう!」

ケインは、そう言ったダルシウムに、深々と、頭を下げた。

「いいのか? ケイン。お姫様の護衛、断ち切ってさー。お近付きになれるチャンスだったのに」

ダルシウム將軍に連れられ、国王と謁見室で話をした後、アストーレ城のロビーを、ケインとカイルは並んで歩いていた。

「別に、お近付きになったって……」

ケインが言いかけたその時、

「お待ち下さい！ ケイン様！」

（ケ、ケイン様??）

聞き慣れない呼び方に、驚いて振り返ると、アストーレ王女が、淡いオレンジ色のドレスの裾を持ち上げながら、彼等の後を、ふわふわと小走りして追ってきたのだった。

目を丸くしているケインの前まで行くと、王女は、必死な面持ちで、彼を見上げた。

「今、父王から聞きました。……なぜです？ ……なぜ、わたくしの護衛を、お引き受けして下さらないのですか!？」

「私には、事件を解決する使命が残されているのです」ケインは、穏やかに答えた。

「わたくしは……わたくしは、どうなるのです!？ ……守っては頂けないのですか？」

王女は、ほとんど哀願していた。

ケインは、心配させないよう微笑んでみせた。

「殿下は、多分、もう安全です。私が事件を解決致しますから、どうか、今晚からは、安心して、ごゆっくりお休みください」

ケインは頭を下げると、王女に背を向け、歩き出した。

「……やはり、わたくしのことが、お気に召さないのでですね。……だから、護衛も引き受けてくださらないんだわ……」

王女の声が、だんだんと涙声に変わっていくので、ケインが振り返ると、王女は、しくしくと、両手で顔を覆って、啜り泣いていたのだった。

（えっ!？ なっ、なんで??）

ケインは戸惑い、どうしたものかとカイルの方を見ると、彼は、目配せして、そそくさと消えていった。

（な、なんだ、あいつ、気を利かせてるつもりか……？ そんなことしなくても……）

小柄な王女のか細い肩が、震えていた。

ケインが、なだめるように応える。

「……何をおっしゃるんです。……気に入らないなんて……、そんなじゃありませんよ」

「いいえ、いいえ！ ……わたくしといると、いつも、悪いことばかり起きるのかわ！

……だから、あなたは、わたくしの側にいたくないのでしょうか？」

王女は、余計に泣き出した。

（うわー！ なんで、そうなるんだ！？）

ケインは、どうしていいかわからず、おろおろしていたが、やつのことで口を開いた。

「悪いことばかり起きるから、危険だから嫌だなんて、……そんなことはありません。」

ただ、……俺は、ただの旅の傭兵なのです。そんな者が、殿下のような方のお側にいては、よくないのです。

殿下のお側は、アストーレの、ちゃんとした身分の方が、お守りするべきなのですよ」

王女は、強く、首を横に振った。

「そんなこと、ありませんわ！ 二度も、わたくしを賊の手から救ってくださいましたし、あなたは、アストーレの警備隊も親衛隊もかなわなかったほどの敵を、あんなにあっさりと倒してしまわれたわ！ それだけで、充分、誇らしいお方です！

……お願いです！ わたくしの護衛をして頂けませんか？」

その必死さは、なんだかケインにも充分伝わった。

彼は、王女の髪と同じ栗色の大きな瞳を見つめると、やさしく微笑んでみせた。

「では、この事件が片付きましたら……それからでも、よろしいで

すか？」

王女の顔が、みるみる明るくなっていった。

「……ええ！ ええ！ ……お願いいたします！」

その笑顔に安心したケインは、軽く会釈をして、その場を去ろうとしたが、

ふと思い直した。

「お部屋まで、お送りしましょう」

王女は、涙を拭うと、「はい」と、嬉しそうに、小さく答えた。濡れていた頬には、赤みが差していた。

ケインは、ふと、自分に妹がいたら、こんな感じだろうかと考えた。王女を可愛らしくも思えた。

それと、どうも王女は、なぜかケインが彼女を嫌っているように思っているようではなかったのだ、そう思わせないためにも、出来るだけやさしく振る舞おうとしたのだった。

王女を送りかけて間もなく、王女を探していた女官たちが追いついたが、ケインも、そのまま部屋の前まで送っていった。

にこやかに心がけてお休みの言葉を言い、王女の部屋のドアが閉まると、彼は、ガラッと表情を変え、気を引き締める。

その足で向かったのは、女官の休憩室であった。

「ケイン」

彼に気付いた、女官服のクレアが出て来る。

「クレア、一緒に来てくれないか」

前日、ケインがクレアのところに訪れた時に申し合わせていたように、クレアもわかっているというように頷くと、二人は足早に、廊下を歩いて行った。

ケインのポケットには、先ほど国王に頼んで書いてもらった委任状が入っている。

事件の捜査で、自由に城の中を出入り出来るように、であった。それは、ダルシウムの口添えもあったが、王女誘拐を二度に渡っ

て防いだ彼の功績も大きい。

ケインとクレアは、裏門から外に出て、暗く、細い道を通って行った。教わったその道は、牢屋の塔へとつながっている。

その牢には、参謀であるあの魔道士がとらえられているのだ。

昨夜、クレアに会いに行ったのは、城の女官を頼むことと、もう一つ――

空間から、盗賊を引っ張っていたという手――

これを見たのは、彼女だけだった。

ケインは、昨夜、将軍が参謀の腕を捕えた時、彼の手が袖口から覗いたのを見て、そのことを思い出したのだった。

『あの時の手は、ほとんど骨と皮だけのような、細くて、かなりの年の人のような手だったわ。中指辺りに、大きな緑色の石のついた指輪をしていたわ』

昨夜、彼女は、そう言った。

それは、ケインの見た、彼の手とは違っていたのだった。

参謀の手は、そこまで年寄り臭くはなく、両手とも、そのような指輪は、嵌めてはいなかった。

牢の入り口に着き、牢番のいる管理室の窓口を覗くと、番人の男が、机に突っ伏して、よだれを垂らし、眠りこけているのが見える。「なんだ、不謹慎だなあ。おい、おじさん、起きろよ」ケインは、開いていたドアから部屋の中に入り、男の身体を揺すった。

「これは……、眠り薬を飲まされているわ！」

クレアが、別のテーブルの上にある、酒の入った器の匂いを嗅いで、指差した。

それを聞いたケインは、とっさに男のポケットや、机の周りに鍵がないかを確認するが、どこにもない。

「やっぱり、盗られてる。誰か、忍び込んだヤツがいるんだ。まさか、真犯人が、参謀を狙って……！」

「……急ぎましょう！」

二人は頷き合うと、管理室から廊下に出た。

暗い廊下を、まだいくらも行かないうちに、「ケイン、見て！」と、クレアが声を上げる。

仮眠室の扉が開き、覗くと、ベッドから、人が落ちたまま眠っていた。

「さっきと同じ香り……、同じ睡眠薬を飲まされているわ……！」
クレアが、床に転がっている器を調べて、言った。

そのすぐ近くに監房の扉があるが、また人が倒れていた。そして、やはり、眠っている。

扉には、鍵がかかっていなかった。

そこから先は、罪人を閉じ込めている牢が並んでいる。

ケインが扉を開け、見渡してから、クレアを手招きした。

間隔を空けてつり下げられたランプが並び、ぼうつとした光を灯している。

回廊には、同じように酔いつぶれた人の姿が、今にも消え入りそうなランプの灯りに、照らし出されていた。

死体ではないとわかってはいるものの、見ていて、あまり気持ちのいいものではなかった。

「……なんか、俺たちの行く先々に、ヒトが転がってないか？ 鍵が開いててくれて助かるけど」

「不気味ね……」

ケインとクレアは、ぐうぐうといびきをかいている『マグロ』をよけながら、注意深く、監房の中を覗いていった。

檻の中では、髪の毛や髭がぼうぼうに伸びた罪人たちが、横になつて、じっと動かない。

時折、その死んだような目が、ギロッとこちらを向くが、何も言わない。

ケインのすぐ後ろを歩いていたクレアが、悲鳴を上げた。檻の中から手を伸ばし、彼女の長いスカートの裾を掴んで放さない者がいたのだ。

ケインが剣の柄で振り払い、クレアが檻から離れると、罪人の手は、何かを掴もうと伸ばし、探っている。

二人は、先を急いだ。

「……あそこに、人がいるわ……！」クレアが、前方を指さす。わかっていて、というように、ケインは頷くと、いつでも抜けるように、剣に手をかける。

「……誰だ、そこにいるのは」

前方の闇に向かって、ケインが言い放った。

それは、この牢の鍵を盗み、先に来ていた訪問者であり、おそらく、事件の首謀者の……！

ケインは、鋭く目を光らせ、クレアを庇うように、自分の更に後ろに下がらせた。

闇の中から、何者かが向かってくる気配がある。

だんだんと露あらわになってくる人の輪郭が、はっきりしてくると同時に、二人は、「あれ？」と、思った。

白っぽい姿が浮かび上がってくる。

女——それも、細身で、スタイルのいい……

「やっだー、久しぶり！ ケインにクレアじゃないのー！ こんなところで会うなんて、奇遇ねー！」

彼らのカンは、見事に外れた。

暗がりの中から現れたのは、意外にも、行方不明中のマリスだったのだ！

牢の中の魔道士

「……マリス……？ ホントに、マリスなのか……！？」

目の前に現れた女は、貴族の姫君たちの着る、ふくらんだドレスとは違い、身体のラインがくつきりと現れ、裾が床まで広がった、白い質素な、サンドレスのような、肩を露出した姿であった。

会いたいと思っていた彼女だったが、意外な登場の仕方、ケインもクレアも、すっかり再会を喜ぶタイミングを外してしまった。

「他に、誰に見えるってのよ。……あ、そっか、あなたたちには、まだ見せたことなかったんだったわね。こういうのを着れば、あたしもまんざらでもないでしょう？」

マリスは、得意になって、片腕を上げ、ポーズを取って、ウィンクしてみせた。

暗がりも手伝って、それは、とても一六歳の娘には見え、大人っぽく、色っぽくも映る。

ケインとクレアの目は、見開かれていた。

中でも、ケインは、自分の頬に赤みが差しているのを、暗がりのおかげで、二人に悟られずに済んだことに、安堵していた。

「マリスったら、そんな下着のような服なんか着て、男の人がいっぱいいるところをうろついてたの！？」

「……いいえ、それよりも、一体、今まで何やってたのか説明してよ！ みんな心配してたのよ！」

クレアは、泣きそうな、心配した声であった。

「そお？ 心配なんてしてくれてたの、クレアだけでしょ？」

マリスは、けろっとしている。

冷静に戻ったケインが、尋ねた。

「今までどうしていたかは後で聞くとして、マリス、お前、こんなところで何やってたんだ？ 牢番のオヤジたちを眠らせたのは、お前なのか？」

「そうよ」

あっさりと、彼女は答えた。

ゴロゴロと転がった『マグロ』の牢の番人たち——あの奇妙さは、彼女の仕業だと言われれば、なんだかケインには納得出来てしまった。

「『いつもご苦労サマ?』って、にっこり笑って、牢番たちにお酒注いで回ったの。」

眠り薬が入ってるとも知らずに、みんな喜んで飲んでくれたわ」

マリスがころころと笑う。

「あなたたちこそ、こんなところで何してるのよ」

「私たちは、捕われた参謀の牢を探しているの」

クレアは、王女誘拐未遂事件、脅迫状にインカの香の残り香、寄せ集めの盗賊団が武器ばかりを集め、カイルの魔法剣も盗られたが取り返せた、そして、今日起きた二度目の王女誘拐未遂事件……という、今までのあらましを、ざっと、マリスに伝えた。

「ふーん、変な事件ね。実は、あたしも、その参謀さんにご用があったりするのよね」

三人は、監房を一部屋一部屋通り過ぎながら、話を続けていた。

「あたしは、ちょっと遊んでから、アストーレの北側の森に行っていたの」

「あの例の、モンスターの噂のある?」ケインたちも調べた森である。

「そう。『あんたたちのご主人は、どこ?』って、獣人タイプのミドルモンスター締め上げたら、城だっていうから、城でちょうど女官を募集してたことだし、今日から女官になったとこのな。その格好だと、クレアも女官のバイトなのね? 城の中は広いから、管轄違うとなかなか会わないものね」

などと気楽に笑うマリスに、クレアが驚いた。

「ちょ、ちょっと待って。マリス、あなた、……モンスターの言葉がわかるの!?!」

マリスが笑い出す。

「まっさかぁ！ ミュミュよ。あの子が通訳してくれたの」
クレアが、今度はケインを見る。

「ああ、ミュミュたち妖精も、俺たちヒトからすれば妖怪変化の一種みたいなもんだからな。で、そのミュミュは、今は一緒じゃないのか？」

「あら、そっちと一緒になんじゃなかったの？」

三人は立ち止まって、顔を見合わせた。

「……ま、いいわ。いずれ、見付かるでしょう。……多分ね……」

マリスが、何か考えながら呟いた。

「それで、さっきの話だけど、マリス、なんで俺たちと別行動なんか取ったんだよ？ 途中で連絡くらいくれても」

マリスは、少し困ったように笑った。

「ごめんなさい。例の参謀って、もしかしたら、あたしの知ってるヤツかも知れないのよ。この町では、なるべく目立たないでいたかったの。でないと、そいつに逃げられちゃう可能性があったからね」
マリスは、そこで、足を止めた。

「あの奥の部屋に、参謀が閉じ込められているわ。あたしは、ここで待ってるから、ケイン、先に話を済ませてきて。何か聞きたいことがあるんでしょう？」

「それはそうと、よく参謀の独房知ってたな」

マリスは、笑った。

「かーんたんよ。色仕掛けで口割らせたのよ」

「また『武遊浮術』の『愛技』か」

顔をしかめているケインに、マリスはウィンクして笑ってみせた。
「そ。それも、『中級編』ね」

以前、ケインが仕掛けられたのよりもランクが上らしい。

（『初級編』は、可愛らしさを強調する技だったような……？
『中級編』っていうと、……それよりも、もっと……？）

牢番たちに、ベタベタしながら、酒を注ぐ姿を想像したケインは、

ムスツとした。

クレアは、何のことかわからず、二人を見ていた。

独房には、ケインがひとりで向かう。

マリスから預かった鍵を、鍵穴に差し込み、ゆつくりと回す。

「ダミアス殿、失礼致します」

扉を押し開けると、鉄格子の向こうは、まるで貴族の書斎を思わせるような、絨毯が敷き詰められていて、書き物机もあり、豪華なソファまであった。

牢獄とはいえ、参謀という位の高い人間は、丁重に扱われているのが伺える。

ソファで、じっと座っている魔道士の姿が見えた。

彼は、ゆつくり目を開けた。

「傭兵のケイン・ランドールです。少し、お話がしたくて参りました。アストーレ王からの、牢の中を行き来できる委任状も持っています。よろしいでしょうか？」

「……なぜ、ここへ……？」

表情のない顔のまま、ダミアスは、重い声を発した。

委任状を見せてから、ケインは語り始めた。

「今日、脅迫状の予告通り、王女殿下の誘拐事件が起きましたが、またしても、未遂に防ぐことが出来ました。

二〇人ほどの賊を現行犯で捕え、尋問しましたところ、奴等は首謀者の名前を吐きました。

「……あなたの名前です」

じっと見据えている、ケインの深い青い瞳を見つめてから、ダミアスは、静かに口を開いた。

「これで、私が犯人という、決定的な証拠が出来た、というわけか」
声には表情は現れていなかったが、ほんの少しだけ、笑っているようであった。

何かを諦めたような笑いである。

ケインは、微笑んでみせた。

「でも、なぜか、俺には、あなたは事件とは関係ない気がしてしょうがなかったのです」

ダミアスは、僅かに不思議そうな目になった。

「私の犯行を裏付ける証拠ばかりが揃っているというのに、……なぜまた……？」

「そこなんです。『あなたに不利な証拠ばかりが揃っている』ことに、俺は、逆に、『不自然さ』を感じたのです。

それなのに、あなたは、何の弁解もなさらずに、ここにこうしている。

……もしかして、誰かを庇っているのでは、ありませんか？」

魔道士の参謀は、じっとケインの目を見据えたままだった。

「俺にとって、二つ、引つかかることがあった。そのうちのひとつは、魔法剣のことです。クレア、入ってきてくれ」

呼びかけに答えて、クレアがおそろおそろ、ケインの後ろから現れる。

「この方を、『見て』くれ」

彼女はダミアスの前で、静かに目を閉じ、彼の波動を感じようと精神を集中させた。

ケインは、それを静かに見つめる。

見終わると、クレアが振り返った。

「あの時の魔道士は、この人じゃない気がするわ。それに、私の見た『手』とも違うみたい」

「よっしゃあ！ やっぱり、そうか！」

ケインは、軽くガッツポーズを決めると、ダミアスに振り返った。「やっぱり、あなたは、魔法剣を奪ってはいない上に、奴等の主人ではなかったのですね？」

真犯人の目星は、俺にはもうついています。あなたの無実を、俺が証明してみせます！ それまで、もう少し辛抱しててください」ケインとクレアが牢を去ろうとした時、参謀の声が後ろから追

かけた。

「公爵殿方は関係ない。あの方々は、ただ、私を面白く思っていないだけだ」

二人は、足を止めて、ダミアスを振り返った。

「……やはり、あなたは、あの方々を庇っていたのですね。なぜです？」

「……あの方々は、陛下のお従兄弟。私を追い出すために、今回のことを思い付いたのであれば、そのことを陛下にお伝えするわけにはいかないのだ。」

陛下は、気持ちの優しいお方。もし、御自分の身内が企んだことと知れば、心を痛めてしまうに違いない……」

それを聞いたクレアが、はっとなった。

「それで、もしかして、その計画にあえて乗って、……まさか、この国を出る決心までしていたのでは……？」

「……なるほど、そうだったのか。」

だけど、残念ながら、とうるか幸いというか、俺が真犯人だと目を付けているヤツは、公爵たちではないんだ。だから、安心してくれ」

参謀は、少し見開かれた目で、ケインを見た。

ケインは微笑むと、クレアと独房を出て行った。

「話は済んだ？」 部屋を出ると、離れて待っていたマリスが言った。

「ああ。次は、マリスの番だよ」

彼女は、レザー・ナックルを取り出し、手に装着し始めた。白いサンドレス姿には、似つかわしくない。

「……何してるんだ？ そんなものはめて」

彼女は、深呼吸してから、言った。

「今から、あいつをブチのめす！」

ケインとクレアは、慌てて彼女を取り押さえた！

「何でそんなことするんだよー！」

「そうよ、マリス！　いきなり、そんな野蛮なことやめて、せめて話し合って！」

マリスは二人を引きずりながら、独房へと一歩ずつ近付いていく。武遊浮術を極めた彼女を、力で止めることは、誰にも出来ない。「あいつとは、ちょっとした因縁があってね。モンスターも呼び出してることだし、ここで、一気にカタをつけてやるわ！」

「だったら、それは、もうちょっと待ってくれないか？　あと、二日……いや、一日でもいいから！　彼は、逃げたりしない。保証するよ！」

マリスの足が、ピタッと止まる。

「……絶対？」

ケインもクレアも、こくこく頷いた。

マリスは、腕を組んで、しばらく考えていたが、「いいわ。今は、ヴァルもないことだし、ま、いざとなれば、あいつは『サンダガー』にやらせるか。」

サンダガー飼い馴らすには、時々エサをあげないとね」

「お前は、『神』を餌付けしてんのか！？」

にこにこしながら、とんでもないことを言うムスメであった。

そして、ケインたちが、もう一カ所、寄りたかったところに着いた。先程捕えた盗賊団のいる牢屋である。

賊たちは、大きめの檻の部屋に二、三人ずつ入れられていた。

牢にブチ込まれているというのに、すーすーと気持ち良さそうに眠っている。

「おい、起きろ」

ケインは、檻の外から、彼等を見下ろした。目を開けた賊たちが、檻の向こう側を見る。

「ああっ、てめえはっ……！」

「あの時の、強え小姓……！」

「……小姓？」

賊たちの言うことを聞いて、ケインの後ろにいたマリスが、隣のクレアを見る。

「それは、お前ら一味を欺くための仮の姿。しかして、その実態は――

旅の傭兵『よろず屋ケイン』だったのさ！」

「……」

「……」

「……」

辺りは、静まり返っていた。

「ねえ、なんだか、あんまり強そうなネーミングじゃないわね？」

単に、働き者だってことが言いたいのかしら？」

そうマリスがクレアに耳打ちしているのが、ケインにも聞こえる。気を取り直して、ケインは続けた。

「さあ、オッサンたち、ホントのことを吐いてもらおうか。お前たちと手を組んだ魔道士は、一体誰なんだ？」

「だから、さっき言ったじゃねーか！」

「ダミアスだよ！ 何度聞けば気が済むんだよ！」 賊達が喚く。

「そんなことって、実は、他のヤツなんだろ？」

それでも、賊たちは、同じことを繰り返す言うだけだった。

それを、ある意味、満足したように見渡してから、ケインは言った。

「そうか。それにしては、お前たち、随分あっさり答えてくれたじゃないか。

黒幕を、そんなに簡単にバラしちゃって、怒られないもんなのかね？」

普通、『死んでも言うもんか！』とか言うもんだぜ？」

賊たちは、ぴたりと押し黙った。

「それに、『様』が抜けてるんじゃないか？ 相手は、王国の参謀殿なんだろう？ しかも、雇い主なのに、呼び捨てなんていけないな

あ」

にやにやして余裕のケインに対して、賊たちは、お互い顔を見合わせ、動揺が見えた。

「ケインが気になったことの二つ目って……」

「そう、こいつらの態度さ」

クレアに、ケインが肩をすくめてみせた。

「簡単に黒幕白状するわ、捕まっても、安心したようにぐーぐー寝てるわ。雇い主が参謀だとしたら、こんなに安心してられない。他の誰かに身の保証されてるの、バレバレだぜ」

クレアも納得した。

「あんたたち、早く吐いた方が、身のためよ」

いつの間にか、マリスが檻の鍵を開けて、中に入っていた。

「おい、マリス、……そんなところで、いったい……？」

ケインが、そう言い終わらないうちに、彼女は、いきなり、中の一人を捕まえ、ねじ伏せた！

賊は、叫び声を上げた。

「さあ、あんたたちを雇った魔道士の名前を吐きなさい！ 『ダミ

アス』なんて名前じゃないはずよ！」

マリスが、のしかかりながら、そいつの腕を抱え込む。

「い、いてえ！ 何すんだ、このアマ！」

「早く言わないと、この腕へし折るわよ」

彼女に腕を反対側に曲げられ、男は苦しそうに、呻き声を上げる。

「だから、参謀のダミアスだって……！ いててて……！」

檻の中の残りの二人が、マリスに襲いかかるが、あっさりと、殴り飛ばされ、壁に打ち付けられる。

ごきゅ！

鈍い音と同時に、絶叫が、牢屋中に響いた。

クレアが、思わず顔を伏せる。

「こ、こいつ……！ 俺の腕を折りやがった……！」

ケインが、慌てた。「お、おい、何もそこまで……！」

「なによ、腕の一本や二本。大の男が、それくらいで泣き声出さなんて、情けないわよ！」

マリスは、そいつを放り出すと、今度は、よろよろ立ち上がっていたモヒカン頭の足を、蹴って転ばせ、背に馬乗りになった。

男が叫ぶ。

白いドレス姿の女が、野盗にのしかかっている図などは、ナンセンスである。

残った一人は、恐怖のため、身動きも取れず、これ以上開かないほど目を見開いて、『それ』を見ているしかなかった。

「さあ、これが脅しじゃないって、わかったでしょ？ さっさと吐きなさい。」

参謀殿は、ダミアスなんて、ふざけた名前じゃないはずよ！『グスタフ』でしょ！？」

「……えっ！？ 今、なんて……？？」と、クレア。

「おい、マリス、……城の参謀の名前なら、ダミアスだぜ。『グスタフ』って誰だ？」

驚いたマリスが、二人を見る。

「『ダミアス』……！？ 『グスタフ』じゃないの！？」

ケインとクレアは、首を横に振った。

「なあゝんだ、ヒト違いか」

マリスは、あっさり、賊を放して立ち上がった。

「クレア、こいつら、治してやって。大丈夫よ、あたしが一緒についてあげるから」

クレアが、怯えながら檻の中に入っていく、負傷した賊たちを、白魔法で治療してやる。

「もともと、白状させた後は、こうしてあげるつもりだったのよ。ね？ やさしいでしょ？」

マリスは、ケインとクレアに微笑みかけた。クレアの顔は、引き攣っている。

「お前なあ、あんまりむちゃくちゃするなよ。それに、参謀が、お

前の探してるヤツかどうかくらい、ちゃんと確かめてから行動しろよ。

危うく、関係のない人間を、やっつけようとしたところだったんだぞ」

と、呆れているケインに向かって、

「あら、大丈夫よ。あたし、グスタフの顔なら知ってるもの。やっつける前に、気付くわよ」

マリスは、にっこり微笑んだのだった。

牢の塔を出て、ケインたちは、もと来た道に戻っていた。

「ケイン、調べものは、まだあるの？」 マリスが尋ねる。

「まあな。今度は、真犯人のところへお邪魔するんだ」

「それは、誰なの？ 盗賊たちからは、そこまで聞き出さなかったじゃない？」

「ああ。俺には、もうわかってるから」

ケインが、再び答えた時、

「……ねえ、何か変だわ……！」

クレアが、辺りを伺いながら、慎重な声を出した。

その途端、嘲るような笑い声が、辺りに響くと同時に、周りの景色が、ぐらりと揺れた！

「よくも、邪魔してくれたな、ケイン・ランドール！」

空から、若い男の声が、降り注ぐ。

クレアが怯えた表情で、ケインを見る。ケインは目で合図して、彼女を自分の後ろに下がらせた。

マリスは、腕を組み、目だけで辺りを油断なく伺っていた。

「今度こそ、真犯人のご登場のようだな！」

クリミアム第一王子、クリストフ殿下！」

ケインは、空に向かって叫んだ。

真犯人

空には、半透明の、若い男の顔が浮かんでいる。

もちろん、本物ではない。どこからか、映し出されているのだと、ケインたちには解っていた。

少しそばかすのある色白の、神経質そうな顔立ち、栗色の巻き毛――それは、間違いなく、クリミアム王国王子、クリストフのものであった！

「まったく、チンケな計画を立ててくれたもんだよ。真相が解った時は、思わず呆れてしまったぜ」

物怖じした様子もなく、ケインが肩をすくめてみせた。

「ほう……、では、どこまで当たってるか、君の推理を聞かせてもらおうじゃないか。それが、遺言にならなきゃいいけどね」

王子の笑い声が、辺りに響き渡る。

ケインは、淡々と、語り始めた。

「今回、魔道士を伴って入国してきたのは、マスカーナ王国とデロス王国の二国だが、実は、あなたも魔道士を連れてきていたんだ！それも、同国の特使には内密に。

あなたは、ヤミの魔道士を雇っていた。クリミアムには、魔道士は、あまりいないらしいからな。

そのヤミ魔道士は、どこからか、よからぬ連中をかき集め、アレ・シティーで剣を集めさせた。

クリミアムよりも、アストーレの方が、物資は豊かだし、腕のいい鍛冶屋もいることで、武器が充実しているからだ。

だが、アストーレの騎士たちだって、同じ物を使っている。腕だって、訓練を積んでいる騎士の方が、断然いいはずだ。

それに勝つには、剣に魔力を注いで強化し、同行した魔道士連中の攻撃も、簡単に防げるようにしておく必要があったんだ」

空に映し出された王子は、ふふんと鼻で笑った。

「その時、偶然手にしたのがカイルの魔法剣だが、この計画では使えないことがわかり、持ち主のカイルが城にいることを知ると、さりげなく参謀の部屋に置いて、ダミアスさんがうさん臭くなるようもっていった。」

幸い、彼を良く思っていない人物が、何も言わなくても後押ししてくれたもんなー。

カイルまで、すっかりダミアスを疑ってたし。

最初から計画のうちだったかどうかはわからないが、あなたたちは、参謀のダミアスに皆の注意がいくように仕向けた。

魔道に疎いアストーレのことだ。魔道といえば、すぐにダミアスを結びつけると踏んだんだろう」

「へえ、よくわかったじゃないか。いやあ、立派立派！」

王子は、感心して、手を叩いてみせた。

「確かに、始めは盗賊団の仕業にだけしておこう、という計画だったが、それじゃあ、いろいろとまどろっこしかったからね。ちょうど、アストーレの公爵たちが、参謀のことをよく思っていないみたいだったし、そっちに罪をなすりつけた方が、こちらのヤミ魔道士も動き易くなるだろうと思って、計画を少し変更したのさ」

王子の顔は、くすくす笑っている。

「だけど、僕の目的は、アストーレの内紛なんかじゃないよ。君の推理は、まさか、そこで終わりだなんて、言うんじゃないだろうね？」

「もちろんだ」

ケインは、再び、話し始めた。

「俺は、王女誘拐未遂事件は、外国人の仕業だと、ずっと疑いをかけていた。」

参謀のことも、疑わなかったわけじゃなかったが、極めつけになったのは、犯行の日にちだった。

誘拐未遂のあった翌日に脅迫状——こんなに立て続けに誘拐しようとするなんて、よっぽど自分たちが捕まらない自信があるとも考

えられるけど、ひとつは、滞在時間にあったんだ。

あなたたちは、アストーレにいる五日間で、勝負を決めなければならなかった。

そう考えれば、参謀よりも、外国人の方が、しっくりくる」

ケインの隣ではマリスが、後ろでは、クレアが、ずっと黙っている。

「いずれかの国が、姫を誘拐して莫大な身代金を請求するか、アストーレに自国の傘下に入れと要求するものと、始めは考えた。

だが、今日、神殿からの帰り道で、どこの国のヤツが、どんな目的で、というのが、俺には一遍にわかったんだ……！」

そこで、ケインは、一旦、言葉を区切った。

空の王子は、目を細めた。

「どうしたんだい？ 続けないのかい？」

「あなたの名誉のために、言わないでやることもできるが、ここには俺たちしかないから、構わないか……」

ケインは、再び空を見上げて、はっきりと言った。

「賊たちを捕まえている時、奴等の一人が『話が違う』とこぼしていたのを聞き、ほとんど無意識だったそいつの視線を辿ってみると、その先にあったものは、物凄い殺気を漂わせて、俺を睨む、あなたのその顔だった！」

賊も、あなたには簡単にやられるよう、事前に申し合わせておき、王女誘拐を勇ましく阻止するという筋書きだった。

すなわち、あなたは、どういつも歯が立たない、豪腕なデロス王子でさえかなわなかった賊に、ひとりで立ち向かい、脅迫状によって怯えきった王女の前で、……いいカッコしようとしたんだろう！」

王子の顔は、もう薄笑いを浮かべてはいない。

「盗賊たちの手から姫を救い、そのことでアストーレ王に恩を売り、姫との婚約を決定的にする——つまり、この事件は、お前の仕組んだ『狂言』ということだ！」

ケインは、空の王子の顔に、人差し指を突きつけた。

王子の恨めしそうな顔が、見下ろしている。

「……あの、ケイン、あたしは、その事件とやらのいきさつが、よくわかんないから聞くけど……真相って、それだけなの？」

遠慮がちに、マリスがケインに尋ねる。

「……俺だって、何度も違うと思ったかったが、どうしても、それが一番つじつまが合うんだ」

ケインが、空を睨む。

「……よく、そこまでわかったじゃないか。……褒めてやるぞ、ケイン・ランドール」

王子の顔は、いくらか青ざめていた。

「えっ……」

マリスとクレアが、げんなりした顔を、王子に向けた。

青ざめた王子の顔は、意気消沈している。

「僕は、ずっと前に、アイリス王女の肖像画をもらった時から、僕の妃に迎えたいと思っていたんだ。」

そうしたら、今回の訪問では、あちこちの国からも、王子たちが来ることも知った。

ライミアは、どこの国から見ても有益だ。王子は頭脳明晰と言われている。

ガストー公子は非常な美男子で、ダンスも上手いと聞くし、マスカーナ王子は気持ちも優しく、詩を歌う才能に秀でていて、デロスの王子は武道に長けている。

……でも、僕には何もない。

このままでは、残りの四カ国と、差がついてしまう。

そう思って、この計画を立てたのさ」

王子の声は、呟くようだった。

「やはりな。最初の事件の時、姫を攫った賊が、ウマで逃走したが、あいつは、自分たちのアジトへ行くでもなく、原っぱへ逃げた。」

後になって、冷静に考えてみると、それはおかしい行動だったし、

そもそも、あそこでウマが二頭用意されていたのは不自然だったんだ。

……あれは、あなたが乗るためのウマだったんだな？」

その時の様子を知らないマリスとクレアは、お互い顔を見合わせていた。

王子は、低いトーンの声で、再び語り始めた。

「いかにも、お前の言う通り、一頭は姫を攫った犯人用で、もう一頭は、追いかけるように僕が乗る予定だったのだ。それなのに、お前が乗っていつてしまった。

二回目の誘拐は、警備の者の中に、お前の姿がないのを確認しておいたにもかかわらず、小姓なんかに化けていたとは……。

またしても、王女を助けるという重要な僕の役どころを奪ってしまった！

……あの後、夕食会でも、姫は、お前の話ばかりしていた。

二度も助けてくれただの、小姓が実はお前だと知って感動しただの、戦う姿に思わず見蕩れただの……」

「いやいや、それほどでも」ケインは、えへへ、と頭を掻きながら笑った。

「照れるんじゃない！」

王子が、イライラして喚く。

「本当は、そうなるのは僕のはずだったのに！ お前が僕の計画を潰したんだ！」

空に映った大きな顔は、地団駄でも踏んでいるのか、小刻みに上下している。

天を見上げて、それまで黙っていたマリスが口を開いた。

「王子たちの中で、自分が一番見劣りするからって、イジケてないで、堂々としてればいいじゃないの。中身さえ良ければ、下手に小細工しなくたって、女心はゲット出来るものよ」

それで慰めているつもりなのか、王子に向かって彼女はつけつけと言っていた。

「それが出来ないから、小細工してるんじゃないか？」

「あ、そっか」

ケインとマリスのやりとりを見て、王子は余計に地団駄を踏んだ。
「うるさい！ 黙れ黙れ！ 僕は、貴様らの三バカトリオを見に来たんじゃないやい！」

「三バカって……！ 私は、何も言っていないじゃないの！」

クレアが、それに向かって怒り出した。

「うるさい！ そいつの仲間は、みんなバカだ！」

「なんですって！？」

「おいおい、変なことでケンカすんなよー」

ケインがクレアを宥める。

「……まあ、幸い、誰にも怪我はなく、賊も捕えたことだし、そいつらのせいにして、事件の真相は黙っててやってもいい。

だから、これからは、正当な方法で、姫の心をつかんでみな。じゃあ」

ケインは、空に向かって手を振って、歩き出した。

だが、王子は、それだけでは、気が済むはずもなかった。

「誰が貴様をこのまま返すと思うか？ そこは、既に、僕の魔道士の結界の中だ！」

貴様らの処分は、彼に任せてある。

……ケイン、貴様さえいなければ、姫は僕のものだからな！」

「……どんな根拠があって、そんなことを言ってるんだか……。」

それなら、最初から堂々とすればいいだろ？」

ケインが呆れ果てるが、王子はもう落ち着きを取り戻し、「それじゃあ、僕はもう眠るとするよ」と言うのと、空に浮かんでいた彼の顔が消えていき、入れ替わりに、黒いフードを被った魔道士の姿が現れた。

フードの中は影になっていて、皆からはよく見えないが、王子の時とは違い、黒い全身が映し出されている。

かなり長身の男らしいが、横幅は、あまりない。

干涸びた手のような、茶色の木の杖を持ち、その手には、緑色の大きな宝石の指輪と、銀色のヘビの形をした指輪とが嵌められていた！

「ケイン、この人だわ！　あの時、空間の中にいたのは！」

クレアが叫ぶ。

「やっぱり、そうか！　クリストフ王子の雇ったヤミ魔道士……！」

魔道士は、頭上から、彼等をゆっくりと見回しているようだったが、ピタッと動きが止まる。

「ほほう、これはこれは、珍しいところで、お会いしましたな、ベアトリクス王国近衛兵及び、流星軍騎士、その後は辺境警備隊長マリス殿。あの辺境では、何かとお騒がせいたしましたな」

魔道士の低い歓喜の声が響く。

「た、隊長って……お前、ほんとに……」

マリスは、そういうケインをちらっと見ると、微かに笑っただけで、すぐにキッと空を見上げた。

「残念ながら、今はもう近衛兵でもなければ、警備隊長でもないわ。亡命したのは、あなたも知ってるんでしょ？」

「それはそれは、存じ上げませんで、失礼致しました。……にして、よく御化けになりましたね。そのようなお姿とは。てつきり、商売女かと思いましたよ」

魔道士は、クククッと笑い声を漏らす。

「あんたこそ、出世したじゃないの。王子サマなんか雇われてさ。『ヤミ魔道士グスタフ』！」

それこそが、先ほどマリスが参謀と思い込んでいた魔道士に、他ならなかった。

ケインも、クレアも、気を引き締めて、空を見直す。

「覚えて頂いて光栄です。時に、御連れの魔道士の方は、いかがされたんです？」

「あんたなんかを欺くために、今回は別行動を取ったのよ。」

思惑通り、まんまと出てきてくれちゃったわね」

マリスが勝ち誇ったように言った。

魔道士は、ほほと笑った。

「さすがに、勘の鋭い御方だ。この国に、私がいるかも知れないと、最初から踏んでいたというわけですか」

「あんたとは、辺境警備隊時代からのよしみ。何者かが呼び出した中級モンスターたちが、このエリアで最近増えたって聞くし、行くところ行くところに次元の穴が開いてて、モンスターばかり吹き出してたら、あんたの仕業かも知れないって見当が付いて当然でしょ？ あたしがヴァルと離れたら、案の定、こうして姿を現したことだしね！」

マリスが言い放つが、魔道士は一向に動じた様子はない。

「あなたがた二人を同時に御相手するのは、いくら私でも難しいでしょう。」

しかし、ここは既に私の結界の中。

例え、彼のような一流魔道士でも、私に気付かれずに、ここに入ってくるのは難しいでしょうな。となると、私は、魔法を使えないあなたを御相手するだけでいいのです。

なかなか楽しませて御覧にいきますよ」

魔道士グスタフは、ケインとクレアなど、まったく眼中にないような口ぶりだった。

「それは、どうも。でもね、あたしも、あんたを少しは楽しませてあげられるかも知れなくってよ」

「ほほう、それは、楽しみですね」

彼は、面白そうな声を上げた。

「そうそう、実は、このような拾い物をしたのですが、見覚えはありませんかな？」

彼が手のひらを、上に返し、そこに浮かび上がったのは、木でできた小さな檻の籠だった。

籠の中では、ピンク色の小さな妖精が、檻につかまり「出してー

！出してー！」と、叫んでいた！

（ミュミュ……！！）

三人は、声には出さなかった。

マリスは、顔色も変えない。

「別に、ただのニンフじゃない。珍しくも何ともないわ。あんたも趣味が悪いわねえ。早く逃がしてあげなさいよ」

それを聞いたミュミュが、魔道士に向かって叫ぶ。

「だから、ミュミュは知らないって言ったでしょ！ あのおねえちゃんとは関係ないんだから、早く出してよおー！」

「……そうか、知り合いではなかったか」

魔道士が、ミュミュとマリスを見比べて言う。

「そうだよー！ そうだよー！ だから、出してー！」

マリスも、素知らぬ顔をしている。

「では、お前には可哀相だが、私の魔獣どもの餌になってもらおう」
「なっ……！！」 三人の顔色が変わった。ミュミュも泣き止む。

魔道士の足元に、ぽっかりと黒い穴が開き、そこには、魚を原形としているらしいが、更に様々な動物をかたどり、合成された黒いモンスターたちが、何十匹と口をパクパクさせて、餌を待っていたのだった！

魔道士は、そこへ、ミュミュを捕えた籠を、徐々に近付けていく――！！

「いやーっ！ 助けてー！！」

ミュミュが、わーっと泣き出すと同時に、ケインが一步出る。

マリスがケインを手で制してから、諦めたように言った。

「待って、グスタフ！ ……確かに、その子は、あたしの知っているニンフだわ。だから、こっちへ返して」

「やはり、お知り合いでしたか。いいでしょう。返してあげますよ」

魔道士は、『そこ』から、籠を放った。

「うわーん！ 何すんのさ、バカー！！」

ミュミュが泣き叫びながら籠ごと回転して、落ちていく！

そのままでは、地面に叩き付けられる！

ケインは、夢中でミュミュを受け止めようと飛び上がった！

……と、後ろから、何かが飛んで来て、そのまま空に浮かぶ魔道士に突き刺さった――！

――に見えたが、それは、彼の半透明の身体を突き抜けて、そのまま飛んでいき、落ちた。

マリスが短剣を放ったのだ。

「ほっほっほっ、何もしやしませんよ」ヤミ魔道士が笑う。

ケインが籠を無事取り返し、着地する。

「危ないじゃないの、マリス！ ケインやミュミュに当たったりしたら……！」

「ケインの援護をただけよ」

それだけマリスはクレアに言い、すぐに空を睨みつける。

「本体は別のところにいるみたいね。そろそろ出てきたら？ あたと勝負するんじゃないの？」

彼は、またクックツと笑った。

「まあまあ、そうお急ぎにならずとも。とりあえず、『彼等』の餌になって頂いてからにしましょう。お預けを喰らってしまって、『彼等』も引っ込みがなくなってしまうたようなんですね」

途端に、魔道士の姿は消え、その足元でパクパクしていた黒いモンスターたちの影は、徐々に本体を表し、そのまま口をパクパクさせながら、天からゆっくりとだれ込んできたのだった！

その口の中には、無数の牙が詰まっていた！

「うわーん！ 早く出してー！」

ミュミュが泣き叫ぶが、剣で斬りつけても、籠は壊れない！ 中にいるミュミュの身を考えると、ケインも思い切り斬りつけることは出来なかった。

「無駄ですよ。その籠は、そんなことでは壊せません。籠の中にいる間は、ニンフの特殊能力は使えませんよ。空間移動や回復の技などを使われては厄介ですからねえ」

グスタフの声だけが、どこから聞こえてきていた。

「しかたないわ。クレア、ミュミュをお願い！」

マリスが、天を見据えたままと言う。

クレアは、ミュミュの籠を自分の足元に置くと、両手を合わせて精神を集中させる。

ケインは、マスター・ソードを構え、マリスを後ろへ庇った。

「大丈夫よ。あたしも戦うわ」

マリスが、ずいっと横に出る。

「何言ってるんだ！ あんな大量のモンスターたち相手に、素手で向かおうってのか？」

むちゃ言うなよ！」

マリスは、ケインの方に顔を向け、にこっと笑った。

「あら、剣ならあるわ。ここにね！」

そう言うと、マリスは、いきなり自分のドレスをふわっと捲り上げた！

「えっ！！ な、何する……！！？」

あらわ露になったマリスの太腿に、思わずケインの目は釘付けになっていた。

そこには、細い革のバンドで括りつけられた彼女のロング・ブレードが存在していたのだった！

ずびっ！

ずばっ！

ずしゃあっ！

どばっ！

彼女は、とうにモンスターたちに応戦していた。

かつ捌かれた黒い肉片が、飛び散る。

驚いたせいで一足遅れながらも、ケインも魔物たちを捌きにかかった！

闇の魔道士

モンスターから身を守る結界を、ヴァルドリューズから教わっていたクレアの周りには、薄い緑色の膜が出来ていた。

彼女とミュミュが安全なのがわかったと、ケインは、安心して、モンスターたちを薙いでいった。

しかし、その合成モンスターたちは、今までと勝手が違い、切っても切っても復活し、すぐに無数の牙を剥いて、向かってくる。

これでは、ケインたちの体力が先に尽きてしまう。

しかも、もともと一体だったもの同士ではなく、近くに落ちていたもの同士が、磁力が引き合うように寄せ集まって、断面など関係なくくっつき合わさっていくものだから、その形はますますおぞましく、不気味かつ、イビツであった。

ここは、マスター・ソードの技で……と、ケインが剣を持ち直した時だった。

『そのモンスターどもは、切っても倒すことは出来ん！ 火だ。火を使え』

どこからともなく聞こえて来た声に、クレアが、はっとして、呪文を唱えた。

途端に、彼女の手の平から、人の顔ほどもある大きな火の塊が生まれ、黒いモンスター目がけて、火の粉をまき散らしながら、吹っ飛んでいく。

マスカーナやデロスの魔道士が見せたものよりも、明らかに大きく、スピードもあった。

「マリス、ケイン、よけてー！ まだコントロールが充分じゃないの！」

おぞましい目標から顔を背けているせいで、クレアは、あちこちに炎を振りまいていた。

ケインもマリスも慌てて逃げ出し、地面に伏せるはめになる。

まったくの、無差別攻撃であった。

ぎゃああおおおおおうううううう！！

モンスターたちは、声にならない叫び声を上げて、炎に巻かれたものから、次々と消滅する。

ひととおり焼き払うと、クレアは、ふうっと一息つき、辺りを見渡して「あら」と言って、口に手を当てた。

辺り一帯が、焼け焦げて、ぶすぶすいていた。

「す、すごいじゃないか、クレア！」

「いつの間に覚えたの！？」

顔をこわばらせながらも、そんな言葉を口々に、ケインとマリスはクレアに駆け寄った。

「まだ加減がよくわからなくて……、必死だったから、つい……」

クレアは、両手を顔に当て、ぽっと頬を赤らめた。

「炎の術だけ、たまたま覚えたところだったの。『水が効く』って言われたら、どうしようかと思っちゃったわ」

と、クレアが困ったように微笑む。

その美しい面からは、炎の無差別攻撃を発動したとは、誰が想像出来よう。

「……貴様……！ よくここが……！」

頭上では、グスタフの憎々し気な声が響き渡るが、空には何も映ってはいない。

「この城は、私の庭のようなもの。異分子の存在など、すぐにわかる」

『火が効く』と、彼等に教えてきた声であった。

「くっ……！！ ここでは、場所が悪い。一旦、引き上げさせてもらうぞ！」

そうグスタフの声がしたと思うと、辺りの景色が一瞬揺れ、焼け焦げたモンスターの残骸も、ふっと消えてなくなった。

そして、通常に戻った空から、舞い降りて来た一人の魔道士の姿があった。

「ダミアスさん……!？」

ケインが、進み出た。

それは、先に牢で会ったばかりの参謀に違いなかった。

「彼グスタフは、クリストフ王子の部屋の中にいた。こちらの結界の中に入るには、少々時間がかかるので、直接、彼の居場所へ行ったのだ」

「それで、ヤツが逃げていったというわけか」

参謀ダミアスは、クレアの方を向いた。

「よくやった。見事だった。見習いとは思えないほどの腕前だった」

「そ、そんな……ありがとうございます」

クレアが恥ずかしそうに、ペコツと頭を下げた。

「ダミアスさん、初めまして。さっそくで悪いんだけど、あいつを追ってくれないかしら？　今、逃げられると厄介なのよ」

マリスが、初対面にもかかわらず、遠慮のない調子で、ダミアスに言った。

彼は、じつとマリスを見つめていた。

「……先程から、どうも得体の知れない魔力の波動が感じられると思ったが……、あなたは、魔道士ではないのですか？　それほどの魔力を持ちながら、なぜ、魔法を使わなかったのです？」

ダミアスは、なぜかマリスには敬語で話しかけていた。

クレアにはそうではなかったため、魔道士というものは、魔力基準で階級が決まるのだろうか？　と、ケインは思う。

「……あなたは、いったい……」

「あたしはマリス。魔法は使えないの。向いてないみたいでね。ところで、知り合ったばかりで悪いんだけど、急いでるの。あたしを、あの北の森まで運んでくれないかしら？」

ダミアスの顔色が、少し変わった。

「彼が、あそこへ逃げたと……？」

「ええ、間違いないわ、あいつは、あそこにモンスターを呼び出した張本人なのよ。きつと、あたしを迎え撃つ戦闘準備に入ってるわ」

マリスが、森の方を見上げて言った。

「彼が、モンスターを……」ダミアスが呟く。

「魔道士の間では、誓約ごとがいくつかあることは知ってるわ。だから、一緒に戦ってくれとは言わない。送ってくれるだけでいいの。お願い！」

マリスが、両手を組み合わせて、今までにないほど緊迫した様子で、ダミアスに頼み込む。

「マリス、一度、ヴァルを連れに戻っては……」

「いいえ！」

彼女は、はっきりと、ケインの言葉を打ち消した。

「そしたら、あいつは、また逃げるわ！……やつと、見付けたんだもの。ここで倒しておかなくちゃ！」

ケインもクレアも、ダミアスも、どうやら、グスタフとマリスには、何か因縁でもあるらしいことを察した。

「そんなことより、早くミュミュを出してよーっ！」

クレアの抱いている籠の中では、ミュミュが喚き、暴れていた。ダミアスが籠に手をかざすと、ミュミュの身体が一瞬消え、籠の外に現れた。

「この籠には、物理的な力を加えても、効果のないように魔法がかけられていたよう

だ」

ダミアスが、淡々と言った。

「ありがとう！ おじちゃん！」

ミュミュが、ダミアスの周りを、嬉しそうにぱたぱた飛び回った。「……てことで、ここからは、あなたたちは、帰ってくれる？ グスタフは、慇懃無礼なヤツよ。物腰からしてバカ丁寧でイヤミだったらしかったでしょ？ その実、やることは、相当汚いわ。さっきは、人質が、たかがニンフだったからよかったようなものの」

「こらーっ！ たかがニンフって、どーゆーことー！？」

ミュミュが両手をぶんぶん振り回しながら飛んで、口を挟む。

クレアは心配そうな目で、しばらくマリスを見ていたが、ふっと目を伏せて言った。

「そうよね。私の覚えたての魔法なんか、きつと、通じる相手ではないのね。それに、さっきの術で、ほとんど魔力を使い切ってしまったし……。側にいるだけで、マリスの足を引っ張ることになるのだったら、私はお城に戻っていた方がいいみたい……」

マリスが、クレアに暖かい視線を向け、両手を彼女の肩に、ぽんと置いた。

「さっきは、クレアがいてくれて、本当に助かったわ。今度は、お姫様を守ってあげて。」

王様が、『腕の立つ女官』とやらを探しているそうよ。クレアなら治療も出来るし、結界も張れるし、炎の攻撃だって出来るじゃない！

もし、あたしがしくじったら、あのワガママ王子、まだ姫を諦めていないようだったから、グスタフを使って、また何を企むかわかったもんじゃないわ。あと二日は滞在するんだし……。ねっ？」

「……ええ」

クレアは、少し潤んだ瞳でマリスを見つめ、返事はしたものの、心配そうな顔のままだ。

マリスの目が、今度はケインに向けられる。

「ケインも……」

「俺は、一緒に行く」

マリスが何か言う前に、ケインは、そう言っていた。彼女が何か言いかけるが、構わず続けた。

「あのヤミ魔道士、王子の命令で俺のことも狙ってるんだ。さっきは、マリスのことしか眼中になかったみたいだったけどな。」

ここで、あいつを倒しておかないと、っていうのは、俺にとってもおんなじことだ。

それに、マリス、俺は、お前に雇われてるんだぜ？ 『一緒に来い』って言ってくれりゃあ、俺はいつでも一緒に戦う。解雇されるまではな」

後半、彼は、明るく、軽い口振りで言った。

なんだか、重たい雰囲気になり、クレアもますます心配そうであったのと、万が一、マリスに何かあったら……！ という不安をはねのけるためでもあった。

「そうよね、あたし、ケインの主人だったのよね。忘れてたわ」

「なんだよ、忘れんなよ」

冗談のように言い合っている彼らを見ているうちに、クレアが、少し安心したような表情になっていく。

それを確認してから、マリスが、元気に拳を高く掲げた。

「それじゃあ、北の森へ出発よ！」

「もう目を開けてもいいだろう」

ダミアスの声で、ケインは、そうっと目を開く。

それまでの、身体にまとわりつくような違和感はもうなく、真っ暗な森の中に、突然、彼等は姿を現した。

ケインとマリスはダミアスに連れられ、空間の中を移動して、北の森へ着いたのだ。

彼に言わせると、慣れていない者は時空酔いをするといけけないので、目を閉じておいた方が良い、と。

「ここが、北の山の頂上だ」

真っ暗闇で、背の高い樹木によって、よく見渡せない。

「ここまで連れてきてくれて、ありがとう。もう、戻っていいわよ」
「いや」

魔道士は、マリスの言葉に、首を振る。

「あなたがたの戦いを、見届けさせて頂きたい」
ケインもマリスも、じっと彼を見た。

彼の瞳は、相変わらず静かで、こちらにも真意は読み取れない。

どこことなく、ヴァルドリューズと似ている。

「手出しは、一切無用よ」

マリスが微笑んだ。

「もちろん。あなたがたの戦いを汚すようなことは、いたしません」
ダミアスも、いくらか微笑んでいるようであった。

「それを聞いて安心しましたよ」

空から、さきほどの声が響く。

「さっさと姿を見せたらどうなの、グスタフ！」

マリスが、空に向かって声を張り上げた。

ゆるゆると、黒いものが舞い降りて来る。

それは、木の枝に止まると、だんだんと人の形になっていき、記憶に新しい、長身の痩せた魔道士の姿へとなっていた。

「出て来たわね……！」

マリスが、ひとり呟く。

グスタフが、杖をさっと一振りした。

二人は、身構える。

すると、側にある木の根本に黒い穴が開き、中から獣人型モンスターや、黒い靄^{もや}やらが湧いて来た。下等よりも格が上のものたちである。

まるで、その黒い穴は、小規模な次元の穴とも言おうか、そこを通じて、ミドル・モンスターたちが召喚されていくのだった。

ケインもマリスも、剣を持つ手に力がこもる。

その時、爆風音とともに、小型の竜巻のような渦巻く風が、モンスターたちを巻き上げ、そのまま空高く吹き飛ばしていつてしまった。

「……貴様、手出しはしないと、今言っただけではないか！」
グスタフの、忌々（いまいま）しそうな声がする。

「手出しはしない。そのかわり、お前も堂々と、彼等と戦え。神聖な戦いを汚すことのないように」

静かな声で、ダミアスが返した。

「そうよ！　くだらない手品なんか見せてないで、かかってきたらどうなの？　それとも、あたしたち二人に恐れを成して、手も出せないってわけ？」

マリスが挑発する。

「ふっ、いいだろう。魔術の使えない人間が何人束になろうと、私の敵ではない！」

グスタフの姿が揺れ動いて、景色の中に溶け込んだ。

次の瞬間――！

「ケイン、来るわよ！」

マリスの声と同時に、目の前に拳の大きさほどの火の球が現れた。今までに見たことのない速さだ。

ケインは、反射的に剣で防御する。火は弾き飛んで、空に消えていった。

「ほう、この至近距離で、よく交わりましたね。それに、その剣からは魔力が感じられる。もしか……マスター・ソードなのでは？」

まさか、こんなところにそんなものがあるとは、思いもありませんでしたよ。

……そうか、だから、あの時、私の魔力を込めた剣が、効かなかったのですね。

それならば、それを考慮に入れて、攻めなくてはなりませんね……

……！

どこからともなく聞こえてくるグスタフの声。

気配を探るが、それが追いつかないほどの速さで、彼等の周りぐるぐる回り、どこから攻撃してくるのか、まったく見当が付かない。

「ケイン、後ろ！」

背に殺気を感じたと同時に、マリスが横から、ケインの後ろに剣を突き出した。

ガシッ！

杖とマリスの長剣が、かち合い、緑色の火花を放出する。

「ちっ、次は外しませんよ！」

夜の森は、ただでさえ真っ暗だ。グスタフは、黒いフード付きマントで黒い風景に溶け込み、空間移動術を使い続ける。

まったく動きは読めない。

殺気で気配がわかって、動きが速く、読むのは一苦勞である。

「ケイン」

マリスが、そっと背中合わせになり、小声で話しかける。

「あたしが合図したら、一気にあそこの太い木まで走って行って、木を背にして戦うわよ」

「ああ、その方がよさそうだ」

グスタフの気配を読んで、マリスが合図する。

ケインは、一気に、正面の大木目がけて走った。

その後ろでは、パチパチと燃える音は聞こえ、稲妻のようにピカッと光るものを、マリスが剣で弾き、援護しているのがわかる。

大木まで辿り着くと、ケインは、剣を構えて振り向く。

マリスは、まだ移動せず、戦っていた。

グスタフの姿は見えないままだが、四方から放たれる炎や稲妻を、彼女がロング・ブレードですべて受け止めていた。

ケインが走り出したと同時に、グスタフがマリスを集中攻撃したのだ。

彼女を援護しなくては！ と、マスター・ソードを構え、呪文を唱えようとすると、ふいに、炎や稲妻が止み、辺りが静かになった。奇妙な異変に、マリスもケインも、その場で剣を構えたまま、辺りの様子を嗅ぎ取ろうと、神経を集中させる。

すると、マリスの目の前で、何か黒いものがうようよと蠢いているのがわかった。

ざわめく木々。

草の根をかき分けて、前方から、獣人タイプのモンスターたちが

何十匹と現れた。

「なっ……！ 汚いぞ、グスタフ！」

ケインは、見えない魔道士に向かって叫んだ。
薄気味悪い笑い声が、どこからともなく聞こえる。

ケインは、マリスに助太刀しようと向かった。

だが、ふと、また背に殺気を感じ、横転して飛び退る。^{すさ}

そのケインのいたあたりを、グスタフの杖が突き抜けていた。

「あなたも、なかなか勘がいいですね。マリス嬢は、あやつらにちよっとお相手して

いてもらい、先にあなたを倒しておこうと思うのですが、如何ですか？」

グスタフのねっとりとした声が、ケインのすぐ側で聞こえる。

ケインは、すぐに態勢を立て直し、剣を構えながら必死に目を凝らし、五感を研ぎ澄ませた。

すると、目の前の暗闇に、ぼうっと、人の顔らしきものが浮かび始める。

殆ど髑髏^{どくろ}かと思える皺だらけの皮でできた顔面に、耳の下辺りから生えた長い白髪、額には、黒い宝石、中心にある骨張った鉤鼻、凹んだ眼窩^{がんか}には、燃えるような炎の色をした眼球――

それは、まるで、何百年も生きてきたかのような人間の顔であった！

グスタフは杖を振り翳した。

それを、ケインがマスター・ソードで防ぎ、右手の拳を狙いをつけて打ち込んでみるが、手応えはない。

不気味な笑い声とともに、魔道士の顔だけが闇に浮かび、またしても杖を繰り出す。

それをよけると、右から電光が放たれる。

ケインはマスター・ソードで回避するが、ほっとする間もなく、今度は後ろから火の球が――

グスタフの顔は、ずっと同じ位置で笑っている。

だが、攻撃は、あらゆる方向からやってくるのだった。

突き出す杖、火の球、雷^{いかづち}……

人間相手と違って、気配が読みにくいため、普段以上に神経を使う。

だが、防いでばかりじゃ拉致が開かない。

ここは、いっそ、思い切って……！

と、ケインは、足元から飛び出して来た火の球をよけて、横に飛び退ると見せかけ、地面を蹴って方向転換すると、闇に浮かぶ魔道士の顔目がけて、マスター・ソードを振り下ろした。

「おわああああああ！！」

「外したか！」

ケインは、舌打ちした。

顔を真つ二つに割ってやろうと思っていたのが、とっさによけられ、顔の右側を斬りつけただけだった。

「……おのれ……！　よくも、貴様如きが、私の身体に傷を付けるとは……！」

ケインが思ったよりも深く斬り込んでいたようで、グスタフは、頭のとっぺんから、だらだらと血液を流し、右目を抑え、無事な方の目を見開いて、ケインを凝視していた。

その時、彼の血の色を見て、ケインは、ぞくつとした。

彼の血は、赤くなかった。

魔物と同じ濃い緑色であったのだ。

（そんな！　魔道士といえども、人間なんじゃ……！？）

一瞬の隙をつかれ、ケインは、突然現れた杖に、突き飛ばされた！

「たかが、傭兵にしては、よくやった。褒めてやろう。だが、私の身体に傷を付けたとあっては、もう、手加減はしないぞ！　覚悟し

ろ！」

グスタフは、その長身をゆらりと露にし、ケインの前に立ちふさがった！

受け身を取って転がり、起き上がりかけたケインの目の前に、グスタフの筋張った手の平が向けられた。

（火の球か、電光か！？ いずれにしても、この距離では交わせない！）

「もともと、貴様は消せという依頼だった。丁度よい！ 今こそ消してやる！」

ダークドラゴンの呪文も間に合わない！

そうケインが思った瞬間だった。

「消えるのは、貴様の方だ」

この場に不釣り合いな、抑揚のない無表情な低い声が、聞こえたかと思うと、目の前の魔道士の胸から、真っ赤な炎が吹き出し、絶叫が辺りに響き渡る。

「……き、貴様……！ い、いつの間に……！！」

グスタフは、全身を痙攣させながら、ゆっくりと振り返った。

黒いマントに身を包み、フードを降ろした黒髪の魔道士の姿が、そこにあった。

「ヴァル！！」

ケインが叫ぶ。

ヤミ魔道士グスタフの後ろに立つ者は、紛れもなく、ヴァルドリューズであった。

因縁の対決

彼は、いつもと変わらず冷静な碧い瞳で、グスタフを見下ろしていた。

身長のヴァルドリューズよりも、さらに、上に行くグスタフを、なぜかヴァルドリューズの方が見下ろしているように、ケインには思えた。

「……ヴァルドリューズ、……なぜ、貴様が……！」

グスタフは、がくんと膝を付き、胸を抑えて、片方の目でヴァルドリューズを見上げた。

「マリスの作戦で、別行動を取ることもなった。結界がなくとも、彼女の魔力を抑えることが出来、以来、私もずっと気配を消していた。

すっかり油断し、ケインとの戦いで傷を負い、逆上したお前は、本体を表しただけでなく、結界が解かれ、私が近付いたことすら気付かなかったのだ」

悔しそうにヴァルドリューズを見上げるグスタフの胸から、どばつと濃い緑色の血液が吹き出した。

それを、表情を変えずに見つめるヴァルドリューズ。

「……人間であることをやめたか。ならば、なおさら生かしておくわけにはいかぬ」

何の感情も感じられない声でそう言い終えると、グスタフに翳したヴァルドリューズの掌からは、ボツという音とともに、先とは違う銀色の光の球が浮かび上がった！

魔物と化したものにとって致命的な魔法と判断したグスタフは、怯えたように狼狽^{うろた}え、開いている方の眼を、ますます大きく見開いた。

銀色の光の球は、なおも膨張していき、炎のように燃え出す。

ヴァルドリューズの表情は、いつものように落ち着いていた。彼自身が攻撃するところを見るのは、ケインは初めてだった。

魔道士ではない彼にまで、その魔力の波動で空気が震えるのが伝わってくる。

ヴァルドリューズの深く碧い瞳は、いつもと変わらず静かで、何も語ってはいない。

見ようによつて、それは、かえって恐ろしかった。

グスタフとの因縁が、マリス同様ヴァルドリューズにもあるのだったら、怒りや憎悪などを剥き出しにされていた方が、よほど人間的であつただろう。

（これが、『彼』なのか!?!）

静かだが冷酷に映る、これが戦闘態勢となつた時のヴァルドリューズなのかと、ケインは微かに身震いしたのだった。

「待って! そいつは『サンダガー』の餌よ!」

モンスターの返り血を浴びて、白いドレス全身を濃い緑色に染めたマリスが、白いオーラに包まれてやってきた。

その白い顔には、妖しく、不適な微笑みが浮かんでいる。

そんな彼女は、戦うエルフのようであり、とても人間離れして見え、ぞっとするほど恐ろしくもあるが、不思議なことに、^{なまめ}艶かしく、美しくもあつた。

（俺は、とんでもないやつらと、行動を共にしていたのか!?!）

ケインは今改めて、この二人と敵同士ではなくて良かったと思う。

ヴァルドリューズは術を切り替え、奇妙な発音で呪文を唱えながら、指で三角形を作る。その中に出来てきた金色の光を、マリスに向けて放った。

途端に、彼女の身体は金色の光に包まれ、みるみるうちに膨張していくと、そこには、あの見覚えのある金色の甲冑に身を包んだ巨

人が現れたのだった！

以前、ケインが見た時ほどの大きさではなかった。大きさも、自在に変えられると見える。

「ははははは！ 久しぶりに、俺様の出番だぜー！ 最近、ちょっと欲求不満気味だから、思いつ切り暴れて解消しちゃうぜーっ！！」

真っ暗な森の中に、突然光り輝きながら現れたゴールド・メタルビーストの化身は、手を腰に当て、仁王立ちしている。

金色の豪華絢爛な、高貴な身なりに似合わず、何処か邪悪さが感じられるのは、彼の緑色の瞳と、口の端がつり上がっているせいだけではないだろう。

「……あ、あああ……！ な、何だ、あれは……！？」
グスタフは、獣神を見て、あわあわ言っていた。

「まさか、既に……完成していたというのか……！？」
マリスとヴァルドリューズのコンビネーション技を警戒して、二人が揃うのを恐れていたグスタフは、ますます狼狽うろたえていた。

サンダガーは、グスタフの倍ほどはある高さから、見下ろす。

「今日は、この変なじじいが、俺の獲物ってわけか。……ちえっ、マリスのヤツ、もうちょっと美味そうなモン用意しとけてんだ」
サンダガーは、ぶつぶつ言っていたが、それでも、楽しそうであった。

「よーし、じゃあ、いくぜー！ じじい！」

彼は、いたずら小僧のような笑顔で、グスタフに向かって勢いよく拳を振り下ろした。

巻き添えをくらいそうになったケインを、とっさにヴァルドリューズが抱えて飛ぶ。

バキバキッ……！

サンダガーが突き出した拳をどけると、木々が潰されていただけで、グスタフは、一瞬で回避し、別の木の枝に移っている。

ヴァルドリューズは、ケインを連れてサンダガーから離れ、ダミ

アスの近くで着地した。

「……あ、あなたは……!？」

ダミアスが、珍しく目を見開いてヴァルドリューズを見ていた。ヴァルドリューズは、ちらっと見ただけで、すぐにサンダガーに向き直った。

「……こ、これは、もしか、ゴールド・メタルビーストの化身……!」

杖で身体を支えながら、グスタフが言う。

「はっはっはっ! いかにもだあー! 何を隠そう、俺様は、ゴールド・メタルビーストの化身、獣神サンダガー様のさーっ!!」
以前と同じように、彼は、踏ん反り返り、高笑いをしている。

「ゴールド・メタルビーストの化身とは……! まさか、あれは、あなたが召喚したのか!？」

ダミアスが、驚きをはらんだ声で、ヴァルドリューズに尋ねた。

ヴァルドリューズは微かにダミアスを見ただけで、戦況を見守る。

「おのれ……!」

グスタフが、ぎりぎりと歯を軋ませた。

「出でよ! モンスターども!」

彼は、ありったけの気力を振り絞り、両手を高々と空に向かって掲げた。

ぐっぐっぐっぐっ……!!

森中が騒ぎ出し、空からも、木々の合間からも、黒いモンスターたちがざわめきながら、やってきた。その数は、何百匹にもものぼった。

ヴァルドリューズが片手を上げ、ケインとダミアスを含んだ周りに、薄い緑色の結界を張る。

「へっ! しやらくせえっ!」

サンダガーは腰の剣を抜き、一振りした。

周りにいたモンスターたちは吹き飛ばされ、木や岩、地面などに叩き付けられた。

だが、それでも襲いかかっていく。

『そんなやつらしいから、早くグスタフをやってよ！ 早くしないと、回復しちゃうじゃないの！』

どこからともなくマリスの声が響くが、彼女の姿があるわけではない。

「わかってるって、うるせーな！。けっ、なんだよ、あんなトリガラじい一匹、すぐに片付いちゃったら面白くもなんともねーじゃねーか」

サンダガーが、つまらなそうに、口を歪めている。

『ホントは、あたしがブチのめしてやりたかったのを、あんたに譲ってやったんだからね！』

面白くなろーが何だろーが、ちゃんとやってよ！

「ちえっ、しゃあねえな。ってことで、覚悟しな、トリガラじい！」

サンダガーは、ようやくその気になったらしく、剣をグスタフ目がけて振り下ろした。

ヤミ魔道士の、驚き、見開かれた片方の眼球と、大きく開かれた口には、明らかな恐怖が浮かんでいた。

突然、落雷のような轟音と、眩し過ぎる強い光が、真っ暗な森に降り注いだ！

グスタフやモンスターたちの断末魔の叫びというものは、すべてかき消されてしまった。

ケインたちからは、辺りは煙が立ち込めていて、よく見えないでいた。

煙が収まっていき、もとの暗がりに戻りつつある時、目の前の光景に、ケインもダミアスも啞然となる。

森には、木が一本も残っておらず、モンスターの残骸も綺麗さっぱりなくなり、禿げた地面が一面に広がっているだけの、前に見た

光景そのままであった！

ひらひらと、なにか黒い灰のようなものが、いくつか舞い落ちてくる。

グスタフのマントの切れ端であった。

一瞬にして、すべてを消し去るサンダガーの凄まじい攻撃の前では、いくら魔物と化した魔道士といえども、逃げるのは不可能だったとみえる。

ヴァルドリューズから受けた傷を負っているのは、なおさらだろう。そして、そこに立っているのは、やはり、彼ひとり……

サンダガーは腕を組み、その景色を満足そうに眺めていた。

「……なんと素晴らしい光景だ！ あれだけのたくさんの草木や雑魚どもの巣窟が、瞬時にしてこんなハゲ山になったというんだからな。いつ見ても、素晴らしい！」

ふっふっふっ………うぎゃあああああああ！！」

途端に、頭を抱え込み、蹲るサンダガー。

『ほら、戻るのよ！』

マリスの意志の声が、また聞こえる。

「いつ、いやだあっ！ 俺は、まだ遊び足りねーんだ！」

獣神は、抱え込んだ頭をぶんぶん振るう。

『何言ってるの！ こんなにハデにやらかしといて！ だから、あんたを使うのは、いつも気が進まないのよっ！』

「やめろっ！ ……て、てめえ、マリス！ ちくしょう！ 覚えてやがれーっ！！」

捨て台詞とともに、金色の身体は足元から出て来た白いオーラに包まれ、獣神は、みるみる縮んでいく。

退場の仕方は、なんとも格好悪かった。

「はーっ、やっと終わったわ」

そこには、元通りマリスが、白い服のまま現れた。召喚前の、モンスター^{モンスター}の血まみれ姿ではなかった。

「じいちゃんの敵……やっつと、討てた……」

マリスが静かに呟く。

様々な思いが湧き、紫の瞳の端には、涙がにじんだ。

ヴァルドリューズの結界が解け、ケインが、彼女に駆け寄っている。

マリスは気付かれないよう、とっさに涙を拭った。

「マリス！ 大丈夫だったか！？ どこか怪我でも……？」

必死な面持ちの彼に、マリスは笑いながら、

「大丈夫、大丈夫。ケインこそ、ここ、大丈夫？」 グスタフの杖で突かれたケインの胸の下あたりを、指でつつく。

「うっ……」

戦いが終わって気が抜けたせいか、ケインは、結構な痛みが気が付いた。

「ヴァル、治してあげて」

ヴァルドリューズが掌を翳しかけ、僅かに首を傾げた。

「……^{あばら}肋が二本、折れている」

「えっ！？」

ヴァルドリューズの掌から治療の光線が注ぎ込み、ケインの胸からは、徐々に痛みが引いていった。

「そっかあ、折れてたかあ。ブレスト・アーマーでも着けてればな……。しかし、あんな木の杖なんかで、グスタフのヤツ、じいさんのくせに何て力だ！」

ケインが、ぶつぶつ言うのと、マリスが少し真面目な声で言った。

「あいつの恐ろしいところは、そこでもあったのよ。気配が全然ない上に、攻撃力がある。」

見たところ、魔物に魂を売り渡して、更にパワーアップを図っていたみたいだったけど、今のうちに倒しておいて良かったわ。

ヴァル、次元の穴がまだあるか、ちよつと見てきてくれる？」

ケインの治療を終えたヴァルドリューズは、ふわっと飛び上がり、グスタフのいた周辺をゆっくり廻り、しばらくして戻ってきた。

「次元の穴らしきものは見当たらない。グスタフの気配も完全に消

滅している」

「そう。ご苦労さま」

短くヴァルドリューズにそう告げると、マリスは、くるっとダミアスを振り返った。

「ご協力、ありがとう！ 宿敵グスタフは倒せたし、どこかにあったこの森の次元の穴も、ついでに塞いだから、これで、もうモンスターは出てこないわ。

その代わり、山がちよっと削れちゃったけどね」

マリスが、申し訳なさそうに微笑んだ。

ダミアスは、穏やかな目で、マリスを見る。

「この森のモンスターどもには手を焼いていて、いずれ対策を、と思っていたところでした。お礼を言わなくてはならないのは、私の方です」

ダミアスが、深々頭を下げた。

聞けば、朝食会に遅れたり、パーティーに顔を出さなかったのも、それらが城に攻めて来ないよう見張っていたからだという。

だが、皮肉なことに、それを公爵たちからは不審に思われてしまい、本当のことを知らせば人々が怯えると気遣い、ひとりで何とかしようとしていたのだった。

（苦労してたんだな、この人……）

ケインは、ダミアスを見つめていた。

「……失礼ですが、あなたは、ヴァルドリューズ殿ではありませんか？」

ダミアスは、ヴァルドリューズを振り向いた。

外見では、ダミアスの方が年上に見えるが、やはり、マリスに対してと同じく、彼は敬語を用いていた。

「いかにも」

そして、ヴァルドリューズの口調は、ケインたちに対するものと、あまり変わらない。

それを、ケインは、もともとそういう人物とばかり思っていたの

だが。

「やはり、そうでしたか。……実は、『魔道士の塔』本部で、あなたを何度かお見掛けしていたものですから。このようなところでお会い出来るとは、光栄です」

ダミアスは、いくらか親し気な口調になっていて、少し微笑んでもいた。

「噂では、確か、ラータン・マオ王国の宮廷魔道士になられたとか？」

「訳あって、今は国を出てきている。『魔道士の塔』からも脱退しているのです、そちらから見れば、私もグスタフ同様ヤミ魔道士に変わりはないだろう」

ヴァルドリューズは、抑揚のない口調で語る。

ダミアスは、意外そうな表情になった。

「……そうでしたか。……しかし、それでは、なぜ、カシスルビーが付いたままなのですか？ それは、授けた者から授かった者へとお互いの魔力が引き合ってこそ、初めて額に付くというもの」

言われてみればそうだと、ケインも思った。

ヴァルドリューズは、もう宮廷魔道士ではないのだから、宝石は本来ならば取れてしまうはず。

「これは、ラータンのものではない。ベアトリクス王国のカシスルビーだ」

「ベアトリクスの……！？ なぜまた……？」

「ベアトリクス王国の元宮廷魔道士、ゴールダヌス殿から頂いたものののだ」

ダミアスの顔色が変わった。

「ゴールダヌス……！ あの大魔道士ゴドリオ・ゴールダヌス殿だということですか！？」

ダミアスは、しばらく言葉が告げないでいる。

そのダミアスの驚きぶりで、ケインは、その大魔道士が、とてつもなく偉大な存在だと知った。

「私は、彼から彼女を守るよう、使命を受けたのだ」

（ベアトリクス元宮廷魔道士が、マリスを守れと、東洋のラータ
ン・マオの宮廷魔道士であったヴァルドリューズに命令した……？
）

どちらも、大きな国として知れていたが、国交があったとはケイ
ンは聞いたことがない。

（なぜ、そんな国の魔道士同士が……？ ヴアルも、ベアトリクス
の宮廷魔道士になったんだだろうか？ いや、それは、前に否定して
たし……。

それに、ヴァルは、ベアトリクス王からではなく、『元宮廷魔道
士』からルビーを預かったと言った。……いったい、どういうこと
なんだろう？ そして、マリスは……？ 騎士とか隊長だかって
のは……？ ）

「その話は、折りを見て話すとして、ダミアスさん、悪いけど、も
うひとつ頼まれてくれないかしら？」

考え込んでいたケインであったが、マリスのあどけない声に遮ら
れた。

「お茶をご地層して頂けない？ あたし、喉渇いちゃったわ。

できれば、マラスキーノ・ティーがいいんだけど」

話の腰を折ったマリスを、恨めし気に見るケインであったが、詳
しくは、皆が揃った時に改めて話すということになり、話はそこで
終了してしまった。

町の酒場で、ケインたちは紅茶を飲み終わると、ダミアスは元通
り独房へ（ケインは、それを、なんだか可哀相に思った）、ヴァル
ドリューズは宿屋へ、マリスは、女官になったという話であったが
……

「いやよ、あたし、お城に長くいると、アレルギー起こしちゃうの
よ！」

と、おかしいことを言うと、マリスも単独で取った宿屋へと帰っ
ていったのだった。

宿への帰り道を、マリスとヴァルドリューズが並んで歩いていく。
「……倒せたね、あいつを」

ぼそつというマリスを見もせずに、ヴァルドリューズは無言で頷く。

「じいちゃんの編み出した召喚技『サンダガー』で……、やっとな……」

立ち止まると、マリスは、ヴァルドリューズの胸にすがりついた。小さく嗚咽する彼女を、ヴァルドリューズは柔らかく包み込んだ。
「ひとつの戦いは終わった。だが、まださらなる大いなる敵が潜んでいる。」

今夜は、ゆっくり休め」

「うん。あなたもね、ヴァル。あたしには、これと、魔力を抑えるあの甲冑もあるから、もうしばらく別行動でも大丈夫よ。それに、もうちょっと一人を楽しみたいしね」

そういつて、マリスは、胸元の、小さな碧い石の付いたネックレスに、手を当てる。

「ヴァルも、ゆっくり休んでね。ヤツへの攻撃と、獣神の召喚で、結構魔力消費しちゃってるんだから。幸い、アストーレではお祝い事で何でも安くなってたから、インカの香もまあまあの量、手に入ってたし、しばらく、結界には、それを使えばいいわ」

ヴァルドリューズは、マリスの部屋に着くと、棚にある香炉にインカの香を、少量入れる。指をパチッと鳴らすと小さな炎が香に灯り、燃やしていく。

「ありがと。お休み、ヴァル」

マリスは、何も言わずに部屋から出て行くヴァルドリューズの背中をしばらく見送ってから、ドアをゆっくり閉めた。

「おお、良かった、ダミアス！ やはり、そなたは事件の首謀者などではなかったのだな！」

アストーレ王は、釈放された参謀ダミアスの手をしっかりと握っていた。

夜が明け、朝食の後、ケインは、事件の真相を、サロンに集まった人々に説明する。

事件は、北の森に潜んでいたヤミ魔道士が、アストーレの内紛を企んで仕組んだ、ということにしておいた。

森に落ちていたグスタフのマントの一部を、倒した証拠に見せる。クリミアム王子クリストフは、終始青白い顔をして、ケインを気にして、ちらちらと見ていたが、ケインは、彼のことは何も触れないでおいだ。

「よく解決してくれた、ケイン・ランドール。そなたには、後日まとめて褒美を授けよう。」

そして、明日からは、正規の警備隊として迎え入れ、王女の直属の護衛に任命したい。

「今度こそ、引き受けてくれるであろうな？」

王の隣にいる不安げなアイリス王女と目が合った。

その後ろでは、ダミアスが、微かに微笑んでいる。

「謹んで、お受け致します」

ケインが、そう最敬礼すると、王女の顔は、パーツと晴れ上がった。いった。

「明日は、外国の方々の、最後の滞在日でもある。」

今夜は、最後の舞踏会じゃ。盛大に、執り行おうぞ！」

王の言葉に、その場にいた人々は、歓喜の声を上げた。

アストーレ城を包んでいた不穏な空気は一気に吹き飛ばされ、晴れ渡った青い空のような人々の心からの笑顔が、広間をいつまでも賑わしていた。

ケインは、カイルとともに、宮廷舞踏会のサロンの隅に、紺の詰め襟の警備服で立っていた。

パーティー用のため、金色の紐や、アクセサリーが付いていて、普段のものよりは、上質な装いである。

一連の事件を解決した後なので、警備と言っても気は楽であった。「良かったな、ケイン！ 明日からは、お姫様とお近付きになれるじゃん！」

カイルが、こそこそ耳打ちして、肘でケインをつついた。

「バーカ、俺は、真面目に仕事するんだからな」

ケインの方も、くだけた様子である。

長いテーブルには、いろいろなパーティー料理が並べられ、宮廷音楽家の奏でる優雅な調べが、室内に充満していく。

貴婦人たちは、ごてごてのドレスを重たそうに引きずり、焼き菓子をつまみながら、お喋りを楽しんでいる、男性貴族たちは、美しく着飾った女性たちに、ダンスの申し込みをしている。

「時に、ランドール。君は、ダンスは出来るかね？」

ふと、王がダミアスを連れて、ケインに尋ねた。

「ダ、ダンスでありますか！？ ……私は、粗野な武人です。ですから、ダンスなどと優美なものとは、あまり縁がないものですから……」

俺も、敬語がすんなり出るようになったな、などと、ひとり感心している場合ではなかった。

「そうか。……いやいや、失礼した」

王は、にこにこ笑いながら去って行った。ダミアスも軽く会釈して、王についていく。

何の話だったのか？ まあ、いいか、とケインが思い直している
と、

「ねーねー、この赤いぷちぷちなあに？」

ミュミュが、貴族たちの好む、例の赤い粒々の食べ物を、何粒か手に持って飛んでくる。

「おい、ミュミュ、見付かったら騒ぎになるから、どっかでおとなしく遊んでこいよ」

妖精などとは、貴族は滅多に目にすることはない。モンスターのいる場所と似たようなところに、密かに棲息しているのだから。ところが、ミュミュは、ケインの忠告など聞きもしない。

彼女にとってはボールのような赤い粒に、大きく口を開いて、カブツと大胆にかぶりつく。

ケインとカイルの予想通り、赤い汁が、ぴゅっと飛び出した。

「あーん！ 汚れちゃったー！」

「あーあー、もう、しょうがないなー。だから、おとなしくしてろって言ったのに」

ケインは、近くにあったナプキンで、彼女の、赤い液体のかかった部分を拭こうとした。

「やーん、何すんの、くすぐったーい！ ケインのエッチ！」

「なっ、なんだよ！ 拭いてやってるんじゃないか」

ミュミュは、白いナプキンをケインから奪い取ると、それに素早く包まった。

白い布が、スーッと空中を移動していく。

「こら、余計目立つぞ！ 相変わらず、変なヤツだなあ」

「あいつも、あれで、一応、女の子なんだよ」

「ふーん、そういうもんかなあ」

ケインがぶつぶつ言い、隣では、カイルが笑った。

「お飲み物は、いかが？」

見ると、クレアが、丸い銀色のトレイに、酒の入った杯をいくつか乗せて、ケインたちの前に現れた。

「警備の方に、陛下から差し入れよ」彼女は、にこっと微笑んだ。

「クレアじゃないか！ いやあ、似合うねえ、その女官服！」

カイルが銀色の杯をひとつ取って、クレアにデレデレ笑いかけた。

ケインも、杯を受け取る。

クレアは、淡い水色の詰め襟と、半袖のシンプルなドレス姿だ。動きやすいよう、膝から下は広がる形である。

彼らからしても、普段の清楚な神官服も似合うが、パーティー用の女官服もなかなか女性らしく、似合っていると言えた。

目鼻立ちも整っているクレアは、そのようなシンプルな服でも、その辺のやたらに飾り立てた貴族たちよりも、よほど綺麗だと、ケインもカイルも認めた。

「やっぱ、かわいいよ、クレア！ ……ああ、ホントに、恋愛しちゃいけないの？ もったいないなあ！」

「やだ、カイルったら！ そんなこと、大きな声で言わないでよ、恥ずかしいじゃないの」

クレアが、顔を真っ赤にして、慌ててそそくさと他の警備兵のところへ、杯を配りに行ってしまった。

ケインも、微笑ましそうに、その後ろ姿を見守っている。

「そういえば、ヴァルとマリスは、どうしてんだろうな？ 城には、現れないつもりかあ？」

と、いいながら、カイルが、テーブルの上から骨付き肉を取ってきて、かぶりつく。

「おい、勤務中だぞ」仕方のなさそうに、ケインが一応忠告してから、答える。

「ダミアスさんが、ヴァルに何か頼みたいことがあるんだそうだ。だから、ヴァルは、そのうち宮廷にも顔出すんじゃないかな。」

マリスは……、あいつは、よくわからないけど、ヴァルの用が済むまでは、この国で遊ぶんだって言ってた。ここでの自分の仕事は、もう終わったんだと」

カイルが驚いて、ケインを見た。

「マリスに会ったのか！？」

「え……？ ああ、昨日、偶然な。あれ、言わなかったっけ？」
「聞いてねえよ」

昨夜、クレアと牢に行った時、マリスとは途中で一緒になり、その後、北の森でヤミ魔道士やモンスターたちと戦ったことを、ケインは簡単に説明した。

「ふ〜ん。……あいつ、結構スタイル良かっただろ？」

カイルは、平然と肉を頬張りながら、話の本質とは全然違うところに反応していた。

「は！？ ……ああ、まあな。なんで、そんなこと知ってるんだ？」

「カイルは、得意になった。」

「そんなのわかるって。この俺様の眼力を持っていれば、例え男装してたって、女のスタイルくらい、いつでも見抜けるのさ！」

『マドラス』と一週間も一緒にいてさえ、彼がその正体を見抜けなかったことを思うと、ケインはおかしくてしょうがなかった。

「とにかく、今のところ、この国にしばらく滞在するってんなら、ちようにいいや。俺も遊ばーっと！」

いつも遊んでいるようにしか見えないカイルであったが。

「おい、カイル、城の者には手を出すなよ。例えば、女官とか」

「鋭い！！ 何でわかったんだ！？」

「今までの行動パターンを見てりゃ、わかるって。これからは、俺も姫の護衛で、いちいちお前に構ってられなくなるんだからな。ちゃんと自分で気を付けてくれよ」

言っていて、ケインは、カイルの保護者みたいな気がして、イヤに思った。

ちらっと、クリストフ王子と目が合ったが、相手は、バツの悪そうな顔で、すぐに目を反らしてしまった。

王女には、相変わらず、マスカーナとデロスの王子たちが話しかけていた。

婚約までは発表されなかったが、姫の婚約者もいずれは決まるのだろう、それも、王族の運命か……と、ふと、ケインは考えていた。

舞踏会は、盛大に、空が白み始める頃まで続いた。

よくもまあ、あのような重量のあるドレスやタキシードで、一晩中踊っていられるものだ、ケインのような庶民は感心するほどであった。

数時間後には、王女の護衛の仕事と切り替わる。

その晩――もうほとんど明け方であったが、ケインは、仕事を終えると、宿舎のベッドに倒れ込んだ。

しばらく過ごすアストーレでの新たな生活が、これから始まろうとしていた。

因縁の対決（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございました！！

『Dragon Word Saga2』旅の仲間（後編）へ続きます。

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2464v/>

『Dragon Sword Saga 1』旅の仲間（前編）

2011年8月6日01時20分発行